
魔人の後継者

桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人の後継者

【Nコード】

N4054T

【作者名】

桜花

【あらすじ】

お決まりの転生を果たしたとある青年。

3つの能力を貰い、産まれた世界は……なんとネギま！

しかも両親は「千の呪文の男」と「災厄の魔女」だった！

原作主人公であるネギ・スプリングフィールドの兄役の座に座ってしまった青年は、果たしてどうやって生きていくのであろうか。

主人公最強系、原作ブレイクありの自己満足小説となりますので、
そういうのが苦手な方は見ないほうがいいかと思われます。ご注意ください。

第一話（前書き）

はじめまして、桜花です。

つたない二次創作ですが、気が向いたら呼んでやってください。

第一話

— よお、青年。

・・・誰だお前？

— 俺か？俺は神だ。G・O・Dだよ。凄いだろ？

・・・その神が何か用か？まさか神自ら天国に連れて行ってくれるのか？

— あー、違う違う。お前、恵まれない一生だっただろ？だから、俺から少しプレゼントをやりようと思っとな。

・・・俺はそれなりに幸せだったが？紛いなりにも20歳まで生きられたしな。

— 普通はそれの4倍は生きられるんだぜ？まあ、大人しく貰えるもんは貰っておけよ。

そのプレゼントの内容にもよるが・・・。

―そりゃそうだ。お前、新しい人生を送ってみたいか？

・・・何？そんなこと出来るのか？

―おうよ。俺は神だぜ？不可能はねえんだ。さらに今なら好きな能力も3つだけ付けてやるよ。

・・・それは俗に言う“チート付き転生”とやらか？

―あー、まあそうとも言うな。で？転生するのか？しないのか？しないならこのまま天国行きだが。

・・・転生させてくれ。

―オーケーオーケー。じゃあ好きな能力を言いな。どんなものでもつけてやるぜ。

・・・スキル“騎乗B”と“魔力放出A++”、あと黄金色のパッチが欲しい。

―スキルは・・・Fate／stay nightとやらのか。パ

ツチ？聞いたことないな・・・。

神でも知らないことがあるのか？

―そりゃそうだ。俗世の全てに気を配ってられるほど俺は暇じゃねえ。異世界から侵略しにくるバカの始末とかで忙しいんだ。

そ、それは大変だな・・・。

―つと・・・パッチってのはエヴォリミットとかいうゲームのか？黄金色だと・・・“念動力”とそれに伴う知覚？ずいぶんとありふれた能力だな・・・。こんなんで良いのか？

ああ。使い方次第ではあらゆる異能の中で間違いなく最強だからな。

―ふーん。じゃあ、教師も付けてやろう。お前が転生後6歳の時に練習用の空間と教師を派遣してやるよ。

何から何までありがたい。

―まあ、気にすんなよ。結局は全部俺の気まぐれさ。じゃ、設定も終わったし送るぜ？

・・・頼む。

―さて、最後に一言だけ神らしいことを言ってやろう。“生きろ”。生きてこそその人生だ。辛かろうが苦しかろうが決してあきらめるな。死なないように死ぬほど足掻け。見苦しいと思われても生に執着しろ。わかったな？

・・・ああ、わかった。

―では、お前の新たな人生に幸多からんことを祈っている。

―行ったか。やれやれ、これで生前の誓いは果たしたぜ？○○よ。
・・・さて、俺は旧神どもの相手をしてくるか・・・。

第二話（前書き）

軽く主人公の設定をば・・・

生前の名 不明

20歳で死亡。死因は白血病。

小学校の時に発症し、以後ずっと病院で過ごす。

両親は有名企業の重役を勤めていたため、多忙ゆえに見舞いなどにはめったに訪れなかった。

そのため、両親の愛情を知らない。

人間にしては珍しく、何の感慨もなく死んだ人物。

第二話

目を開ける。

カーテンの隙間から差し込む朝日がかなり眩しい。

しかし、ずいぶん懐かしい夢を見たな。

あの神は元気だろうか。……ん？神に体調ってあるのか？

俺が“この世界”に産まれて半年。

すでに自我は芽生え、目も見えれば耳も聞こえる。

だから可能な範囲で情報収集をして過ごしていたんだが……。

最初は驚いた。

なぜなら魔法が平気でその辺に存在しているとわかったからな。

しかも、“魔法の射手”とか“雷の暴風”とかどこかで聞いたことのある魔法もちらほら。

しかも親が親だ。

俺の父親の名はナギ・スプリングフィールド。

母親の名はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア。

その名前で確信したよ。

ここ、俺が以前病室で暇つぶしに読んでた漫画“魔法先生ネギま”の世界じゃねえか。

神め、中々刺激に溢れまくった世界に送りやがったな。

ま、こうして健康な体で新しい人生を謳歌出来るのは素晴らしいことだが。

さて、俺の自己紹介といこうか。

俺の名はアウラ・スプリングフィールド。

持つてる能力はF a t eスキルの“騎乗B”と“魔力放出A++”。そして右手首に装着された黄金色のパッチ。

使える力は勿論“念動力”。

え？パッチを知らない？そう言う人は“エヴォリミット”とググって見てくれ。

どうやらこのパッチ、他人には見えないらしい。しかも最上級の魔法発動体としても使用可能という逸品。

“進化の階段”はまだ登ってない。ていうか登る気は無い。

確かに力は得られるけど、代償として“人”という種から遠ざかって行く上に、“進化の階段”が現れるのは“力を渴望”しながら“瀕死状態”にならなきゃならん。

まさにハイリスク・ハイリターン。とてもじゃないが命と進化を天秤にかけるわけにはいかない。

ま、死亡フラグ満載の世界だが気楽に生きるとしよう。

俺の新しい人生は始まったばかりだからな。

第三話

さて、生まれてから1年半が経過した。

すでに俺は立って歩き、言葉も喋ってる。

普通の子供ではあり得ないスピードなんだが、特に両親は疑問に思わなかったらしい。

「流石、俺の子だ!」とか「流石、妾の子じゃ!」とか言ってる普通に喜んでた。

立ってからさらさら成長速度が加速し、読み書きも大半出来るようになったので、親父から戦闘技術と魔法を習ってる。

最初は渋ってた親父も、俺が見よう見まねで魔法の射手を撃っているのを見て教えることに決めたらしい。

今、まさに戦闘形式で教わっているところだ。

俺の装備は一般品の杖型魔法発動体。まだパッチで魔法は使っていない。怪しまれるからな。

対する親父は大戦期から愛用している杖だ。

「ほれ、戦闘中によそ見も考え事もするんじゃない。 “白き雷” !

「!」
「」

親父のその言葉で現実に戻された俺は、直後に伏せ、そのまま横に転がる。

それと同時に親父から放たれた白銀の閃光が俺の髪をわずかにかすって逸れていき、ズドォォン!! と俺の遙か後方で地響きと共にク

レーターを造ったのが分かった。

「・・・今のって当たったら死ぬよな？」

思わず垂れた冷や汗。

おい、このバカ親父。息子を殺す気か？

「んー、大丈夫だろ。なんてったって俺の息子だし」

最近俺が何を言ってもそう言うよな？

・・・まさか、それを言えば許されるとでも思ってるのか？

「なに、当たらなければどうと言うことはない」

いや、そんなドヤ顔で見られても・・・。

だがな、親父。“白き雷”クラスの呪文なら既に魔道書を読んで習得済みだぜ。

・・・くっくっく。見て驚け、バカ親父！！

「プラクテ・ビギ・ナル“闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。白き雷”！！」

「んなっ！？」

俺が“白き雷”を撃ったことに驚いたようだったが、難なくそれを避けた親父。

チッ！流石は英雄ってところか。

「お、お前、俺を殺す気か！？」

じゃあ、それを息子に撃ちこんだ貴様は何だ。

「いや別に・・・」

「つーかもう“白き雷”を撃てるのかよ。じゃ、これはどうだ？」
そう言って親父が撃ったのは・・・

「魔法の射手、雷の300矢」！！」

魔法の射手だった。

ただの魔法の射手と侮るなかれ。バカみtainな魔力が込められた魔法の射手だぞ？一発が下手すりゃミサイル級の威力があるわ！

「！！！！」

避ける、除ける、とにかく避ける。避けなきゃ死ぬ！

まあ、“念動力”で力場の壁を作れば余裕で防げるんだが・・・使わない。手札は隠しておく方が良いしな。

っていうか年端もいかぬ我が子に魔法の射手を300も撃ちこむなよ！

「プラクテ・ビギ・ナル“雷の精霊150柱！集い来たりて敵を撃て。魔法の射手・集束・雷の150矢！！”、必殺、雷光拳（仮）
！！」

避けながらも親父に接近し、原作でもネギが使ってた雷属性の魔法の射手を乗せた拳「雷光拳（仮）」でぶん殴る。

しかし、手ごたえは全くなく、見るとすでに親父は消えうせていた。
直後、背後に感じた気配。

すばやく後ろを向くと、すでに親父は魔法を放っていた。

「残念。ま、筋は良かったぜ？ “雷の斧”」

巨大な雷の斧が俺に当たり、俺の意識は暗転した。

一時間くらいして俺は目覚めた。

まだ身体がビリビリと痺れている。どんだけ魔力込めたんだよ……。

ちなみに当事者の親父は母ちゃんから絶賛説教され中だった。

「こんのバカ者オオオ！！！！」

「ぶべらっ！！」

バチーーン！！！！という衝撃音。続いてドゴオオオン！！！！と言う
破碎音。

バチーンが母ちゃんのビンタの音で、ドゴーンがビンタで吹っ飛んだ親父が壁にぶち当たって壊した音だ。

怒ってる母ちゃん怖ええ……背後に般若どころか酒吞童子が見えてるぜ……。

「まだ1歳半のアウラに“雷の斧”を叩き込むとは何事じゃ！！」

「でもよー、アウラの物覚えが良すぎてさー。つつい熱くなったというか……」

全く反省していない親父。

おい親父、マズイって。良く見ろよ、母ちゃんの特徴ある眉毛の端っこがピクピクしてるだろ？ あれはブチ切れる寸前のサインだぜ？

「この・・・」

うお！？手に込めた魔力が可視化領域まで到達して具現化してるだ
と！？

「反省しろ！鳥頭ああああ！！！！」

「ぎゃああああああ・・・」

光輝くアップパーカートを叩き込まれた親父。そのまま窓を突き破っ
て数十メートルは飛んで行った。・・・シャ○ニングフィ○ガ
！？

「さて、アウラ。怪我は無いか？痛いとか苦しいとか無いか？」

「うん、ない」

「そうか。それは良かった」

ニコツと微笑む母ちゃん。なるほど、この良い笑顔で親父を落と
したか。

しばらくして件の親父が復活して戻ってきた。

「痛ってえ……。何で俺だけ・・・」

「当然じゃろう。どこの家庭を探せば息子に“雷の斧”を叩き込む
父親がいるんじゃない」

「・・・あ？ここにいる「何か言ったか？」・・・いや、何でもね
え・・・」

親父エ・・・。

「なあ、アウラ。今どれくらいの攻撃魔法が使えるんじゃない？」
「使える攻撃魔法は、っと。」

「魔法の射手」・“白き雷”・“雷の斧”・“雷の暴風”くらい？
あと基礎系は全部できる」

「見事に雷系に偏っておるの」

そりゃそうだ。他の魔法も知っちゃいるが、実際に誰かが使ってるのを見たことがねえんだもん。見たこともない魔法なんて危なくて使えるかっての。

幸い、うちの親父は優秀な雷系魔法の使い手だから俺も覚えられたんだがな。

「ナギ、アウラにはちゃんとした魔法の教師をつけた方が良いのではないか？」

「大丈夫だろ。俺だって学校中退で英雄にまでなったし」

「アホ。お前みたいなバカの二の舞にしたくないから魔法をちゃんと学ばせたいのじゃ」

まさに正論。流石の親父もぐうの音も出なかった。

「お前さり気にひでえな・・・。しかし魔法の先生か・・・。お！アリアドネーはどうだ？確かセラスがいるだろ？」

アリアドネーか。確か有名な魔法学校が密集した学術都市だったか？
？ちょうど正式に魔法を習いたいと思ってたしな。行きたいと言えは行きたい。

「む、鳥頭にしては名案じゃな。連絡を取ってみるとするか」

そう言って早速親父の名で手紙を認め始める母ちゃん。

「よっし、じゃ俺はアウラと遊んでくるぜ」

「危ないことはするのではないぞ」

「わかってるって。行くぜ、アウラ」

「ん」

俺の手を引っ張って家から出る親父。

その横顔は、どこか楽しそうだった。

第三話（後書き）

主人公 アウラ・スプリングフィールド

20歳と言う短い人生を終え、天国へ行くのかと思ったら神様によって転生の道へ。

その際、スキル“騎乗B”と“魔力放出A++”、黄金色のパッチ（マーズサイト）を貰う。

スプリングフィールド姓からわかるように、原作主人公ネギ・スプリングフィールドの10歳上の兄。

外見は両親に全く似てない。ちなみにアルビノ体質。

とあるゲームの究極AIに瓜二つの、乳白色の髪を持つ男の娘。

母親の胎内で何か相乗効果的な現象が発生したらしく、父親の数百倍もの魔力量や氣の量を有し、さらに母親から王家の魔力（完全魔法無効化能力）も受け継いだ。

無論、圧倒的なバトルセンスや魔法の才能も受け継いでいる。

得意属性は“雷”“氷”“闇”“火”“影”

第四話

それから5年の月日が流れた。

時は1991年。あとわずか9年で21世紀だ。

俺も6歳になり、正式にアリアドネーの魔法学校に通うことが決定した。

もつとも、強さだけなら既に本国ランクでSAにまで到達してるんだけどな。

話は変わるが、俺の得意属性は“雷”“氷”“闇”“火”だった。

“雷の斧”事件から1年くらいして、突然思い出したように親父が「あ、いっけね忘れてた。おい、アウラ。これからお前の得意属性を調べるけど良いよな？ 答えは聞いてない！」

とか言いながら、部屋でゴロゴロしていた俺を野外へ引きずり出して何か形容しがたい方法で調べてくれたんだが・・・。

ちなみに親父の得意属性は“雷”“光”“風”“火”で、母ちゃんの得意属性は“水”“風”“闇”らしい。

俺の得意属性である“氷”がどこから出てきたのかはわからないが、俺的には親父の“風”と母ちゃんの“水”が合わさった物だと思う。

ここで困ったことが起きた。

親父は雷バカであり、母ちゃんはあまり攻撃系の魔法を使わない。つまるところ、雷属性魔法以外の教師がいないのである。

俺がどうすんだよ？と親父に聞いたら、しばらく考え込んでた親父が

「んゝ・・・あ！ちよつと待ってろ」

と言って消えた。

その後2日くらいで帰ってきた親父は何を思っていたのか・・・

「よおアウラ。お前の教師を連れて来たぞ」

「はーなーせー！！この私を誰だと思っている！！」

金髪幼女を連れてきた！！

「母ちゃん！！親父が幼女を誘拐してきた！！！！」

即座に家に駆け込んで叫ぶ。

何か後ろで「誰が幼女だああ！！！！」とか聞こえるけど無視。

「何じゃとおおお！！！！！！」

と同じく叫びながら飛び出してきた母ちゃん。

ちょうど昼食の調理中だったのか、右手に包丁、左手にお玉を装備している。防具は当然エプロンだ。

その完全武装母ちゃんは、親父と金髪幼女を視界内に捉えると、即座に親父へと攻撃を開始した。

「この変態がああ！！！！いつかやるとは思ってたが、ついにやったかああ！！！！」

「ちよっ、包丁はシャレにならな・・・おわっ」

あ、お玉が親父の障壁を抜いて頭にクリーンヒットした。

ズガアアン！！という決してお玉では出してはいけない音がしたぞ。最近知ったが、母ちゃんには“王家の魔力”と呼ばれる、通常の魔力とは真逆の性質を持つ魔力が備わってるらしい。何でもあらゆる魔法を“無効化”出来るのだとか。

そう言えばそんな設定もあったな。いいなあ、王家の魔力。俺も受け継いでねえかなあ。

「痛てえ・・・。ていうか話を聞けよアリカ」

「何じゃ。何か申し開き出来るようなことでもあるのか？」

そう言っただけ早くも立ち直った親父を鬼の形相で睨みつける母ちゃん。おー、怖っ。久しぶりに背後に酒吞童子が出てるぜ。

何か幼女が「ば、バカな。酒吞童子だと！？や、奴は確か討たれたのでは・・・」とか呟いてるし。そうか、幼女よ。お前もあれが見えるか。

1時間後。

「と言うわけで、こいつがお前の先生だ！！」

「いや、どういうわけか知らねえし」

幼女の頭にポン！と手を乗せながら言うズタボロな親父に、思わず言う。

アニメや漫画じゃあるまいし、そんないきなり「と言うわけで」と言われても知らんがな。

って、ここは漫画の世界だったな。

「おい、何で私がこのボーヤの教師にならなきゃならないんだ？」

心底嫌そうな顔の幼女。

本人としては怒っているのかもしれないが、外見ゆえにちっとも怖くないのが哀れである。

「まあ、そう言うなって。こいつは大した逸材だぜ？なんせもう“千の雷”使えるからな」

その通り。最近親父に習って使えるようになったんだぜ。まだまだ親父の半分くらいの威力しか出ないが。

「何だと！？おい、お前。何歳だ？」

「あ？2歳半だが？」

「2歳半で上級古代語魔法だ！？」

チートの子はチートか・・・なんて言って考え込む幼女。

おい、幼女。あんなのと一緒にするな。悲しいだろ。

「ふむ、興味が湧いた。良いだろう、このエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが責任もって面倒見てやろう！」

バーーーン！！という効果音が合いそうな感じで無い胸を張って偉そうに言う幼女、改めエヴァンジェリン。

・・・ん？エヴァンジェリン？そうか、この幼女があのエヴァンジェリンか。

「お前、「闇の福音」か？」

「フッ・・・その通りだ。今後はマスターと呼べ」

んゝ、ま、いっか。折角の親父以外の魔法使いだしな。

「了解、マスター」

「じゃ、まずぼーやの得意属性はなんだ？」

「あ、アウラは“雷”“氷”“闇”“火”が得意だぜ？」

会話を割り込む親父。ていうかまだ居たのか、親父よ。

「ふむ、“雷”はそのバカに教わってるだろうから良しとして“

氷”と“闇”は私の得意属性だから教えるところ。問題は“火”だ。流石に私も“火”は苦手だ」

真祖の吸血鬼だから。と続けたエヴァンジェリン。
そう言えば真祖だったな、この人(?)。

ちなみに真祖とは、簡単に言えば弱点が無い吸血鬼らしい。
不老不死であり、膨大な魔力を持つ闇の眷属なのとか。

「俺も火はあんまり勉強して無かったからなあ。精々使えて“紅き焰”が限界だぜ」

ダメ親父だな。

「まあ、“火”は考えておこう。とりあえずしばらくは“氷”と“闇”の練習だな」

ついてこい。そう言うときエヴァンジェリンはスタスタと近くの広場へと歩いて行った。

「じゃ、俺はこれから仕事だ。しっかり習って強くなれよ？」

「ん。仕事頑張れ」

「ああ。じゃあな。アリカによろしく言っといてくれ」
と言って手を振り、親父は“転移魔法”で消えた。

さて、俺も行くか。

その後、俺は高笑いする幼女にズタボロにされた。
腹いせに“念動力”でこっさりすっ転ばせた俺は悪くない・・・はず。

第四話（後書き）

ナギとアリカの得意属性うんぬんは捏造ですのでご注意ください

第五話

「おい、何をそんなに考え込んでる？」

「ん？ マスター、か」

俺の傍らにマスター師匠であるエヴァンジェリンが座った。

時刻は深夜、と言っても“外”でならだが。

ここはエヴァンジェリンが持つダイオラマ魔法球の中にある城のバルコニー。

確かレーベンスシュルト城だったか？ 大した城だよ、これ。

ちなみにダイオラマ魔法球とは“外”の1時間が“中”の1日になる優れ物。

ただし、その分早く老化してしまうという欠陥品でもある。

真祖であるエヴァンジェリンにはピッタリの代物だが、人間である俺にとってはあまり長く入ってたくないものである。

俺はそこで眼下の景色を眺めながら今までを思い出していたのだ。今から4年ほど前に始まったエヴァンジェリンとの師弟関係も、かなり良好である。

彼女からは様々な知識や魔法技術を習った。

“氷”と“闇”の属性魔法は勿論、魔法系を作りだして上手く使う

方法だとか、護身術としての合気道、最後には彼女自身が編み出した魔法である“^{マギア・エレベア}闇の魔法”も伝授してもらった。“闇”に適性ある俺は、特に“闇の魔法”と相性が良かったらしい。

物凄く濃い内容だったので、4年なんてあっというまだった。そして、明日から俺はアリアドネーの学校に通うことになる。勿論、エヴァンジェリンともお別れだ。

「今までの事を考えてた」

「そうか。お前は良い生徒だったよ。実に教えがいがあった」
そりゃ嬉しいな。

「マスターも良い先生だったよ」

俺の言葉にエヴァンジェリンが首を振る。

「エヴァ」

「ん？」

「エヴァと呼べ。もうお前は卒業したのだ。マスターではなく名前で呼んでくれ」

「そっか。じゃ、エヴァ。またいつか絶対に会おう。その時までにもっと強くなってみせるからさ」

俺がそう言うと、エヴァは微笑んだ。

「フツ・・楽しみにしているぞ、アウラ」

時間が過ぎるのは早い物で。

翌日、出立の時がきた。

昨日の夜は入学祝と称したどんちゃん騒ぎの晩餐会をしたため、軽く寝不足で頭が痛い。

“立派な魔法使い（笑）”の仕事で大忙しの親父も、今日ばかりは仕事を休んでアリアドネーまで送ってくれることになった。今、俺の見送りとして母ちゃんとエヴァが居る。

「アウラ、ハンカチは持ったか？財布は？着替えは？魔法発動体は？忘れ物は無いか？」

「大丈夫」

過保護すぎだろ、母ちゃんよ。

ちなみに俺の魔法発動体はパッチの他に綺麗な白銀の指輪と、特殊な魔法糸で編まれた髪留めである。

どちらもエヴァが俺にくれたもので、親父の持つ杖や母ちゃんの持つ剣と同じく最高品質の最上級魔法発動体だ。

特に髪留めはエヴァお手製らしく、俺の髪に映える綺麗な色彩をした逸品であった。

「なあ、ナギ。もうアウラは本国のレベルに換算して余裕でSAだぞ？何で学校なんて行かせるんだ？」

至極真つ当なエヴァの疑問に親父が答えた。

「ん？そりゃ当たり前だろ。いくら強くて頭が良くても結局は“履歴”とかが重視されるんだぜ？学校行ってません、なんて言ったんじや就職も出来ないだろ」

「「「・・・・・・・・」」」

親父が放ったまさかの言葉に静まり返る一同。

おい、貴様は誰だ。

少なくとも俺の知ってるナギ・スプリングフィールドはこんなセリフ言うキャラじゃねえ。後先を考えないアホだったはずだ。

見ろよ。エヴァも母ちゃんもポカーンとしてるじゃねえか。

「おい、こいつは誰だ？偽物じゃないのか？」

「そ、そうかも知れぬ。おい、ナギ。ちよつと来い！」

そう言っただけで母ちゃんが親父を引きずって行き、少し離れたところで右手を振りかぶった。

・・・振りかぶった？

直後に響く、バチーーン！という音。

どうやら、変身魔法や催眠魔法などがかかってないか確かめるために“王家の魔力”を込めたビンタでぶっ叩いたらしい。

親父エ・・・。

「エヴァよ。どうやら本物みたいじゃぞ」

「では、明日は豪雨か大雪だな。これはきっと大々的な異変の前触れに違いない」

そう言いあう母ちゃんとエヴァ。

原作では触れられていないが、さり気にとこの二人は仲が良い。たまに一緒にお茶会をしているのを見かけたりする。

「二人ともひでえぞ。俺だってたまには真面目な事を言うさ。・・・
っとそろそろ時間だな。アウラ、準備は良いか？」

「良いよ」

「ちよっと待て」

ん？エヴァよ。何故俺を引っ張る？

「絶対に再開できるようにおまじないだ」

そう言って顔を近づけるエヴァ。

そしてそのまま・・・

チュツ・・・

俺とエヴァの唇は重なった。

「・・・な」

おい、発動条件がキスなんておまじないは知らんぞ？
って、一つだけあったな。

パアアアア・・・

直後に光る地面。

良く見るとそこには魔法陣が書き込まれてた。

術式は・・・やっぱり仮契約か。

しかも俺が従者になってるし。別に良いけど。

「フッフ・・・これでお前は私のものだ」

なんて言って嬉しそうにするエヴァ。おい、バカ親父と母ちゃん、ニヤニヤすんじゃないねえ！

「おい、良かったなアウラ。ちよつとアーティファクト出してみろ」
親父に急かされる。まあ、そう急かすなって。

「ん。エヴァ、コピー頂戴」

「ん？ああ、スマン。ちよつと待て・・・ほら」
そう言ってエヴァが差し出したカード。

名前はアウラ・スプリングフィールド。まあ、当たり前か。

絵は・・・魔法陣のど真ん中で立って口元を扇で隠しているな。

色は・・・虹？ってレアじゃなかったっけ？

「アーティファクトの出し方はわかるか？ “来たれ（アダット）”だぞ」

うるさいぞ、親父。それくらい知ってるわ。

「うん。 “来たれ”」

すると、カードが扇に変わった。

「ほう、扇か。ちょっと見せてみる」

そう言われてエヴァに渡す。

エヴァは受け取ると、色々な視点から眺めて解析を始めた。

「これは・・・・・・凄いな」

「何が凄いんじゃない？」

母ちゃんの問いにエヴァが答える。

「この扇の銘は“ナナノヒオウギ”。漢字で書くと多分“七の日扇”だな。どうやらこの扇には強力な太陽の加護がかかってるらしい。魔力を込めて振れば太陽の力を放てるみたいだな」

太陽の加護って・・・吸血鬼であるエヴァが持っても大丈夫なのか？

「太陽の加護？エヴァが持っても大丈夫なのか？」

俺の疑問は親父が代わりに聞いてくれた。

「ああ、大丈夫だ。多分、アウラが持たなければ効力を持たないのだろうよ。それにしても皮肉な物だな。太陽に嫌われた吸血鬼との仮契約で太陽の加護を得たアイテムが出るなんて」

そう言って苦笑しながらエヴァが扇を返してくれた。

「アーティファクトをしまうときは“去れ（アベアット）”だぞ」
親父よ。だから分かってるって。

「ん。“去れ”」

そう唱えてカードに戻し、それを俺はポケットにしまった。

「さて、もう行くぞ。そろそろ行かなきゃマズイ」

「ん。エヴァ、母ちゃん、行ってきます」

「うむ、行って来い。しっかり学んでくるんじゃぞ」

「フツ・・また会おう。我が従者よ」

俺の言葉に頷く母ちゃんと笑いながらも手を振るエヴァ。

「よし、じゃあアウラ、この魔法陣に入れ」

「ん」

親父の言葉に頷き、魔法陣に足を踏み入れる。

すると術式が起動し、発動シークエンスに入った。

術式は・・・長距離転移か。座標はアリアドネーだろう。

振り返ると、まだ二人とも見送ってくれていたので、二人に手を振ると振り返してくれた。

「じゃ、行くぜ!!」

そして親父の掛け声で術式が発動し、俺と親父はアリアドネーへと転移した。

——アウラが知りえないお話し——

「行ってしまったな。エヴァよ、お前はこれからどうするのじゃ？」

「・・・もう少し世界を回ろうと思う。次にアウラと会う時まで、もっと良い師匠になっていたいからな」

「フツ。良い心がけじゃな。まるで恋する乙女が想い人を待っているかのようじゃ」

「んな！？だ、断じてそう言うことではない！！もし万が一従者が主より強くなったりしたら示しが付かないから修行するだけだ！」

「顔を真っ赤にして言うセリフでは無いぞ？」

「う、うるさい／＼／＼」

「ほれ、妾の事をお義母様と呼んでみるが良い」

「ええい！やかましいわ／＼／＼私はもう行くぞ！」

第五話（後書き）

アウラ・スプリングフィールドの仮契約カード

番号 41

色調 虹

名前 アウラ・スプリングフィールド

方位 中央

徳性 希望

星辰性 太陽

アーティファクト ナナノヒオウギ

ナナノヒオウギ

持ち主の魔力を太陽光線へ変換することができる扇。

擬似的だが核融合炉と同等のエネルギー放出力があり、極めて強力。
最高放出熱量は不明。

第六話（前書き）

前回のあとがきで書いた仮契約カードで色を「虹」にしたのはやりすぎたと思った。

まあ、「とてつもない出力を持つが故に」ってことで納得してください。

第六話

4月6日。

アリアドネー。

語源は知らんが、意味は確か「人一倍清らかな娘」だったか？古代ギリシャの話で、だが。

歴史ある町で、「学びたいと言う意志さえあれば、化物であっても受け入れる」という学園都市でもある。

永世中立を宣言している都市であり、自警団として“アリアドネー魔法騎士団”という防衛組織がある。

つとまあ、アリアドネーの考察はこんなもんで良いか。

そのアリアドネーの中でもひととき目立つ巨大学園、その学長室に俺と父ちゃんは居た。

目の前に居るのは、亜人のセラス総長。

何でも大戦期に俺の親父たちと一緒に最終決戦に臨んだ一人だとか。

確かにいたな。突入前に親父からサイン貰ってた人だろ？

「ナギ殿、お久しぶりです。その節ではお世話になりました」
そう言って出迎えるセラス総長。

「おう、久しぶり。今日はさ、こいつを入学させたいんだ」
俺の頭に手をポン！と乗せながら言う親父。うぜえ・・・。

パシッと手で親父の手を払う。すると、親父はちよつと残念そうな顔をした。

「この子は？」

「俺の息子。名前は・・・」

そこで言葉を切り、こつちを見る親父。何だよ。挨拶しろってか？

「初めまして。アウラ・スプリングフィールドです」

ペコっと一礼。顔をあげると、セラス総長はまじまじとこつちを見ていた。ガン見してる。

「息子さん？娘さんじゃなくてですか？」

瞬間、空気が凍てついた。

これはあれか？この俺をバカにしてんのか？

確かに俺は男には見えない。外見はぶっちゃけ前世でやったゲーム

“・hack”のアウラと瓜二つだ。

名前といい、外見といい。どう考えてもあの神が狙ってやったとは思えない。

ヤツの趣味なのか？

※いいえ、作者の趣味です。

ん？電波か？

ともあれオーケー、ならば戦争だ。エヴァに教えて貰った覚えたての“おわるせかい”をお見舞いしてやんよお。

俺から漏れ出した魔力と冷気を感知したのか、冷や汗を浮かべた親父が話を続けた。

「いや、セラス。こいつは絶対に“男”だ。良いか？絶対に“男”なんだ」

「は、はぁ。わかりました」

気圧されたように頷くセラス総長。

わかればいいのだよ、わかれば。うん。

「と、とにかく。こいつをアリアドネーに入学させたいんだが・・・まだ生徒の募集ってしてるか？」

「ええ、大丈夫ですよ。願書はまだ受け付けてます」

「お、そりゃ良かった。じゃあ願書貰えるか？受験させるから」

「・・・は？ナギ殿の息子さんなら受験なんてしなくても入学させられますが・・・？」

おい、総長自ら裏口入学させようとすんなよ。

「ダメだ。こいつの希望でな、受験からさせることにしたんだ」

「そ、そうですか。では、この願書に必要な要綱を書いてください」
そう言って願書とペンを机の引き出しから取り出したセラス総長。
それを受け取った親父は、そのままソファアに座って書き始めた。

5分くらいして親父が願書を書き上げた。

「よし、書き終わったぜ。おい、セラス。これで良いか？」

書き上げられたそれを読んだ俺とセラス総長は思わず絶句。

●○●○●○●○

親権者名 ナギ・スプリングフィールド

志願者名 アウロ・スプリングフィールド

〽(中略)〽

希望学科 全部

志願理由 セラスがいたから

〽(中略)〽

Q 入学注意事項を良く読み、それについて同意しますか？
A 嫌だ

○●○○●○○●○○○

何だこのツツコミどころが多い願書は。

まず第一に、誰がアウロだ。息子の名前を書き間違えるな。

次に希望学科が全部って何だ。俺を過労死させたいのか？

そして志願理由が“知り合いがいたから”って……。常識的に考えて絶対に通らんだろ。

最後に、我がまま言ってねえで同意しろ。しなけりゃ俺は入学できない。

「た、確かに受理しました」

思いっきり引きつった顔のセラス総長。ボソツと「わ、私が書きなおしておこう・・・」とか呟いてるし。ぜひともそうしてもらいたい。

「よし、これで手続きは終わりだな。そういやセラス。受験までアウラはどこに泊まるんだ？」

「受験生用のホテルがあるんですよ。そこに泊めることになってますが」

「そうか。じゃ、安心だな。・・・とそれと一つだけ。最後に一つだけ頼みがある。アウラを絶対に普通の子と同じ扱いで接してくれ。俺の息子だからって特別優遇したりは絶対にするな。他の子と同じ目線、同じ尺度で見てやれ。頼むぜ？」

・・・親父、不覚にも感動したぜ。そんなこと考える頭があったんだな。

見るとセラス総長も別の意味で感銘を受けたようだった。

「わかりました。ではそのように教職員達に通達しておきます」

「ありがとよ。それじゃ、俺は仕事に戻るぜ。アウラ、またな」

「うん。頑張れ」

「おうよ！」

そう言って転移で消える親父。

その際に生まれたキラキラしてる魔力残留を見やり、セラス総長は俺に「ちよっと待っててね」と言って親父が書いた願書の手直し（と言う名の改竄）を始めた。

一時間後・・・。

っと、軽く寝ちまったみたいだな。セラス総長は・・・まだ手が動いているか。

・・・いや、ちょうど終わったみたいだな。

グッと軽い伸びをして、セラス総長が立ち上がった。

手にはセラス総長の手によって書き直されたであろう俺の願書と、一枚の仮契約カード。

「さて、待たせたわね。これから受験生が泊まることになっているホテルへと案内させるわ」

そう言ってセラス総長はカードを額に当て、目を瞑った。

多分、というか間違いなく仮契約カードの機能の一つである“念話をしているのだろう。”

1分ほどで目を開けたセラス総長は、「ごめんね。準備がまだみだだから少しお話ししない？」と言って俺の前の席に座る。

話ねえ。何を話せば良いのやら。

「そう言えば、まだちゃんとした自己紹介をして無かったわね。私はセラス。このアリアドネーの一切を取りまとめる“総長”です」

「アウラ・スプリングフィールドです」

よろしく、とお互いに握手。

「姓で呼ぶと長いから名前で良いかしら？」

「プライベートならどうぞ」

「・・・普段はダメなの？」

「他の人に示しが付かないのでダメです」

当たり前だろうが。もし総長×俺なんてCPで珍妙な噂が広まったらどうするんだよ。

「わかったわ。じゃあ、これからの事について説明するわね」

そう言ってセラス総長は一枚の書類を取り出して俺に手渡してきた。

「貴方にはこの学術都市の北端にある共学制の学校を受験してもらうわ。希望学科は“総合魔法科”と言う学科よ。ここまでは良いかしら？」

軽く頷く。

「総合魔法学科と言うのは、文字通り“あらゆる魔法を総合的に学ぶ”学科なの。だけど、幅広く学ぶために“広く浅く”教えているわ。この学科の初等部で3年間学ぶことで自分に合った魔法をいくつか選び、その魔法について少し掘り下げたものを次の中等部で学ぶというのが一般的な流れね。高等部以上はもう専門教科を学ぶと言っているわ。例えば治癒魔法専攻とか攻撃魔法専攻みたいだね」

なるほど。つまり最終的には皆、何らかの魔法に特化した魔法使いになるわけか。

「試験は筆記と実技の両方があって、それら全ての点数を総合的に評価したもので合否を決めることになるの」

実技は問題ないな。筆記も・・・大丈夫だろ。多分。

「ところで貴方は今、どれくらいのレベルの魔法を使える？」

「上級古代語魔法までなら使える」

セラス総長の問いにこともなげに答える。

・・・どうした、セラス総長。頭を抱えるなんてさ。小声で「チー
トの子はチート」なんて呟くなよ。

「ま、まあ、申し分無いレベルね。得意属性は何かしら？」

「“雷”“氷”“闇”“火”の四つ」

「と言うことはまさか、“千の雷”“おわるせかい”“燃える天空”
”が使えたりのかしら？」

「うん」

もちろん使えるぜ。たかが広域殲滅魔法だろ？

何故か黙り込んでしまったセラス総長。

話し出す気配が無いので、仕方なく俺は手渡された書類に目を通した。

しばらくして再起動したセラス総長は、俺の願書などの書類を転送魔法でどこかへ送ると立ち上がった。

「さて、そろそろ準備も終わったころだしホテルへ案内するわ。一緒に行きましょう」

そう言って歩き始めるセラス総長。

俺は、その後を急ぎ足で付いて行った。

——アウラが知りえないお話し——

「誰だ？」

「久しぶりね、リカード。私よ、セラス」

「おう、セラスじゃねえか。お前が俺に連絡なんて珍しいな」

「緊急要件よ。今日、私の所にナギ殿がいらっしやったわ」

「何？あいつがか？珍しいな。何しに行ったんだ？」

「息子さんをアリアドネーに入学させるためよ」

「何だと！？あいつに息子がいたのか！？」

「ええ、今日願書を受け付けたわ。3日後に入学試験へと臨むことになるの」

「マズイな。それを知ればメガロの元老院は黙っちゃいねえぜ？間違はなくちよっかいをだすぞ」

「でしょうね。だから、貴方に連絡したんじゃない」

「・・・はあ、わかった。できるだけ情報を遮断してみるぜ。ただ万が一があるからそっちはそっちで気を配ってやってくれ」

「もちろん。ただし、扱いは一般人と同じようにするわ」

「ほう、ナギの大ファンのお前にしては珍しいな？」

「ナギ殿に頼まれたのよ。くれぐれも他の生徒たちを同じように接してやってってくれてね」

「何だ、あいつも立派に良い親やってんじゃねえか。で？どうなんだその息子は？」

「あれは間違いなく天才よ。魔力量・気量・覇気・カリスマ性。何を取っても超一級品。しかも今6歳だけど上級古代語魔法も使いこなしてるらしいわ」

「……やっぱりチートの子はチートだったか」

「私もそれを聞かされた時そう思ったわ。でもね、欠点？が一つだけあるのよ」

「欠点？」

「ええ。何というか……彼、外見が女の子なのよ。360度どこからどう見ても、ね」

「はあ？じゃあ女じゃねえのか？」

「いえ、ナギ殿が言うには“絶対に”男の子らしいわ」

「……まあ、身体が弱いとかじゃなけりゃ大丈夫だろ。じゃ、こっちは早速行動するんで切るぜ？」

「ええ、わざわざありがとう」

「良いつてことよ。俺とお前の仲だからな。またあとでラカンとか誘って一緒に飲もうぜ」

「そうね。その時は必ず行くわ」

「おう。じゃ、またな」

「はい。こちらヘラス帝国第三皇女秘書室でございます」

「アリアドネーのセラスです。テオドラ様はいらっしゃいますか？」

「はい、テオドラ様はただいま執務中です。ただ今お繋ぎしますの
で少々お待ちくださいませ」

・・・

「セラスか？今日はどうしたんじゃ？」

「久しぶりね、テオ。今日はね、面白い情報を教えてあげようと思
つてね」

「面白い情報じゃと？」

「ええ。実はね、ナギ殿の息子さんがアリアドネーの魔法学校を受
験することになったのよ」

「な、何じゃとおおお！！！ナギに息子なんていたのか！？」

「私も驚いたわ。とってもかわいい子だったわよ？」

「それは会ってみたいのう……。何とかならんか？セラス」

「そうねえ……。視察的な事でこっちに来れば見せてあげられる
んだけど・・・」

「むう……。妾はこれから数か月は国内の公務で忙しいからのう・・」

「まあ、まだ会える機会は山ほどあるから大丈夫よ。でね、一つお願いがあるのよ」

「何じゃ？ 妾に叶えられる範囲なら聞いてやれるが・・」

「そんなに難しくないわ。ラカンにこの事を伝えてほしいのよ。私じゃどうしても連絡がつかなくてね」

「何じゃそんなことか。ちょうど明後日の昼ごろに筋肉ダルマが帝都まで来ることになっておるからの。その時に伝えておく」

「ありがとう。じゃ、要件はそれだけよ。わざわざ公務の邪魔して悪かったわね」

「良いのじゃ。楽しみが一つ増えたことだしの」

「あの子も喜ぶと思うわ。それじゃ、切るわね」

「またなのじゃ」

第六話（後書き）

次話の最後にとある原作キャラが出ます。

・・・原作キャラといっても脇役ですが。

第七話

4月9日。

ついに受験の日がやってきた。

体調は良好、準備も万全。

念のためもう一度鞆の中身を確認する。

受験票と筆記用具。よし、ちゃんとあるな。

あと持ち物としては魔法発動体が必要だが、俺はすでにパッチと指輪と髪留めを装備しているため問題なし。

ていうかこれだけなら鞆なんて要らなくね？全部影に収納しときゃ良いじゃん。

ちなみに影収納魔法はそれなりに高等な魔法だ。

俺はエヴァに習ったから使えるが。

セラス総長にホテルへ案内してもらった後、早々に受験勉強は放棄した。

「受験生には必ず配ってるのよ」とか言ってセラス総長から過去問題集と参考書を押しつけられたんだが・・・タイトルがねえ・・・。

タイトル「初めての魔法・入門編」

うん、一気に読む気が失せたわ。

だってさ、俺の師は“千の呪文の男”と“闇の福音”だぞ？
初心者魔法なんて2歳になる頃には全部完璧に使えるようになってたっつーの。

そんなわけで受験勉強なんぞ放り出したわけだが・・・正直言うと暇だ。

なので、エヴァから借りた超高度な魔法技術について綴られた本を読んで受験までの3日間を潰していた。

今、俺が学んでいるのは古の昔に失われた超高速魔法運用術である“並行詠唱”。

思考を複数に分割し、それぞれの思考で複数の呪文を一度に詠唱し発動するという超高等技能。

ぶっちゃけ“並列思考”が出来ればすぐ出来るようになるのだが、

あいにく俺にはそんなスキルは無い。
よって一から練習しているのだが・・・かなり難しい。

並列思考の考え方としては、自分の中に何も無い真っ白な“部屋”
をいくつも作る感じ。

頑張ったかいもあってこの一年ほどで“部屋”を3つほど作れるようになったが、まだまだ詠唱出来るような実用段階では無い。要修練だな。

ここまでが初日。

次の日も、これまたエヴァから借りた本で勉強。

今度は“術式混合”という高等技法について。

二つ、またはそれ以上の種類の魔法を足し合わせるにより、威力の向上や効果の増幅を狙う、という高難易度の技術。

ただ、“足し合わせる”という工程が難しいだけであって、魔法自体は一度完成すれば後は正確な呪文詠唱と魔力の運用で誰でも簡単に発動させることが出来る。

“闇の吹雪”や“雷の暴風”、“春の嵐”などがこの技術を用いて作られた典型的な例だ。

あれらは違う属性どうしの魔法を組み合わせで破壊力を増大させた攻撃魔法が大半。

だが、俺が今やろうと思っているのは治癒魔法の“足し合わせ”。

傷を癒す魔法や毒などの状態異常を治す魔法等を混合させた超万能治癒魔法。

簡単な魔法なら俺でも作れるが、高等な物になると難易度は桁違いに跳ね上がる。

故に中々うまくはいかない。こちらも要修練だな。

3日目。

以前からちよくちよくやってた“念動力”の練習をした。

やることは簡単。軽い物から始め、だんだんと重い物を持ち上げていくだけ。

能力の使い始めの頃はペン位しか持ち上げられなかったが、今ではやろうと思えば一軒家位なら持ち上げられると思う。

ただ、ホテルの室内でそんなこと出来るはずもないので普通に教科書などをブンブン飛ばすくらいに留めておいた。

で、受験の日を迎えたというわけだ。以上、回想終了。

ホテルを出て浮遊魔法で受験施設へと飛ぶ。

学術都市内で移動に“転移”を使うのは緊急時以外は禁止らしいので、影を用いた高等転移魔法、通称“ゲート”は使えない。

だから、わざわざ燃費の悪い浮遊魔法なんぞで移動する羽目になっている。

ちなみに俺は空を飛ぶのに杖や箒は要らない。何かに乗らなきゃ飛べないのは二流かそれ以下の証だ！ってエヴァが言ってたからアイテム無しで飛べるように練習して覚えたのだ。

俺が受験するのはアリアドネー学術都市の最北端に位置する共学校。学校名は・・・ウエルキンズ魔法学校。何か物凄く普通の名前だな、おい。

昔、凄い魔法を開発した人の名前を取って付けてあるらしいが・・・。

ん？ってことは俺も凄い魔法とかを開発できたら学校の名前になるかもしれない？

・・・でも既にありそうだな、スプリングフィールド魔法学校。主に親父のせいで。

やたらと古めかしくデカイ門の脇へスタツと着地。

スタスタと中へ入り、会場案内の人に従って指定の教室へと移動。席へ着き、普通に筆記用具を出して大人しく待つ。

教室に入って分かったが、意外と受験者は多い。現に、今俺がいる大学の大講義室みたいな感じの教室はすでに満杯に近い。

俺の席は最上段の右端。出入口とは正反対の場所だ。

窓際なので春の良い感じの日光が差し込み、やわらかな陽だまりと化した天国のような席である。

試験開始まであと10分。その間は暇なので他の連中を観察。

・・・ガキンチョしかいねえ。そういえばここは初等部だったな。

ワンワン泣いている奴、おやつのパテチ食ってる奴、鏡を見ながら化粧している奴。

せっせと小さな紙片でカンペ作りをしている奴、何故か黒こげな奴。参考書を読みなおしている奴もいれば、俺みたいに暇を持て余して爆睡している奴もいる。

まさにカオス。なんと表現したらいいのか分からない。ていうか黒こげの奴は何があったんだよ・・・。

そんなことを考えながら見まわしていると、隣の席に金髪の少女が座った。

何気なく見てみると・・・あれ？どっかで見たことがある顔だな？

そんな俺の視線に気づいたのか、その少女はこっちを見てニコッと微笑みながら自己紹介を始めた。

「初めまして。私は高音・D・グッドマンです。高音で良いですわ。貴方の名前は？」

・・・あるえ？

第八話（前書き）

最近気がついたが、いつの間にか2万PV突破。

そのうち2万PV記念で外伝でも書くかなあ・・・。

第八話

高音・D・グッドマン。別名“ウルスラの脱げ女”。

原作では高校生。それが何故ここに居る？

今は西暦1990年。原作開始まであと13年だ。

高校生ということは原作時に16〜18歳。・・・あれ？じゃあここに居てもおかしくない？

・・・そう言えば高音は魔法世界に住んでいたっていう設定があったような気がするな。

「ちょっと！自己紹介したのに無視するってどういうことですよ！」
つと考察が長すぎたな。

「ゴメン。俺はアウラ。アウラ・スプリングフィールドだ。アウラと呼んでくれ」

そう名乗ると、高音は目を丸くした。

「スプリングフィールド？ということは、あのナギ様の？」

「ああ、息子だな。何の因果か」

本当に知名度だけは良いな、親父よ。本当はアホなのに・・・。

「それはそれは・・・大戦では両親がお世話になりましたとナギ様にお伝えくださいな」

「本人に言えば？」

「直接なんて恐れ多いですわ。それ以前にお会いできませんもの・・・」

「あ、そう・・・」
「なんじゃそりゃ。」

「というか原作とはまるで態度が違くない？」

「原作では高飛車で正義に盲目してるアホな脱衣痴女だったが・・・少し試してみるか。」

「なあ、高音の将来の夢って何だ？」

「私ですか？そうですね、一流の魔法使いになって両親を安心させることですね」

「一流？“立派な魔法使い”にはならないのか？」

「ええ。私は一流になればそれで良いですわ」

・・・おい、こいつ誰だよ。

うちの親父といい、この高音といい、みんな若干原作とは違くない？俺的には絶対に“立派な魔法使い”になるって言うと思ったのに。

もしかして、まだ正義バカに染まる前なのか？

「アウラさんの夢は何ですか？」

「“さん”は要らない。俺の夢は・・・自由に生きることだな」

「そうです。それは素敵ですわね」

・・・な、なんか調子が狂うぜ。「お父様みたいに“立派な魔法使い”にはならないのですか？」って言われると思ってたんだがなあ。

そんな俺の心を察してか、監督の先生が入ってきて辺りが鎮まった。俺も高音も前を向き、監督の先生の言葉に耳を傾ける。

・・・あれ？あの先生、どこかで見たような・・・。

「やあ、諸君。今日の試験監督を務めるジェイル・シュテリエティだ。そろそろ始めるから準備したまえ」
そう言って手を一振りし、魔法でテスト用紙を配るジェイル先生。

・・・ん？ジェイル？・・・ジェイル・・・ジェイル！？

道理で見たことあるはずだぜ。前世で暇つぶしに良く観てた“魔法少女リリカルなのは”に出てくるマッドサイエンティストそっくりじゃねえかよ。

・・・まさか、本人じゃねえだろうな？

・・・奴（神）の仕業ならあり得るから怖え・・・。

手元に來たテスト用紙を見る。

サイズはA4で、5枚綴り。

ただし、何故か5枚とも真っ白。

周囲を見る限りでは皆真っ白い用紙だったらしい。皆、齊しく首をひねっている。

「さて、全員に渡ったかね? ・ ・ ああ、白紙で良いのだよ。その用紙にはテスト開始時刻になり次第問題が浮かび上がる仕組みになっているのでね」

なるほど、フライング&カンニング防止策か。

「問題を作った私としては、諸君が全問正解して見事に合格できるように祈っているよ。 ・ ・ あ、そうそう、カンニング等の不正行為をした者は私の研究の実験台にするからそのつもりでいるように」

背筋が薄ら寒くなるような笑みを浮かべるジェイル監督。

何の研究だよ! 怖すぎるわ!!

さて、試験開始まであと1分。

他のカンニング対策は・・・、なるほどこの教室にAMFが敷いてあるのか。

ちなみにAMFとはアンチマギリンクフィールドの略で、範囲内の魔力結合&魔法効果発生を阻害・無効化する“魔法使いの死地”とでも言うべきフィールドを作り出す結界魔法。

エヴァから“概念上は存在する超高等な魔法”とは聞いていたが、まさか実在してるとは・・・。

これ使えるってことはやっぱりあいつスカリエッティだろ！

そんなことを考えていると、わき腹がチヨイチヨイと突かれる。横を向くと、高音が話しかけてきた。

「アウラはテストに自信ありますか？」

「もちろん」

こんな簡単な問題なんか満点取る自信ありまくりだ。だってさ、雷属性の“魔法の射手”の呪文を答えよ、とかだぜ？問題のレベル。

「そうですか・・・。私は少し心配です。学力的には問題ないのですが、ジェイル先生が作ったテストというのが・・・」

奴が作ったテストというのが・・・何だ？

「両親から聞いたのですが、たまにとてつもなく理不尽な問題を出すとか・・・」

なあ、スカリエッティよ。お前、まだ6歳の子供たちに何を求めているんだ？

つとそろそろ時間か。

「高音、健闘を祈る」

「ええ、貴方も」

そう短く言葉を交わし、間もなく始まるテストへと意識を切り替えた。

テスト開始まで、あと10秒。

第八話（後書き）

正直言っただのはキャラを出したかった。

なので苗字だけ変えて登場。

この先、ちよくちよく出てきますのであしからず。

第九話（前書き）

今度から定期的に投稿しようかな・・・？

第九話

さて、筆記試験は終わった。次は実技試験だ。

引率の試験官達と共に場所を学術都市外の広大な草原の傍らにある森の片隅に移し、試験開始。

内容は・・・自身の使える魔法の中で最も得意な魔法を放つこと。

んー、俺は何を撃つかな。“雷の暴風”？“闇の吹雪”？“千の雷”？“こおるせかい”？

「アウラは何を使います？私は影操術にしようと思うのですが」
傍らに居る高音からの質問。

俺は・・・“雷の暴風”で良いか。上級古代語魔法とか使ったら確実に噂になっちまうだろうし。

「俺は“雷の暴風”で良いや。あんまり大魔法を使うと騒がれる」
「あー、確かに“千の呪文の男”の再来！！とか騒がれそうですわねえ・・・」

まったくだぜ。居なくても影響を及ぼすとか・・・英雄のレッテルってスゲエな。

「でも“雷の暴風”もかなり高度な魔法ですわよ？少なくとも6歳の子が使える魔法ではありませんわ」

まあ、何とでもなるでしょ。結構この魔法は気に入ってるしな。

「次、高音・D・グッドマン！」

「あ、私ですわね。ではまたあとで」

そう言って試験を受けに行く高音。

影操術か。原作通りなら得意魔法っぽいし大丈夫だろう。

その後、高音は影で出来た使い魔的なものを数体出し“踊らせる”
という見事なコントロールを見せた。
あれは中々のものだったな。細かいところまでちゃんとコントロール出来てたし。

「次、アウラ・スプリングフィールド！」

・・俺か。じゃあ、適当にやりますかね。

呼ばれたので言ってみると、長い茶髪をサイドテールに結った20歳くらいの女性が特徴的な杖を片手に手招きしてた。

・あれ？これまたどっかで見たことあるような・・・。

「君がアウラ・スプリングフィールド君かな？私は試験官を務める高村なのはだよ。よろしくね」

・・・ちよつとマテ。高村なのは？

おい、やっぱりこの世界少しおかしいだろ。狙ってやってるとしか思えんぞ。

某管理局のエースオブエースそっくりな試験官の指示で指定された位置へ移動。

「じゃあ、結界を張るからその中で好きな魔法を使ってみてね」

―結界をお願い、ライジングハート。

―All right My master

なんてやり取りが聞こえた・・・気がしないでもない。

結界を張り終えて少し下がる高村試験官殿。

さて、じゃあ軽く魅せて（↑誤字にあらず）やりますか！

「行きます。プラクテ・ビギ・ナル“来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！”」

俺の詠唱が始まると同時に物凄い量の魔力が腕へと集中し、腕の周りで渦を巻く。

魔力はやがて風や雷となって逆巻き、解放されるのを待ち望んでいるかのように猛り狂った。

そしてそれを拳に乗せて・・・叩きつけるッ！！

「“雷の暴風！！！”」

ズガアアアアアン！！！！

俺のパンチと共に “紫色” の “雷の暴風” が解き放たれて凄まじい勢いで突き進み、高村教官殿の張った結界を轟音と雷鳴を上げながら易々と破壊。

結界をぶち破った “雷の暴風” はそのまま直進し、一直線に森の木々を薙ぎ払ってようやく消えた。

『・・・・・・・・』

先ほどのまでの喧噪はどこへやら。

試験官たちはあまりの威力に静まり返り、子供達は結界破壊時の衝撃音と雷鳴で大多数が気絶。

唯一高村教官殿のみが平気そうな顔をして、どこからか取り出したクリップボードに何かを書き込んでいた。

どうも周囲が再起動するまで暇なので、軽く補足しておくか。

普通、魔法は属性ごとに“色”が決まっている。

例えば火属性魔法なら“赤”、氷属性魔法なら“薄水”、風属性魔法なら“薄緑”など。

でも、俺が雷系の呪文を使うと、何故か紫色になってしまう。

通常なら、雷系の色は“黄”。“紫”は闇属性の色だ。

しかし、俺が“雷の暴風”を撃つと先ほどの様に紫色の雷を帯びた旋風が突き進み、“千の雷”を撃つと紫色のデカイ雷が雨あられと降り注ぐ。

効果や威力は全く同じなので放置していたのだが、俺の魔法の師であるエヴァによれば、極稀に魔法行使時の魔力光の色が違う人間がいるとのこと。

それらは「別色」アナザーカラーと呼ばれるめちゃくちゃレアな存在なのだとか。

3分後くらいして、まず試験官たちが再起動した。

かなり手際よく、気絶した子供の治療や無事だった子供達の統率をとり、事態の収束を図る。

そんな試験官達のお陰で10分もしないうちに試験は再開された。といっても俺の試験は終わりだが。

再びチヨイチヨイと手招きをしている高村教官殿。

近づいてみると、紙を手渡された。

「君、もう一回再試験ね。どうも本気を出して無さそうだし。この場所に“七神はやて”っていう女の先生がいるから、この紙を渡して試験を受けてきてね」

なんですと？再試験？うわ、めんどくさ・・・。

あ、七神はやてについてはスルーで。十中八九、“歩くロストロギア”的な人でしょ？

現在の時刻、午後4時30分。

場所は、実技試験会場よりもさらに郊外に位置する小高い丘の頂上部。

眼下に広がる荒野から吹いてくる涼しい風が気持ち良いベストなスポット。

しかも、申し合わせたように大きな木が一本生えており、青々とした葉を茂らせている。

ていうかマジでここ良い所だな。読書とかに丁度良い。

「じゃ、そろそろ始めるで。とりあえず全力で魔法を撃ってみいや」
傍らに立ってる七神試験官。

うん、やはりあの八神はやてと瓜二つな人だった。あの剣十字みたいな杖（シュベルトクロイツだっけ？）も持ってるし。

ただ、闇の書の騎士達は居ない模様。でも同僚とかに居そうだなあ・・・レバ剣持ってる部活顧問とか、ゴルディオンハンマー持ってるロリ体育教師とか、料理（という名の兵器製造）をしたがる保険医とか、狼な青い警備員とか。

「全力？」

「全力や」

俺の言葉に頷く七神試験官殿。

よろしい、ならば全力を出してやろう。我が師たちの名にかけてな。

「了解。プラクテ・ビギ・ナル“契約に従い、我に従え、高殿の王！来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！百重千重と重なりて走れよ稲妻！”」

俺が使うのは、雷系最強クラスの上級古代語魔法“千の雷”。

対軍仕様の超広範囲殲滅魔法であり、親父の十八番な魔法でもある。バカみたいに魔力を喰う魔法だが、それに見合った破壊力を持つ。ついでに言うなら、まず間違いなく6歳児が使える魔法ではない。

膨大な魔力が大気に満ち、臨界量を超えて集束していく。そして・・

「千の雷！！！」

瞬間、紫電の柱が降り注いだ。

「アホかー！ー！！どこの世界にクレーター造る6歳児が居るんや！！！！」

スパーンとハリセンでの突っ込みを入れる七神試験官殿。ていうかどこからソレ（ハリセン）出したんだよ。

俺が放った“千の雷”は、直径数百メートル、深さ数十メートルの超巨大なクレーターを造った。

小型隕石が衝突したかのような惨状に、流石の俺も冷や汗が止まらない。

・・・まさかこんなに威力があるとは思わなかった。いや、マジで。

「聞いてはいたんやけど本当に“千の雷”が使えるなんてなあ聞いていた？・・・ああ、セラス総長にか？」

「雷魔法の使い手、か・・・ああ、そう言えば適任がおるやん」
ブツブツ言いながらクリップボードを取り出し、サラサラと何かを
書く七神試験官殿。

・・・あれ？デジャヴ？

「ほれ、この紙を持ってこの場所へ行くんや。連絡はしておくから、
アリアドネーで一番の雷魔法の使い手に会って話を聞いてきいや」
そう言って差し出された紙を受け取って読むと、簡単な地図と紹介
状が書かれている。

紹介先の名は・・・フェイト・アシュタロッサ。

・・・うん、もう何も言わねえ。なんか疲れた。

ていうか何でタライ回しされてるんだよ。もはや試験とか関係無く
なってるし。

第九話（後書き）

次回、アノ人とバトル予定です。

第十話（前書き）

いやはや、難産だった。

第十話

現在、午後5時30分。

七神試験官殿と別れた後、飛行魔法でアリアドネー中心部にあるマンションにやってきていた。

大きく小奇麗なこのマンションは、なんでも職員専用のマンションなのだとか。

エントランスに入り、オートロックの玄関でルームナンバーを入力してインターフォンを鳴らす。

幸い、相手は部屋に居てくれたため、すぐに鍵が開けられた。

エレベーターで所定の階層まで昇り、少し廊下を歩いて部屋を目指す。

1分もしないでたどり着いたその部屋は・・・

「あら、いらっしやい。待ってたわよ」

セラス総長の部屋だった。

フェイトさんの部屋じゃないのかよ!!とか思ったその奴。まだまだ読みが甘いな。

何故、セラス総長の部屋にいるのかというと、ダイオラマ魔法球を使うためらしい。

すでにフェイトさんは中で待機。というか早く行ってあげないと、中の時間が過ぎちゃうぜ。

物置的な部屋へと連れられて行き、中央のテーブル上に位置するバランスポールサイズの魔法球へと近づく。

ていうかデカくね?この魔法球。いったいどんだけの値段なんだろうな・・・。

「さ、この魔法陣に乗ってね」

いや、入り方は知ってるって。

魔法陣に入ると転送魔法が起動し、次の瞬間には俺は大きな城のバルコニーへと降り立っていた。

ところで、魔法使いは魔法球に城を入れるのが通例なのだろうか？
エヴァの魔法球にはレーベンスシュルト城が入ってるし、このセラ
ス総長の魔法球内の城（テーゼンタリア城とか言う名前らしい）だ
ってそうだ。

……俺も城を入れようかなあ。小田原城とか忍城とか鶴ヶ
城とか松本城とか。

その後すぐにセラス総長も来て、一緒に大広間的な部屋へ。

するとそこには長い金髪を下の方で纏めた、我儘なボディの女性が

居た。

「待たせたわね、フェイト。この子がアウラ君よ」

そう言っただけの脇を軽く突くセラズ総長。

何これ？ 暗に挨拶しろって言ってるのか？ しょうがねえなあ・・・。

「初めまして。アウラ・スプリングフィールドです」

「初めまして。私はフェイト・アシュタロットサッというの。よろしくね、アウラ君」

そう言っただけニコニコしながら俺の頭を撫でるフェイトさん。

なんて言うか、様になってるな。母性に溢れているのを目で感じられるというか・・・。

そして、声が素晴らしい。なんせCVが水樹奈々さんだ。

いや、まあ実際に目の前で生きている人間にCVもなにもないとは思うのだが、それ以外に表現しようがないほどの素晴らしいボイスである。

・・・何を言ってるんだ、俺は。

「フェイト、アウラと軽く模擬戦をしてくれないかしら？ 同じ雷魔法の使い手として、指導してあげて欲しいのよ」

お、ナイスな提案だな。俺としてもこの人とは戦ってみたいと思うし。
欲を言うなら高村試験官殿と七神試験官殿とも戦ってみたかったんだが……。

「わかりました。えー、アウラ君ってどれくらいのレベルなんですか？」

「……メガロの物差しで言うならSAランク。アリアドネーの物差しで言うならS＋くらいあるんじゃないかしら？」

「……おい、何故それを知っている？俺の強さは親父と母ちゃんとエヴァくらいしか知らないはずなんだが？」

「S＋！？測定ミスとかじゃなくですか！？」

「事実よ。はやてが測定したんだもの」

かなり驚いているフェイトさんの問いにセラス総長が答える。
いつ測定したし。あの“千の雷”だけでランクって測れるものなのか？

「良いから、騙されたと思って戦ってみなさい。きっと驚くわよ」
総長命令よ！と言葉を続けたセラス総長は踵を返し、大広間から出て行ってしまった。

残された俺とフェイトさん。

「……と、とりあえず行こうか」

「そ、そうですね」
と、微妙なやり取りをしてセラス総長を追いかけるしか無かった。

所変わって俺達は転移魔法で魔法球内に設置された巨大な闘技場に
来ていた。
何で魔法球にコロッセオなんて入れているのか激しく疑問だが、戦
うにはベストな場所だな。

「さあ、行くよ!!」
そう言って愛用の可変動式AⅠ搭載型魔法杖（名はファルディッシ
ュ）を大鎌モードにして構えるフェイトさん。

服装は動きやすそうなアリアドネー魔法騎士団の制服である。

「どうぞ」
対する俺は普段着姿。なんて言うか・・・場に合ってねえ。

「では試合・・・・・・・・開始ッ!!」

セラス総長の掛け声と共に俺の後ろへフエイトさんが回り込む。

流石“金色の閃光”なんて呼ばれているだけはあるな。スピードが半端ではない。だが・・・

「・・・・・・・・え!?!」

俺はそれ以上のスピードを持ってして、フエイトさんの後ろへと回り込んだ。

簡単だぜ?このくらい。親父やエヴァはもっと速かったからな。

まさか子供が自分と同速だとは思わなかったのか、軽く動揺したフエイトさん。

だが、それなりに修羅場は潜っているらしく、すぐに立て直して俺に斬りかかって来た。

慌てずにエヴァに習った“断罪の剣”で迎撃。

・・・・ていうか丸腰の子供相手に大鎌で斬りかかるのはどうなんだよ。もし俺が“断罪の剣”を使えなかったら真っ二つになってたじゃん。

そんな俺の非難の視線を感じたのかは定かではないが、フェイトさんが慌てて言った。

「これ、非殺傷だから大丈夫だよ！当たってもちよつと痛いくらいだから安心して！」

いや、痛いのが嫌いだし。当たる気ねえし。

「じゃ、ちよつと強めに行ってみようか。行くよ、ファルディツシユ！」

—Yes sir! sonic move!!—

機械的な声が響き、次の瞬間フェイトさんが視界から消える。

多分、魔法杖に仕込まれている術式を用いて、超加速術式を無詠唱発動したってところか？

いや、魔法杖にA I 積んであるっぽいし、その人格に詠唱させるって言うのもアリだな。

ともかく、消えたフェイトさんが現れるのは……左かッ!？

ガキイイイン!!

無詠唱で左手にも“断罪の剣”を出して無造作に振るう。
すると、予測通りに左側へ現れたフェイトさんが振り下ろした大鎌
とぶつかり合った。

「・・・凄いな。君、本当に6歳？」

「そうですよ」

軽口を叩きながらも互いに気を抜かない。

力を込めて一閃し、大鎌ごとフェイトさんを吹き飛ばす。

わざと抵抗せずに吹き飛ばされたフェイトさんは、反動と衝撃を利用
して離れた所へ軽々と着地。

俺が吹き飛ばしたことにより戦況は一時リセット。もう一度見合う
形となってしまった。

俺を見やり、不敵に笑うフェイトさん。

「さあ、君も大丈夫そうだし、様子見もお遊びも終わりにしようか。
ファルディッシュ、オールリミッター解除」

—Yes sir—

再び機械的な声が響いた後、フェイトさんから膨大な魔力が立ち上
った。

俺よりは少ないものの、親父と同等かそれ以上の魔力量。とんでも
ない量だな。

「カートリッジ、ロード！」

ガシュン、という音がして一時的にだろうが魔力が増大し、ファルディッシュの形状が変化する。

あれは……大剣？……ザンバーか！！

おいおい、子供相手にフルドライブだと？殺す気か？

いくら非殺傷設定といえど、ショック死はあり得るって聞いたことがあるぜ？

「お待たせ。それじゃ……行くよ？」

そう言ったフェイトさんの姿はすでに無く、気が付いた時には俺の目の前でザンバーを振り下ろしているところだった。

「チッ！」

即座に両手に出しっぱなしだった“断罪の剣”をクロスさせてガードしようとするが……

「甘いよ」

ズバッ！！

「……グ！？」

直後、俺の背中が斬り付けられた。

どうやらフェイトさんは、俺の眼前へ移動↓ザンバーを振り下ろす↓途中でザンバーを止めて背後に移動↓再びザンバーを振り下ろす、という工程をあの一瞬でやってのけたらしい。

・速すぎだろ、この人。今の一撃はマジで見えなかったぞ？

親父やエヴァの瞬動はギリギリだが見切れるから、今の速さはそれ以上ってことだ。

チートや真祖以上とかどんなスピードしてるんだよ。

非殺傷だから良かったものの、あれが殺傷設定だったら確実に死んでたな。

・・・こりや俺も本気出さなきゃ失礼だねえ。

俺を斬ったフェイトさんは再び消え、次の瞬間には俺の横に現れてザンバーを振るう。

かろうじてそれを避けた俺は、瞬動で少し距離をとった。まあ、フ

エイトさんなら一瞬で詰められるだろうがね。

何を思ったのかフェイトさんは急停止し、その余波で土埃が舞い上がる。

「少し悔ってましたよ、貴女を」

「じゃあ、そろそろ本気を見せてくれる？」

ちよつと怒ったような顔をしてフェイトさんが言う。

へえ、俺が本気じゃないことに気付いていたか。

「ええ、もちろん」

見せてあげるぜ？” 今の” 俺の本気をな。

「詠唱破棄、 “こおるせかい” 固定」

俺の右手に、薄水色の無詠唱 “こおるせかい” が遅延魔法によって拘束され、球体となって留まる。

リフレイン
「復唱」

そう唱えると、今度は俺の左手に “こおるせかい” が球体となって留まった。

リフレイン

復唱は、古の昔に消え去った超高等技法の一つだ。

苦心の末にエヴァの持つ書籍から再現してみたのだが、これがまた使い勝手が良い。

あらかじめ幾つかの魔法を登録しておき、その登録してあった魔法が発動した場合、10秒以内ならばもう一度だけ同じ条件でその魔法を完全複製して発動することが出来るというチートに近い技法なのだ。

ただし、その複製後の魔法発動時に必要な魔力量が無ければ発動は不可能という制限は付くんだけどな。

「双腕掌握」

そして俺は、その両掌の“こおるせかい”を握りつぶすようにして体内へ吸収。

すると、俺の全身が薄水色のオーラに包まれると共に、純白の冷気で出来た一对の翼が生えた。

これぞエヴァが編み出した超高等技法、闇の魔法。マギア・エレベア

発動した“魔法”自体を自身の体内へと取り込むことで、副次効果付きの“魔力ブースト”をかけるという、エヴァ曰く「非常にバカげた技法」である。

“闇”に対する許容性が無ければ到底使うことなど出来はしない、超々高難易度の大魔法。

原作ではネギがこの技法を使い、“バグ”と評されるジャック・ラカンと相討ちにまで持ちこんだ。

そして今、俺が使っているのは“こおるせかい”を二つ取り込んだ術式兵装“氷結皇帝”。

触れたものを条件を無視して氷結させる、絶対零度のオーラと翼を得る術式兵装だ。

キラキラと輝く冷気の翼をバサリと羽ばたかせ、土埃を吹き飛ばす。視界が晴れ、驚いた顔のフェイトさんが鮮明に表れた。

「……無詠唱で“こおるせかい”を使うなんて凄いね。しかも“失われし技巧”ロスト・テクニクも使えるなんて」

あ、ロスト・テクニク“失われし技巧”って言うのは、すでに失われてしまい文献や言い伝えくらいしか残っていない魔法技術の事ね？

「術式兵装“氷結皇帝”。……行きますよ？」
そう宣言し、フェイトさんへと躍りかかった。

「セヤッ!!」

「・・・フツ」

超高速で振るわれるザンバーを回避し、フェイトさんの身体に触れていく。

・・・決してエロいことしてるわけじゃないよ？

触れただけで凍らせるのだから、殴ったら砕けちゃうだろう？

あくまで模擬戦なんだから重篤な怪我を負わせたり、ましてや殺しちゃったりしたら大問題でしょ。

俺としても、こんな美人を殺すなんてできるわけがない。

俺の触れた部分だけが凍りついたフェイトさん。

先ほどまでのスピードはすでに無く、俺にかかっている魔力ブーストの補助効果を除いたとしても余裕で視認できるほどのスピードにまで落ちている。

我儘ボディの半分は凍りつき、なかなかアレな感じだが・・・まあ、良いか。

「くっ・・ファルディッシュ、 “アレ” やるよ！」
| Yes sir!! |

そう言ったフェイトさんは高く飛び上がり、ザンバーをグルッと一回転させながら構えた。

「雷光一閃！ プラズマザンバー・・」

フェイトさんが高速で発動した儀式魔法により、膨大な量の雷がザンバーの刀身へと落ちる。

ガシュン！ガシュン！という音が連続ですることから推測するに、カートリッジフルロード？

あ、これかの有名なトリプルブレイカーの一角じゃん。これはヤバい。ヤバすぎるぜ。

フェイトさんの、恐らく全力であろう一撃を迎え撃つために俺も高速で詠唱を開始。

「双腕解放“こおるせかい”強制キャンセル。再魔力変換」

“こおるせかい”を二発とも解放して強制的にキャンセルし、自身の魔力へと還元。

それにより“こおるせかい”二発分の魔力を回復するが、“氷結皇帝”は解除される。

さて、攻撃特化型の術式兵装にチェンジだな。

ん？何で防御特化型か運動性特化型にしないのだった？

障壁とかで守ったら・・・多分負けるだろう。アレ、障壁突破効果とかありそうだし。

避けるなんて論外。相手の全力、迎え討たずして何が男か！っての。

「プラクテ・ビギ・ナル“来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！雷の暴風”右腕解放・固定」

まず、右腕に“雷の暴風”を遅延させて留め置き・・・

「プラクテ・ビギ・ナル“契約に従い、我に従え、炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に！燃える天空”左腕開放・固定」

次に、左腕に“燃える天空”を遅延させて留め置く。そしてそれらを・・・

「双腕掌握」

体内へと取り込んだ。

それと同時に膨大な量の炎が俺の身体から噴き上がり、辺りを燃やす。

時折奔る雷光と雷鳴は、体内へと取り込んだ“雷の暴風”が行き場を求めて荒れ狂ってるからだな。

術式兵装“雷焰嵐煌”。

灼熱の炎と迸る雷があらゆるものを壊しまくるという、非常に環境に優しくない術式兵装。

攻撃特化型の術式兵装で、攻撃力の増強と触れたものを燃やす副次効果が付く。

だが、今回に限ってそれらはどうでも良い。この術式兵装にした意味は他にある。

「双腕解放、右腕固定“雷の暴風”。左腕固定“燃える天空”。術式統合、火焰螺旋“天使の試練”！！」

そう、術式統合による融合魔法。それが今回の狙い。

火焰螺旋“天使の試練”は、旧約聖書でソドムとゴモラを滅ぼせし者、水を司りし後方の青色、“神の力”たる大天使ガブリエルの一撃を模した物。

“燃える天空”を“雷の暴風”で巻き込むことでさらに燃え上がらせ、破壊力を増大させた攻撃魔法。

わざわざ対軍仕様の“燃える天空”を対人仕様にまで圧縮したことで、極めて高い威力を誇る。

しかも形状がドリルのように、螺旋状の渦を巻いているため、障壁突破力にも優れているという美味し過ぎる魔法なのだ。

ただし、かなり制御が難しく、下手すれば自爆しかねない危険な魔法でもある。

ちなみに“雷の暴風”ではなく“千の雷”を取り込んだ場合、ほぼ100パーセント制御不能になる。

実際に以前試して暴走し、爆発して周囲を“蒸発”させるという散々な結果に終わった。

俺の腕に高火力の炎がチャージされるのと同時に、フェイトさんの方もチャージ完了したらしい。

互いに構え、そして・・・

「ブレイカー!!!!!!」

「撃ち貫け!!!!!!」

フェイトさんはザンバーを振り降ろし、俺は魔法を解き放った。

一夜明けて（魔法球内でだが）・・・

激闘を終えた俺とフェイトさんは・・・

「・・・で？何か言うことは有るかしら？」

「「も、申し訳ございません」」

セラス総長により絶賛説教され中だった。

理由は簡単。暴れ過ぎたから。

―回想―

あの模擬戦最後の撃ち合いを制したのは俺だった。

フェイトさんが放ったプラズマザンバーブレイカーと、俺の放った
火焰螺旋“天使の試練”は凄まじい轟音と衝撃波を伴ってコロッセ
オ中央付近で激突。まずその時点でコロッセオが半壊。

数秒間は拮抗していたが、徐々に俺の一撃がフェイトさんの一撃を
押し始める。

じわじわ押していき、フェイトさんの一撃を半分近くまで押しこん
だときにフェイトさんが動いた。

なんと、いつの間にセットしたのかサッパリわからないが、ガシユ

ン！とカートリッジをロードしたのだ。

おかげで一時的にだが魔力が上乘せされたフェイトさんの一撃が俺の一撃を押し返し、再び中央付近まで戻してしまおう。

だが、そこで幸か不幸か、両者の一撃が互いのエネルギーを喰い合って大爆発を起こした。

本当なら結界を張るなどして、周りへの被害を出来るだけ抑えるべきだったんだが、俺もフェイトさんも熱くなっていたのですっかり失念してたんだよなあ。

そのためコロッセオは完全に崩壊。もう全壊を通り越して消滅の領域である。

直後、爆発の余波と魔力切れもあり、フェイトさんが気絶。空中で気絶したため、俺が残る力で何とかキャッチ。……まあ、どこがとは言わないが、柔らかかった、とだけ言っておこう。

その後、模擬戦開始直後から城内に避難していたセラス総長が文字通り飛んできて、コロッセオの惨状を目撃。

「修理費が・・・」と呟いて崩れ落ち、そのまま気絶。ご愁傷様、と言わざるを得ない。

後に一人残された俺は仕方なく、二人を小脇に抱えて城まで戻り、適当な客間のベッドへ一人ずつ放り込んでから俺も眠りについた。
・
・
・
・
もちろん、別々の部屋でだな。

そして翌朝になり、大広間へと行ったらフェイトさんが床の上で正座させられていた。
近寄ったら、俺も何故か強制的に正座させられたし。

・・・何で？

―そして話は冒頭に戻る―

「まったく・・・。コロッセオの修理代はフェイトの給料から引いておくわ。良いわね?」

「そ、そんなぁ・・・」

セラス総長の無慈悲な宣告に、ちよつと涙目のフェイトさん。・・・
・不謹慎だが、ちよつと萌えた。

「で? フェイトから見て、アウラ君はどう?」

「・・・申し分無いです。本国でSAなのは確実ですね」

セラス総長の問いにフェイトさんが答える。

「これだけの魔力量に持つてる上に、魔法の完成度や“失われし技巧”を使える所から見ても、アリアドネーのランクに換算してもS以上は間違いないですよ」

「でしょう? それらに加えて、フェイトに競り勝つ戦闘技量に咄嗟の判断にも優れてるわ」

その答えに頷くセラス総長。

べた褒めされてるな、俺。なんかむず痒いぜ。

「でも、戦い慣れしてる感じはしたわね。アウラ君、誰かに戦い方を教わってたの?」

「はい。師匠が二人」

「差支えなければ名前を聞いても良いかしら?」

えー、親父の名前は出しても大丈夫だろうけど・・・エヴァの方はどうだろうな？

・・・・・・アリアドネーだし、多分大丈夫だろ。

「ナギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの二人です」

「ああ、なるほど」

ならその強さは頷けるわね、と言うセラス総長。俺が言うのもアレだが、エヴァについて何とも思わないのか？

「アリアドネーでは“闇の福音”はそれほど忌避されてないんだ。彼女、普通の学者でも考え付かないような技術を生み出したりしてるからね。むしろ、学者たちからは尊敬されてるよ」

俺の疑問を読み取ったのかはわからないが、フェイトさんが言った。

なんだ、エヴァを受け入れてくれるところだってちゃんとあるじゃないか。

我が師であるエヴァが悪く言われているのを聞くのは、俺としてもかなり不愉快だからな。

「さて、そろそろ出ましようか。私は長命種だからさほど気にして

ないけど、アウラ君やフェイトは普通の人間でしょう？歳とっちゃわよ？」

しばらく雑談に興じた後、セラス総長が言った。

「ああっ！！ま、また一日分も歳とっちゃった……」

と崩れ落ちるフェイトさん。まあ、一日くらいなら歳とっても分らないから大丈夫でしょ。美人だし。

ていうか“また”ってことは何回か魔法球を使ってるんかい。

「ほら、遊んでないで出るわよ。あ、アウラ君はここを出たらホテルへ帰りなさい。また11日後に会いましょう」

「はい」

フェイトさんを引きずって歩くセラス総長の後を追い、一緒に魔法球の外へ出る。

礼を言って二人と別れ、いくつか寄り道をしてホテルへと帰った。

あんな事が待ち受けていることも知らずに。

「アウラが知りえないお話し――

「あ、そう言えばフェイトちゃん。アウラ君に負けたんだって？」

「ブッ！な、なんでなのはがそれを知ってるの！？」

「あ、そうやそうや。なんでも、フルドライブまで使って押し負けたんやて？」

「は、はやてまで！？誰に聞いたの？二人とも！」

「「セラス総長」」

「あの人はいっ！」

「まあまあ。でもあの子、凄いよね。ちょっと戦ってみたいの」

「そうやなあ……。私も戦ってみたいと思うで。どうや？今度三人でアウラ君に模擬戦を申し込まへん？フェイトちゃんの雪辱戦も兼ねてやけど」

「あ、良いねそれ。賛成なの」

「でも、初戦のなのはやはやてはともかく、再戦をアウラ君が受けてくれるかな？」

「大丈夫や。そこは教師権限でも使うて強制的にすればええんや」

「……いや、ダメじゃない？」

「まあ、美女三人のお誘いなんやし、アウラ君も断ったりしないやろ」

「そうかなあ……」

「じゃ、負けちゃったフェイトちゃんのために特訓しようよ！魔法球で」

「えゝ！？私、昨日一日分魔法球内に居ただけど」

「良いから良いから。まだフェイトちゃん若いから一週間分くらい大したこと無いよ！」

「い、一週間も!?!?・・・は、はやて!お茶なんか飲んでないで何とか言ってよ!」

「む、無理や。こうなったのはちゃんは誰にも止められへん・・・。ご愁傷様や」

「何を言ってるの、はやてちゃん。はやてちゃんもやるんだよ?」
「・・・・・・・・え?」

「さ、善は急げなの。今からやろう!行くよ!フエイトちゃん、はやてちゃん!」

「「だ、誰か助けてえ〜!!!!!!」」

第十話（後書き）

とりあえず、最後に伏線を張ってみました。

もつとも、次回で回収されちゃうんですがね。

第十一話（前書き）

さて、アノ人が出てきます。

あ、エヴォリミットのネタバレ注意。

第十一話

現在、午後9時30分。場所は宿泊先のホテル一階ロビー。カウンターの人から自室の鍵を受け取り、部屋を目指す。

セラス総長の家を出たのは6時過ぎ。よって3時間くらい寄り道したことになるな。

いやはや、アリアドネーの商店街は意外と活気づいていて楽しかったぜ。

日本で言う“駄菓子屋”みたいな店やコンビニ的な店、デパート的な店をはしごしてありったけのキャンディーを買い込んだ。

金？母ちゃんから小遣いとして結構貰ってたから十分ある。あれでいて母ちゃんって王族だし、親父だって英雄だからな。我がスプリングフィールド家は金には困ってないのだよ。

ふふふふ・・・これでしばらくは学校にも耐えられるぜ。キャンディー舐めてりゃ精神的に落ち着くんぞな。

良いよね、キャンディーって。安価だし色々な味があるし。は？ガム？俺は嫌いだ。あんな味付き樹液塊を食って何が楽しいんだ？

そんなことを考えながら歩き、自室に到着。

ニコニコしながらドアを開けた。すると・・・

ガチャ・・・

「む、ようやく帰ってきたか」

何故かシャノン・ワードワーズがいた。

「・・・・・・・・・・」

ボタン・・・

無言でドアを閉めた俺は悪くない。

ていうか一気にさっきまでのルンルン気分は消し飛んだ。

「な、なんであの人がここに!？」

軽くパニック。そりゃそうだ。あの魔人だぞ!？シャノン・ワード
ワーズだぞ!？メチャクチャ強いラスボスだぞ!？

魔人シャノン・ワードワーズ。

とある作品において、人類の進化の極限を追い求め、“災害の猿たち（カラミティ・モンキーズ）”と呼ばれる超人たちを操って主人

公勢と戦い、最終的には宇宙に溶けて一つとなった最強の人間（？）。

俺の持つ“黄金色のパッチ”の本当の持ち主であり、“テンペスト（大嵐）”の災害名を冠したまごうことなきラスボス。リアルメテオスウォームの使い手。セレスチャル・タクトとか使えそうな人。

って冷静に考察している場合じゃねえよ！！！！

―はろはろー。毎度お馴染みの神様でございまーす。

その時、頭を抱えて悶える俺を見かねた（？）のか奴（神）から久しぶりに念話があった。

おい、何でシャノン・ワードワーズがここに居る？

―ん？言ったじゃん。6歳の時に“念動力”の教師を送るって。

誰も魔人が来るなんて聞いてねえよ！！せいぜい“念動力”が使える一般人くらいかと思っただわ！！

―（超能力を使えるは一般人なのか？）・・・まあ、良いじゃんよ。なんか本人も退屈だったんだとさ。すぐにOKしてくれたぜ？

・・・まあ良い。確かにこれ以上ないほどの教師だしな。

―だろ？あ、あとお前の練習空間だがな、シャノンに特製のダイオ
ラマ魔法球を持たせておいたからその中でやれ。神様印だから頑丈
さは保証するぜ。

あ、それは普通にありがたい。丁度欲しかったんだけど、魔法球つ
て意外と高いんだよな・・・。

―中は何も無い大地しか無いから自分で何か入れてくれ。じゃ、俺
は忙しいから。

重ね重ね感謝するぜ。

―良いってことよ。じゃ、ま「ああ、ちょっとまって」なんだよ？

あのリリなのキャラのそっくりさん達は何なんだ？

―さあ、俺にも分からん。お前というイレギュラーがもたらした、
ちょっとした世界の変革じゃないか？害は無さそうだし、問題無い
だろ。

なんだ。てつきり俺はあんたが犯人かと思ってたぜ。

―そんなこととしてられるほど暇じゃねえし。これから第六天魔王倒
しに行くんで忙しいんだ。

（第六天魔王？織田信長か？）・・・ああ、そう。頑張れよ。

―おう、任せとけ。じゃあな。

そう言って念話が切れた。

2回ほど深呼吸し、ドアノブに手をかける。

さて、ご挨拶といきますかね。

「ふむ」

軽く頷きながらシャノンは手を振り、俺が飛ばした“念動力”の弾を完全撃墜する。

「これで・・・どうだっ！」

それを見た俺はそのまま接近戦に切り替え、全力の踏み込みと“念動力”で加速させたパンチを打ち出す。

「筋は良いが、経験が足りない」

そう言いながら“念動力”の力場でガードし、そのまま力場で俺を吹っ飛ばすシャノン。

「経験？」

そう言いながら“念動力”の力場で身体を支え、勢いを殺す俺。

「そう、経験だ。魔法については君の方が私よりも上だろうが、それ以外では私にはまだ遠く及ばない」

“念動力”で地面を砕き、膨大な量の石つぶての弾幕を力場に乘せて飛ばしてくるシャノンに対し、俺は“念動力”で力場を壁状に展開して自分に当たるつぶてだけをガードする。

「そりゃそうだ。生きてきた時間が違う」

「だが、その隙間をほぼ同等まで埋める術は有る」

そう言ったシャノンの姿はすでに消え、俺の目の前には巨大な竜巻が起きていた。

あ、ヤベえ。これは避けらんねえ。

気休め程度にしかないが、今の俺が持てる全力を出して“念動力”の防御膜を身に纏う。

直後に轟音と共に凄まじい衝撃が俺の身体に走り、俺はなす術もなく上空5000m付近までぶっ飛ばされた。

―回想―

「私の名はシャノン。シャノン・ワードワーズだ」

「俺の名はアウラ。アウラ・スプリングフィールド」

よろしく、と手を差し出したシャノンの手を取って握手する。

「さて、私が君に教鞭をとれるのは“この”世界で一週間だけだ。

だから、これを使う」

そう言ってシャノンがポケットから取り出したのは、小さめのボトルシップのようなもの。

あれ、間違い無くダイオラマ魔法球だな。

「これが何なのかは知っているようだから説明はしない。早速中へ入ろうか。時間は有限だ」

机に魔法球を置いたシャノンは床に自動展開された魔法陣に乗って魔法球中に入った。

さて、俺も行きますかね。

あ、その前にこの部屋へ認識阻害と人払いと立入禁止の効果を持つ複合式結界でも展開しておくか。

床に描かれた魔法陣で転送された先は・・・赤茶けた荒野。

植物の類は一切無い代わりに無数の岩が転がり、ただ抜けるような青空が覆っているだけの大地。

風が吹き吹ける音しか聞こえない、虚しく寂しい世界だった。

すぐそばに転がっていた大岩の上にシャノンが座っていた。

「来たな。まずは少し話をしようか。ここなら外の1時間が1年になるみたいだからね」

・・・はあ！？ 一時間（外）≡一年（中）っておかしいだろ！ 一日で24年も歳をとるじゃねえかよ！

「では、改めて自己紹介をしよう。私の名はシャノン・ワードワーズ。第一次火星開拓団のサブリーダーを務めていた。今では宇宙に溶けた存在だがね」

あー、なるほど。つまり今日の前に居るシャノン・ワードワーズは原作のシャノン・ワードワーズということか。

「そして、固有能力は“念動力”だ」

そう言ってシャノンは俺の目の前に極小の竜巻を起こして見せた。

「さて、君には私の全てを教える。知識、戦闘技術、もちろん“念動力”の制御方法や“念動力”を用いた戦い方などもね」

フワッと“念動力”を用いて飛び降りたシャノン。

そのままシャノンはどこへともなく歩き始めた。
仕方なしについて行く俺。というか最初から歩く気なら座らせるな
よ・・・。

「私が君に求めるのは“課題のクリア”。そして私から君に与える
課題は全部で3つだ」

「3つ？」

「そうだ。まず、君にかけられた“リミッター”を解き放つ。そし
てその解放された力になれること。それが第一の課題だ」

・・・ん？ちょっとマテ。

「俺の身体に“リミッター”がかけられている？」

その通り、とシャノンは頷いた。

「君はおかしいと思わなかったのか？パッチが人に与える恩恵はそ
んな程度の身体能力ではない。軽く見積もっても今の君の十数倍の
身体能力は手に入るだろう」

「・・・あ」

・・・そうだ、言われてみればその通り。何故、今まで気がつかな
かったのか。

現在の俺の身体能力は親父の半分くらい。

いや、確かに“同世代の子”と比較すれば異常な身体能力だが、“大人たち”、さらに言うなら“英雄”と呼ばれる親父たちと比べれば大したことではない。

だが、パッチの恩恵ならば“親父たち”すらも軽く凌駕するはずの身体能力を得られるはずなのだ。

ちなみにここでの“身体能力”は“氣や魔力で強化をしていない状態”での純粋な身体能力を指しているからな？

パッチとは“個として完結した存在”である人間に“さらなる力”と“進化の可能性”をもたらすもの。

装着した者は皆斉しく“人を超えた種”たる“超人”へと昇華する。

故にパッチを装着している俺も例外なく“人を超えた種”であってしかるべき存在。

なのに何故、親父の半分ほどの身体能力しか無いのか。

こう考えてみれば非常に簡単だ。
俺の身体能力に制限をかけている“リミッター”があるからに違いない。

「どうやら理解したようだな。“リミッター”はどこにどうやってどのようにかけられているかは私にも分からない。だから、君はまず自分で自分の枷を外すところから始めなければならない」
パチンツと指を鳴らすシャノン。

すると、どこからか巨大な岩が5個飛んできて、静かにシャノンの後ろへと一列で降りてきた。

「リミッター云々は置いておいて、第二の課題だ。第二の課題は、“技術を磨く”ことだ」

「技術を磨く？」

「そう。例えば、この岩を・・・斬る」

そう言ってシャノンは腕を虚空へと振り下ろす。

すると、一番右端に合った岩が真っ二つに“斬れた”。

断じて“割れた”わけではない。まるで鋭利な刃物で斬られたかのように綺麗な断面を晒している。

「次に・・・砕く」

ズガアアン！という音と共に、次の岩が砕け散った。

今のは・・・“内側”から弾け飛んだ感じ？

「次に・・・潰す」

ゴシャツという音と共に、その次の岩が握りこぶし大の小石に変貌

する。

これはわかる。全方位から等しい圧力がかかったからあのような形になったのだろう。

「次は・・・貫く」

手をピストルの形にしたシャノンが、銃を撃つ仕草をすると、次の岩のど真ん中に風穴を開けた。

これは・・・空気を“念動力”で円錐状に圧縮したものを撃ちこんだのか？

「最後は・・・操る」

そう言ったシャノンが手を一振りすると、5個目の岩が凄まじい勢いで遙か彼方へ飛んで行った。

「このように“念動力”だけでも様々な使い方がある。いかに“早く”“正しく”“精密に”扱うかが戦いのカギとなるのだよ」
まあ、この辺は追々教えるがね。と続けたシャノン。

「さて、最後の課題を言う前に・・・私と戦いたまえ。なに、君の今の実力を測るためだ。もちろん私は全力を出さないし、君も“念動力”と体術のみ使用を許可しよう」

お、それは良いな。会った時から戦ってみたいと思ってたんだよ。

「了解」

さて、シャノン相手にどこまで戦えるやら。

―そして話は冒頭に戻る―

上空5000mから“落下”という形で帰還してきた俺を待っていたのは、“念動力”のエアクッションと何かを考えているシャノンだった。

ボフィンという軽い音と共にエアクッションに衝突した俺の下にシャノンが近づいてくる。

「ふむ、帰ってきたか」

帰ってきたか、じゃねえよ。どんだけ強いのをぶつけたんだよ・・・。体中痛えし・・・。

「痛い」

「それはそうだ。痛みを感じないのは人間ではない」

クッククックと笑うシャノン。正論なんだが、何かムカつく。

「では、最後の課題を発表しよう。三つ目の課題は“念動力”と体術のみで私に有効な一撃を入れることだ。ただし、その際は君を殺す気で行くぞ」

・・・いや、無理だろ。

土星の輪っかをマシングンの如くぶっ飛ばしてくる奴相手にどう戦えって言うんだよ。

・・・もしかして手を抜いてくれる？ “殺す気で行く” けど“全力は出さない” みたいな。

そう思いチラッとシャノンを見してみる。

すると、シャノンはにこやかに答えた。

「無論、私は全力を出す」

ですよねー。

「だが、あまり長く戦っても時間の無駄だ。故に戦闘時間は10秒とする。どうしても死にたくなければ10秒耐えきりたまえ」

10秒か。それなら何とかなる……かな？

「わかった」

「嬉しい」

俺の言葉に満足そうに頷くシャノン。

「では、君の身体のリミッターを外すことを考えよう。何か心当たりは無いか？」

「心当たり、ねえ……」

そんなものあるわけねえなあ。

産まれた時からこんな感じだったし。

「リミッターの例としては肉体的要因、精神的要因、外的要因が挙げられる。例えば、肉体的要因ならば遺伝子異常。精神的要因ならばPTSD。外的要因なら改造手術や薬物注射などが考えられるね。ああ、この世界には魔法が存在していたな。ならば魔術的要因、霊的要因なども視野に入れなければならない」

むう……そう言われるといろいろ考えなければならぬな。

遺伝子異常は……何とも言えない。親父と母ちゃん（アリカ）の遺伝子を引き継いでいるんだから、異常なんてある筈が無いと信じたいが。俺には遺伝子工学の知識は無いから判断はしかねる。

PTSDはあり得ない。そんなトラウマになるような出来事に遭遇してねえし。確かにエヴァや親父との修行は死にかけることもあったが、トラウマになるほどの事でも無かったし。

改造手術や薬物注射は絶対に無い。だってそんなことしたがる奴は知り合いに居ねえし、それっぽい施設とかに行ったことも無い。

もっとも考えられるのは、魔術的要因か霊的要因だな。

親父や母ちゃんのが気に入らないゴミクズどもが俺にちよっかいを出しているのかも知れん。

「ちよっと調べてみる」

そうシャノンに告げ、シャノンに少し下がるように促して自身も少し下がる。

足元に“念動力”で線を描き、巨大な魔法陣を構築。

術式は、自身へのあらゆる干渉を感知する“自己調査魔法”だ。

適度な魔力を流し込み、術式を起動。

すると、すぐに調査結果が脳裏に浮かび上がった。

自身への干渉はエヴァとの仮契約で出来た細いパスのみ。それ以外は皆無だった。

「……異常無し、か」

干渉は認められず。全くもって通常そのものである。

「では、霊的要因が疑わしいな。君の力を封じ込めている心霊や精霊、妖精や天使、神といったものがあるのかも知れん。私はそれらの類は見たことが無いからわからないがね」

ここまでの俺の考えをシャノンに話した後、しばらくしてシャノンがそう言った。

心霊や精霊、妖精や天使、神ねえ・・・・・・・・・・ん？神？

一人（？）だけ居やがったな、神の知り合いが。

でもどうやって奴（神）を呼べばいいんだ？何かこう・・・祈りの事をすればいいのか？

その時、俺の脳内に声が響いた。

―呼んだ？

うおっ！？いきなり話しかけてくるんじゃないやねえよ！

―だってさー、少し暇だったんだもん。

だもん、とか言うな。気持ち悪い。第六天魔王は倒したのかよ？

―ああ、強かったぜ。あと数分以上固有結界を使われてたら負けたかも知れん。

第六天魔王強くなえ！？・・・まあ、聞きたい事があったからちよう

どいい。お前さ、俺にリミッターとかかけてないか？

ーん？かけてるが？

だよなあ。やっぱりかけてな・・・って今何て言った？

ーお前にリミッターかけてるって言った。

何でかけてるんだよ！

ーおいおい、俺は感謝されこそすれ文句言われる筋合いは無いぞ。
お前が母親殺しの咎を負わないようにしてやったんだからな。

・・・は？どういうことだよ？

ーパッチで強化された状態の胎児だぞ？普通の赤ちゃんがやるようなことをしたら即母体が死ぬ。例えば、母親の胎内で蹴りをかましたら子宮をぶち破って他の臓器に多大なダメージを与えるとかな。

・・・マジか？

ーマジで。母親もパッチを装着していればそんな事は起きないのかも知れんけどな。

そ、そりゃ危なかったぜ。神よ、ありがとうございます。

ーフツ・・・アフターケアも完璧なのがこの俺様の凄い所なんだぜ。

で？解除してくれるんだろうな？

―ああ、すぐに解除するぜ。少し待ってな……。俺のターン！ドロ―！！手札から速攻魔法「リミッター解除」を発動！！このカード発動時に、自分フィールド上の……。・（中略）……。破壊される！！

その時、脳内でパキイイイン！！という甲高い音が響き、身体の奥底から膨大な力が湧きあがって来たのを感じた。

―どうだ？これでお前にかけられたリミッターは解除出来たはずだ。

ああ、力を感じる。あとはお前が最後に「破壊される」なんて不吉な事を言わなければ完璧だったな。

―あゝ、まあ別に何かあるわけじゃないから安心しろよ。じゃ、俺は忙しいから失礼するぜ。

おう、改めて感謝する。ありがとうな。

―良いってことよ。またな。次はオリンポスの神どもに喧嘩売ってくるぜ。

その後、何かがプツリと切れるような感覚と共に声が途切れた。

あの野郎（神）、俺に“リミッター解除”を使いやがった。ターンエンド時に破壊されたりしねえだろうな・・・。
ていうか何してんだよ。同業（神）に喧嘩売るとか・・・。

「ほう、リミッターが外れたようだね。ちょっとその辺を走ってみたまえよ」

そうシャノンに促されて走ってみることに。

まあ、普通にスタンディングスタートで良いだろ。

適当に構え、全力でダッシュしてみる。

結果、100mをわずか1秒足らずで完走。それも氣や魔力による強化が一切無い、素の身体能力だけで。

「化物だな」

「そう、化物だ。ようこそ、バケモ超人の領域へ」

軽く自嘲気味に呟いた俺に、シャノンが大げさに手を広げて言った。

「喜びたまえ。早くも第一の課題の半分をクリアだ。後は10年かけてその力に慣れることだな」

・・・は？10年？

「じゅ、10年!？」

「何を驚いている？本来、産まれてすぐにパッチを装着し、成長と共にその力に慣れるのが当たり前なのだ。それをある程度成長した肉体でやろうというのだから、それくらいかかるに決まっているだろう？」

なるほど。言われてみればその通り、か。

「わかった」

「ならば、早速慣らしと鍛錬を兼ねた訓練方法を教えよう。とりあえずはこのプリントに書いてあるメニューをやりたまえ」

そう言ってどこからともなくプリントを取り出したシャノン。

それを俺に渡したシャノンは、再び岩を引き寄せて“念動力”で椅子に加工し、それに腰かけて本を読み始めた。

「・・・・・・・・・・」

渡されたプリントを読み、しばし絶句。

“1000m全力疾走シャトルラン一万セット”とか“超重量耐久腕立て伏せ”とかあり得ないものばかりが書き連ねてある。

どこのスポ根アニメだよ!!と声高に突っ込みたいが、グツと我慢。

「・・・・・・・・・・はぁ」

思わずこぼれた溜息をそのままに、俺は書かれてたメニューに取り組み始めた。

長い10年が始まる。

第十一話（後書き）

作者はシャノンが大層気に入ってます。

第十二話（前書き）

では、十二話目を投下します

第十二話

さて、早くも魔法球内で10年経過。

外ではまだ10時間しか経過していない。今は・・4月10日午前7時くらいか？

あれから血反吐を吐くような思いをして（実際に吐いた）シャノンから渡されたメニューを着々とこなし、今では自身の力を完全制御できるようになった。

ていうかね、自身のスペックが色々とおかしい。

足踏みだけで地割れが起きる。

腕を振るだけで真空波が巻き起こる。

そのせいでシャノンが読んでいた本を真っ二つにしてしまい、シャ

ノンの報復攻撃で地獄を見る羽目に。

あ、少し訂正。“地獄”ではなく“階段”を見た。

そう、ついに登ったのだ。あの“進化の螺旋階段”を。

いやね、登る気は無かったんだが、シャノンの報復攻撃で腹に風穴が空いて……。

文字通り抱腹。

つまり腹を抱えて（というか押さえて）ぶっ倒れたわけ。決して爆笑したわけではないから間違えないように。

多分、というか絶対にこの“階段”に登らなきゃ死んでしまうのだから、必死で駆けのぼった。

そしたらまあ・・・死なくなつた。

・・・いや、違うな。“簡単に死ねなくなつた”が正しい。

シャノンのせいで空いた腹の風穴を塞ぎたい一心で駆けのぼつたら、身体が進化して“自己再生”という機能が追加されたボディになつたのだ。

恐らく、全身を一瞬で原子分解でもされない限りは再生すると思われる。

おかげで階段頂上部の広場から現実空間へと意識が戻つた瞬間に肉体が一瞬で完全再生。もはや真祖も真っ青の再生能力である。多分、それほどまでに進化しなければ死んでいたほどの傷だったのだらうけどさ。

ちなみに後でわかつた事だがこの自己再生、傷んだ髪の毛や肌も常時完全再生させているため、両親のどちらからも受け継いでいない乳白色の髪や白い肌が常に最適な状態を保っているという女子に言ったら呪い殺されそうな副次効果を發揮してくれている。正直言うところの機能、あまり要らねえ。

一瞬で再生した俺を見たシャノンは少し驚いた後、素晴らしい笑顔で近寄って来た。

そして俺は瞬時に悟った。

こいつ、絶対に俺をサンドバッグにする気だな？

思っていた通り、シャノンはこう言った。

「素晴らしい！これならもっとキツイ鍛錬方法に変えても大丈夫だろう」

いや、大丈夫じゃないです。

「よし、第二の課題と第三の課題を統合しよう。私との戦いの中で技を磨けばいい。完全再生するなら10秒じゃなくても大丈夫だろう

うから、戦闘時間も伸ばすでしょう」

よし、じゃねえよ。軽く死ねるわ。

「さあさあ！早く戦おうじゃないか。第一の課題？そんなのはクリアで構わない。ああ、一度“階段”を登ってしまえば、進化への恐怖感も薄れただろう？存分に登って、私のいる領域へとたどり着きたまえよ」

メチャクチャ嬉しそうなシャノン。

その姿は、例えるなら“新しいオモチャを与えられた子供”そのものだ。

ていうか、“階段”を登ること前提かよ。

「いや、ちょ「では、早速始めようか！！」・・・話を聞けよ」

早速、銃弾サイズに圧縮された空気の塊を“念動力”でマシンガンの如く飛ばしてくるシャノン。

「・・・・・・・・・・はあ」

俺はそれを分厚い空気の盾で迎え撃ち、自ら突っ込んでいった。

―5年後―

「喰らえ!!」

「フッ・・まだまだだな」

俺のパンチを余裕でかわし、お返しとばかりに回し蹴りを放つシャノン。

俺はそれを上体を反らすことで回避し、その勢いのままバク転して距離をとる。

バク転をしたのを見計らってシャノンが追撃とばかりに亜光速で多数の岩の弾丸を撃ち込んできたが、俺はその体勢のまま腕を一振りして超高密度な“念動力”の力場だけで壁を作り、弾丸を一つ残らず叩き落とす。

そして俺が着地して完全に体勢を整えたのもつかの間、次の瞬間にはその間の距離はゼロになって再び激しい接近戦が繰り広げられ始めた。

それぞれの立ち位置が高速で何度も入れ替わり、ぶつかり合ったと思えばわずかに遅れて炸裂音が轟く。

それは音すらもぶつちぎって戦っている証拠であって、到底人間が出せるような音ではない。

いや、頑張れば出せるかも知れないが、出した瞬間に空気の摩擦で焼け焦げるだろう。

だが、俺もシャノンもそういった面でのダメージは皆無だ。

なんせ、とっくに人間辞めてるし。

音速を超えた程度では肌に傷一つつかないし、万が一傷ついたとしても瞬時に再生する。

戦いは次第に地上戦から空中戦へと切り替わった。

大地の引力を“念動力”の力場で遮り、大空を自由自在に飛び回って己の技をぶつけあう。

「行くぜ！シャノン！！」

「面白い！来たまえ！！」

互いが一旦空中に静止し、次に繰り出すための技を放つ準備をする。

これがマジ物の戦いならばそんなことを悠長にしている暇なんてないが、この戦いはあくまで実戦形式の鍛錬。故に大技をガンガン使いまくって戦っているのだ。

だってさ、極端な話をすれば俺やシャノンが戦う場合“念動力”で相手を圧殺すれば戦闘はそこで終わりだろ？

そこに一切の時間なんていらぬ。ただ念じれば相手が潰れるのだから。

普通に考えて無理ゲーだろ。予備動作なしにいきなり数千億トン以上の圧力をかけられる力なんだぜ？悲鳴も上げる間も、抵抗する間も、避ける間も無く絶命するに決まってる。

だからシャノンも原作では“純粋な念動力のみによる”圧殺だけではない。シャノンの戦闘目的はあくまで“自身を命の危機にま

で追い込める存在”を育て上げることだったからな。相手を殺しちゃって意味が無い。

要するに、今俺とシャノンがやってる戦いは、“殺し合い”ではなく“技の試し合い”。

それであわよくば瀕死になって“階段”を駆け上がる。完璧だな。

「今度は何をする気だね？ 前回は確か・・“絶対防御”^{イージス}だったか」
シャノンがワクワクしてるのが丸分かりなスマイルをしながら言う。

俺が開発した“念動力”を用いた技、略して“念動技”。
その中でも、“絶対防御”は特に防御に特化した技だ。

大気を“念動力”で超圧縮した物を薄い膜状に展開するという、かなりの集中力を要する技だが、シャノンの割と本気めの一撃に耐えきったという素晴らしいまでの防御力を誇る。

そして、今から俺がやるのは攻撃に特化した念動技。さあ、見て驚け！シャノン・ワードワーズ！！

超膨大な大気が“念動力”によって渦を巻き、俺の右腕へと集束されていく。

「いざ見上げ！！天地開闢の一撃を！！」

荒れ狂う嵐を右手に宿し、それを思いっきり振りかぶった俺は、さらにそこへ“念動力”で発生させた力場の加速力も付け足す。

そして俺は・・・

「天地乖離す（エヌマ）開闢の星^{エリシュ}！！！！」

その爆発的な加速力を受けた全力の突きに乘せて、腕へ集束されていた全ての大気をシャノンへと解き放った。

「ふむ、大した威力だったよ。私も本気を出さねば危なかったな」
「……………」

はぁ……まさか無傷とは。落ち込むぜ。

結局、俺の現時点で最強の技である「天地乖離す開闢の星」は、シヤノンが作り出した防壁で完全相殺されてしまった。

ていうかさ、シヤノン強すぎだろ。流石、魔人と呼ばれるのは伊達じゃないってことか。

……まあ、あのシヤノンに本気で防御させたと考えれば十分合格点だな。

「しかし、君も強くなった物だね。今日までに何回“階段”を登った？」

「……………忘れた」

「つまり君は忘れるほど登ったということか」
さも愉快そうに笑うシヤノン。

「私などより君の方がよっぽど化物だよ。それだけの進化を繰り返して尚、人の姿でいられるのだからね」

……………確かに。

「シヤノンは何回登った？」

「そうだな……10回は登っていないだろう」
少し考えるそぶりをしながら言ったシヤノン。

「…………10回も登らないでその領域に辿り着く方が化物だろ」

「そうでもないさ。私の場合は“進化の目的”が定まっていたからきちんと計画的に進化することが出来ただけだ。だが君は自身に足りないものを見出した場合、それを得るためにその都度見境なく“階段”を登っているだろう？」

あー、そうかもしれん。

「しかし、それだけの進化を経て様々な機能を手に入れて尚、君は人の外見を保っている。これはほぼ奇跡に近い」

「奇跡ねえ……」

ま、そのことについては後悔はして無い。あるなら“階段”を登ってない。

「ま、今君は限りなく私に近い領域まで登ってきている。近いうちに私へと一撃が入れられるだろう」

……ああ、そう言えばこれって課題（シャノンへ一撃入れること）だったな。

最近はずっかり忘れてた。新しい技とかを考える方が忙しくて。

しばらく休憩したあと、すぐにまた戦いが始まる。

「さあ、始めようか。次こそ私に一撃入れられることを願ってるよ」

チツ・・シャノンめ。まだまだ余裕そうな顔してやがるな。

・
・
・
絶対に一撃入れたる。

第十二話（後書き）

途中の「天地乖離す（エヌマ）開闢の星」^{エリシュ}のくだりはネタです。
多分、もう二度と出てくることはないでしょう。

第十三話（前書き）

連投

短めですがご容赦を

第十三話

さて、さらに150年が経過した。

・・・まあ、言いたい事はわかる。何故俺が生きているか、だろうか？

簡単だ、“常に最盛期の肉体を保ち続けられる身体”へと進化したから。

つまり、身体から“老い”という概念が欠落したのだ。

しかも“老化”の概念は完全に無くなったにもかかわらず、“筋トレなどによる身体能力の成長”は出来るというわけのわからんボディになってしまった。

まあ、身長などの成長はすでに止まったみたいだがな。

今の俺の外見は・・・まんまhackのアウラ（大人Ver）だ。ただ、身長は185cmもあり、胸などは当然ない。

長い月日をかけて、ようやくシャノンのいる地点まで進化した俺は、やっこの思いでシャノンに一撃を入れることに成功した。

いやはや、奴をぶん殴った時の感触は実に素晴らしかったぜ。

で、シャノンの課題を全部クリアした俺は今日、やっと“外”へ出る。

すっかり忘れていたが、ここダイオラマ魔法球の中だったんだよな。

しかも、“中”の一年が“外”の一時間に相当するため、外ではまだ一週間しか経っていない。

ついでに言うなら、シャノンがこの世界にいられるのも外の時間で、あとわずか3時間。結構ギリギリだったんだな。危ねえ危ねえ、シャノンに一撃も入れられないまま勝ち逃げされるところだったぜ。

……そういえば一週間も部屋に閉じこもってたら怪しまれそうだな。大丈夫か？

「君は実に素晴らしい生徒だった。かなり教えがいがあったよ。まあ、教えたというより君が悟っただけなのだがね」
かつての俺に、どこかの合法ロリな師匠が言ったようなセリフを言うシャノン。

「いや、そんな事はない。感謝してるよ、シャノン」

「フ・・まあ、今生の別れというわけではない。もし私に用があるなら次元を超えて会いに来たまえ。今の君なら多元宇宙マルチバースを超えることなんて簡単だろう？ 連絡だけなら念話テレパスでも出来るしね」
俺の礼に笑いながらそう言うシャノン。

そう、今の俺なら多元宇宙を超えて次元すらも跳躍することが出来る。

進化って言うのは本当に何でもありだよなあ。普通に考えて生身で宇宙に到り、しかもそこから何の補助も無しに次元を超えることが出来る人間がいるなんて誰が思う？ まあ、もう人間じゃないんだが。

「さて、私はそろそろ元の宇宙に帰ることにするが、何か最後に記念品を君へ贈ろうと思う。何か欲しい物はあるかね？」

・・・唐突だな。150年以上シャノンというが、未だにヤツの考えが分からん。

しかし、欲しいものねえ・・・。ああ、あれで良いか。

「俺と仮契約してくれ」

勿論、宝石による仮契約だぜ？ 男とキスする趣味は無いからな。

「ふむ、私には男とキスする趣味は無いのだがね」

俺と同じことを考えてるシャノン。

なので、宝石を使った仮契約の方法があることを教えたら、シャノンは快く了承してくれた。

ササツと仮契約用の魔法陣を描き、互いに両者の血液を垂らした小さい宝石を呑む。ちなみに呑んだ石は俺がエメラルドで、シャノンダイヤモンド。何故なら、宝石を用いた仮契約には誕生石を用いるのが普通らしいからだ。幸い、俺はエヴァに貰った仮契約セット（12種宝石入り）を持ってたから何とかなった。

魔法陣が淡く輝き、カードが出現。俺はそれをコピーし、オリジナルをシャノンに渡した。

ちなみに俺が従者でシャノンが主。まあ、妥当だろ？ シャノンが俺の従者してるとか想像できん。

「ほう、このカードには召喚機能が付いているのか・・・」
仮契約カードをひっくり返したりして色々調べているシャノン。念のため言うておくが、召喚機能の有効距離は最長でも10kmくらいだから別次元からの召喚は不可能だぜ？

さて、カードは・・・シャノンと同じ服装の俺が右手のひらに小型竜巻を出してるな。

称号は・・・“魔人の後継者”？なにそれめっちゃカッコいいんですけど。

色調は“黒”で星辰性は……“宇宙”？星じゃねえじゃん。

で、肝心のアーティファクトは……

「来れ（アデアット）」

俺の呟きでカードが黒い革製の手袋へと変化して装着される。

それと同時に俺の服装が、カードの絵柄どおりにシャノンと同じ服装へと変化した。

名前は………“念の手袋”？効果は不明。ま、後で調べてみるか。

「去れ（アベアット）」

そう呟いてカードに戻る。

「フハハハハ・実に面白い。面白すぎるぞ！称号が“魔人の後継者”？まさにその通りじゃないか。君、今後はその二つ名を名乗ったらどうだね？」

何故かシャノンがご満悦。カード片手に大爆笑。正直、軽く引いた。あんだ、キャラ壊れてるよ……。

「さて、最後に愉快的思いをしたところで、そろそろお暇するでしょう」

笑い終えたシャノンはどう言って手を虚空へ翳した。

すると、そこに超膨大な量の“念動力”が集中して空間が歪み、人が通れるほどのサイズの穴が開く。繋がってるのは・・多分、別の宇宙？

「では、私は元の宇宙へと還るとしよう。いつかまた君と会える日を楽しみにしている」

さらばだ。そう言葉を残したシャノンは穴の中へと消えていき、穴もそれと同時に塞がった。

残ったのは静寂と寂しさ。

寂しいと感じるのは当たり前だろ。だって150年以上も一緒に居たのだから。

「・・・・ま、会おうと思えば会えるしな」

そう呟いた俺は“外”へ出るための魔法陣を探し始めた。

「
・
・
・
・
・
・
退出用魔方陣どこだよ」

第十三話（後書き）

アーティファクトの解説をば・・・

番号 41

色調 黒

名前 アウラ・スプリングフィールド

称号 魔人の後継者

徳性 世界

方位 中央

星辰性 宇宙

アーティファクト 念の手袋

念の手袋
ネンノテフクロ

一見、普通の革製手袋に見えるが、未知の物質で作られた手袋。

“魔力”や“氣”、“念動力”といった“実体の無い力”の伝導率が極めて良く、装備しているだけで未装備時の数倍は魔力運用等がし易くなる。

装備している感覚が無いほど自然な感じでフィットする上に、蒸れたりすることがない至高の手袋である。

また、最高品質の魔法発動体としても機能する。

第十四話（前書き）

連投

第十四話

「異常は……無いな」

150年ぶりに見た文明を感じる一室。ていうかホテルの俺の部屋。何とか退出用魔方陣を探し出した俺は、無事に脱出を遂げることができた。

この150年間はずっと荒野で鍛錬（という名の戦争）をしてたから、文明とは程遠い生活だった。だからかは知らんけど、見るものが全てが新鮮に感じる。

ついでに言うなら、150年以上寝てないし、飯も食ってない。かなり最初の方の“進化”で寝なくても良いし、飯を食わなくても良いように“進化”した。

“老化”しないから老廃物も出ないし、傷などは自動で完全修復。もはや完全な化物だな。

さて、魔法球から出てきたは良いが、少し困ったことがある。

それは……成長し過ぎたことだ。

老化しなくなったとはいえ、それは俺が魔法球内時間で20歳の時。つまり、6歳から20歳になるまでの成長は終えてしまったため、今の俺は完全に大人の姿だ。

すっかり忘れてたけど俺、一週間前（体感的には150年以上前）に魔法学校の“初等部”を受験したんだったぜ。

……初等部に在籍している大人。そんなのは特例か変態かのどちらかだろう。

「どうするかな……」

いや、マジでどうしよう。一番ベストなのは年齢詐称薬の服用。ああ、幻術っていう手も有効か。

……でも年齢詐称薬はダメだな。今の俺では手が出ないほど高い薬品だし。

となると必然的に幻術に絞られちゃうか。ただ魔力がなあ・・・。

常時幻術を展開するとなると、それ相応の魔力を必要とする。

俺の魔力量を1000万くらいと見積もって、一日中幻術をかけた場合の魔力消費を100とすると、10万日は持つ計算？

1年が365日だから・・・約274年はかけ続けても大丈夫？

なんだ、余裕じゃないか。じゃ、幻術案を採用だな。

ササッと幻術魔法を発動して、外見を6歳児に戻す。

部屋に備え付けてある鏡に映った懐かしのちびっこボディに若干の懐かしさを覚えるぜ。

後は・・・あのマッド教師お手製AMF対策のために極薄の“念動力”で構成したフィールド、名付けて念動フィールドを展開しておく。

“念動力”は魔法じゃないからAMFでは無効化されない。無論、“念動力”で包まれた魔法も無効化されたりはしないという、実に優れた能力なのだよ。

試したこと無いからわからんけど、“幻想殺し（イマジンプレイカー）”は無理でも“完全魔法無効化能力”なら通用しないだろう。

全ての懸案事項をクリアした俺は、机の上に置いてあるダイオラマ魔法球をありがたく頂戴して、影へと収納。

最後に部屋を覆っていた複合結界を解除して外へ出た。

「おー、久しぶりの人間やら亜人・・・」

ホテルを出て、すぐ前の道を歩く人や空を飛んでいる人を見て軽くテンションアップ。

本当に久しぶりだぜ。150年以上も人は見てないからな。あ？シヤノン？あいつは魔人で人外だから人にはカウントしねえ。

でもどうするかなあ・・・あと4日。

魔法球内では150年以上経っているが、現実世界では1週間しか経ってない。

入学試験を受けたのが4月9日。そこから1週間経過したので今日は4月16日。

入学試験の結果発表は4月20日だから4日間だけでも暇になる。

他の生徒達は一旦実家に帰ったりして試験休暇の11日間を潰すみたいだけど。

ま、エヴァに借りた本でも読んでればいいか。

なに、150年も戦い続けたんだ。4日なんて一瞬さ。

4日後。

再び俺はウェルキンズ魔法学校に訪れていた。

今日は入学試験結果発表日。故に人でごった返している。

多分、噂で聞くコミケより居るんじゃないか？俺は生前コミケなんて行ったこと無いからわからんけど。

人ごみをかき分けて何とか合格者告知の紙がデカデカと張られた巨大掲示板の前へと辿り着く。

受験番号は・・・B-29。爆撃機かよ、と思ったのは俺だけか？

Bは・・・ああ、この列か。29は・・・25・・・27・・・29。あったあった。

「・・・・・・・・ふう」

あー、良かった。大丈夫とは思ってたけど、万が一落ちてたらシャレにならんほど無様だからな。

これで一安心だ。後で親父や母ちゃんに手紙でも出すか。

1時間後・・・

入学手続きも終わり、暇になってしまった。

親父たちに無事合格したことを知らせる手紙も送ったし・・・どうするかな？

そんなことを考えていると、金髪の女の子が近づいてきた。

「こんにちは、アウラ。結果はどうでしたの？」

・・・ん？なんだ、高音か。

「もちろん合格だけど」

「おめでとうございます。私も無事合格しましたわ」
なんて言って笑う高音。

「おめでとう。これからよろしく」

「ええ、こちらこそ」

互いにガッチリと握手。

「ところで、アウラは携帯電話とか持ってますの？」

「・・・いや、持っていない」

そう言えば、持っていないな。あれば親父たちとも連絡取りやすくなるんだが・・・

無ければ無いで特に困らんから、今まで買おうとも考え無かったぜ。
・・・ていうか携帯電話って魔法世界にあるのかよ？

「そうですか……。もし買ったら教えてくださいね？連絡先を交換しましょう」

「ん、わかった」

後で母ちゃんにおねだりしてみるか。

……激しくキモイな。肉体年齢20歳、精神年齢150歳以上の大人が母親におねだりとか。やめておくか。

さて、高音が去って行ってしまったから再びやることが無くなった。

「……何するかな」

「じゃあ、寮でも見てきたらどうかしら？」

「うわっ!？」

まさか答えが来るとは思わなかったので結構驚いた。

振り返ってみれば、セラス総長と……。筋肉ダルマ（ジャック・ラカン）だど!？

何故この筋肉ダルマがここにいるんだ？

というか何故、周りが騒がない？英雄の一人が来てるんだ、キャーとかワーとか騒ぎそうな気がするんだが。

そんなことを考えていると、ラカンがサングラスをかけているのに気が付く。

ああ、あれって確か認識阻害効果付きのサングラスだよな？だから周囲が騒がないのか。

「おう、お前があの子の息子か？なんだ、女みてえなツラしてやがんなあ・・・」

ガハハハと笑いながらバンバンと俺の背中を叩くラカン。正直、痛い。

そして女顔は俺のせいじゃねえ。

とりあえず筋肉ダルマは無視してセラス総長の方へ向き直る。

「こんにちは」

「ええ、こんにちは。さっきも言ったけど、学生寮に行って部屋割を確認してらっしゃい。今日の午後から私物の搬入開始だから、あらかじめ部屋を確認しておくで時間短縮出来て良いと思うわ」

「そうですね。今から行ってみます」

「ああ、ちょっと待てボウズ」

そう言っただけ俺を引き留めるラカン。なんだよ？

「何？」

「ほら、これをやろう」

そう言っただけラカンが差し出したのは・・・メモ用紙？

書いてあるのは・・・数字とアルファベット。これ、長距離転移魔法用の座標か？

「俺んちの座標だ。暇になったら一度来いや」

じゃあな！と片手を上げてセラス総長と共に去って行くラカン。

流石、英雄というべきか。

その背中は屈強な戦士のソレであり、一分の隙も見当たらなかった。

後で試しに“雷の暴風”でも撃ちこんでみるか、と思ったのは俺だけの秘密だ。

「アウラが知りえないお話し」

「どうだったかしら？アウラ君は」

「・・・ありゃとんでもねえ強さだぞ」

「ええ、強いわよ？本国ランクSAなもの」

「いや、それどころじゃねえ。あれは間違いなく俺たち“紅き翼”と同等か、それ以上の強さだ」

「はあ！？そ、そんなことありえないわ！だってあの子、まだ6歳よ？」

「・・・強さに歳は関係ないぜ？しかも驚いたことに、ありゃまだ実力を隠してやがる。俺が今感じた強さも単なる片鱗だけかもしれない」

「・・・ええ、私も驚いたわ。貴方が“片鱗”という言葉を知ってたことにね」

「ひでえ！？結構真面目に言ってるんだぜ？」

「貴方の真面目は不真面目よ」

「マジかよ・・・」

「自覚なかったのね・・・」

第十四話（後書き）

ジャック・ラカン出してみました

第十五話（前書き）

本日最後の連投。

次回も同じく来週の月曜日に投下します。

第十五話

4月21日午前10時。

今日はウェルキンズ魔法学校入学式である。

埼玉スーパーアリーナくらいはある超巨大な体育館に集まった千人を超す新入生と、数百人を超す教師陣。そして、新入生の数の倍近くいる保護者達。

総勢数千人もの人々が一堂に会した盛大な入学式なんだが・・・暇だ。

暇すぎる。だってさ、アリアドネーのお偉いさんたちが壇上でベラベラと長ったらしい挨拶を次々と言いまくるだけなんだぜ。もうあれは挨拶を通り越して論文発表か読経の領域だ。

かといって寝ようとする・・・

「ほら、寝てはいけませんよ？」

と隣に座る高音に揺り起こされる。

どうしろって言うんだよ。

すでに舐めたキャンディーは数知れず。

しかも色々な味のキャンディーを舐めたせいで、口の中がカオスな味に変貌。

もうね、呼吸するだけで甘ったるい。

完全に失敗だぜ。喉も渴いたし。

高音に睡眠を邪魔されること数十回。

食べたキャンディー数十個。

ようやく入学式が終わり、自身のクラスへと移動。

ちなみに高音とはクラスが別々になってしまったため、別行動である。

「・・・・・・・・」

相変わらずキヤーキヤーギヤーギヤーうるさい。

いや、うるさいなんてもんじゃないな。もはや公害だ。

ヘタすりゃジェット機のエンジン音よりうるさいんじゃない？

で、肝心の担任なんだが・・・

「はうう・・・・・・・・し、静かにー！・・・・・・・・ダメだ、静かにならな
い・・・・・・・・」

涙目で立ち尽くしてた。

担任の名は、フェイト・アシュタロッサ。

先日（俺的には150年以上前）、俺が撃ち破った強敵である。

一向に静まらない教室。なんか、哀れになって来たぜ……。

……しょうがない。助けてやるか。

「プラクテ・ビギ・ナル“来れ、静かなる森、闇の静寂。一陣の風を持って、撫でし者に言の葉の戒めを与えよ！沈黙の風！”」

俺の詠唱と共に教室内に風が吹き、俺とフェイトさん以外の人たちに“言葉縛り”という呪いが襲いかかった。

“沈黙の風”は発生した風に触れた者に、“言葉の出し方を忘れさせる”という“言葉縛り”の呪いをかける魔法である。

本来なら、敵の呪文詠唱を邪魔するのに使うのが模範的な使い方だが……まあ良いだろ。

呪いといっても俺が解くか一定時間過ぎれば勝手に解呪されるほど簡単な呪いだからな。特に害とかもないし。

打って変わってシーンと静まり返る教室に、フェイトさんは目を白黒させていたが、俺がやったことに気が付いたらしく、軽くウィンクしてきた。

「さて、やっと静かになったから、ホームルームHRを始めるよ。まずは・・・自己紹介だね。私の名前は・・・」

そこで言葉を切ったフェイトさんはチョークを手に取り、シュカカツと黒板に綺麗な字で名前を書いた。

「フェイト・アシュタロツサだよ。みんな、これから初等部卒業までの3年間、よろしくね」

当然ながら俺が他の同級生たちの口を強制的に封じているため、歓迎の声は上がらなかったが、フェイトさんはさして気にせず話を続けた。

「みんなは、これからたくさん勉強して、たくさんお友達を作って、たくさん遊ぶことになると思う。だから、一緒に楽しくやってみようね!」

そう言ってニコツと笑うフェイトさん。

・・・なんだ、立派に良い先生やってるじゃないか。バトルジャンキー戦闘狂かと思っ
てたぜ。

「あ、アウ・・スプリングフィールド君、もう良いよ」
「了解」

パチッと指を鳴らすと、同級生たちにかけられていた呪いが解け、
喧噪が帰ってくる。

皆、首を傾げているところを見ると、どうやら何で喋れなかったか
分からないらしい。

修行が足りんぞ？諸君。

その後、フェイトさんは黒板に今日と明日の予定を書いて教室から
出て行った。

第十五話（後書き）

フェイトさんを担任に据えてみた。

予想以上のマッチ感に驚いた。

祝！PV7万オーバー！。

今後ともご贔屓に（笑）

そのうちに記念で何か書いて見ます。

第十六話（前書き）

祝！10万PV

早すぎる。読んでくれている読者さんたちに感謝です。

うれしすぎたので投稿

第十六話

4月24日午後3時。
入学から3日が経った。

もうカリキュラムがスタートし、なかなか楽しくもダルい学校生活を送っている。

思い返せば、生前は小学生で病を患っちゃったから、ろくに学校へ行って無かったんだ。

無論、学校行事などは体験したこともないし、友達作りなんて出来やしなかった。

だから、見るもの全てが新鮮であり、キラキラと輝きに満ちた毎日を過ごしている。

って俺の事はどうでも良いか。

現在、一時間目。
コロコロと口の中でキャンディー（抹茶ミルク味）を転がしながら、
頬杖について授業を受けている。

科目は“算数”。もはやル気の欠片も起きない。足し算引き算なんて完璧に出来るっつーの。

「良い？みんなはね、リンゴを5個持ってるの。でね、そこから2個食べちゃったらいくつ残ってるかな？」

3個ー！！というクラス全員（俺を除く）の可愛い声が響く。

「はい、正解。良く出来たね」

その答えに満足した算数の先生、陽村すずか先生は嬉しそうに頷くと、次の問題を黒板に書き始めた。

ダメだ。俺はアレ（クラスメイト達）に混ざりたくない……。混ざったら俺の中の何かが粉々に砕け散る気がしてならん……。

あ？陽村すずか先生？まんまだよ。ヘアバンドが良く似合ってるよ。

“夜の一族”？知らね。本人に聞いてみてくれ。

そんなことを考えていると、コツンと軽い衝撃が頭に。

見上げると、いつの間にか俺の後ろへ陽村先生が回り込んだ。

「コラッ！アウラ君、授業中にキャンディー食べちゃダメでしょ？」

「・・・えー」

「えー、じゃ無いの！次食べたら職員室まで連れて行くからね？」
そう言っで一瞬で黒板の所まで戻った陽村先生。

・・・え？今の瞬動？

「じゃ、次の問題をやろう。やる人は手を上げて」

はーい！！と言いながら天を突かんばかりにズバババツと手を上げるクラスメイト達。

「よーし、じゃあみんなでやろう。今度はね、5個のりんごを・・・」

と、陽村先生が黒板を向いて文字を書き始めたのを確認した俺は、6個目のキャンディー（練乳味）を口へと放り込んだ。

トイレ休憩をはさんで、二時間目が始まった。

科目は“理科”。担当は、あのジェイル・シュテリエティ先生。コロコロとキャンディー（ソーダ味）を舐めながら、授業を受ける。

意外とジェイル先生の授業は面白い。

結構分かりやすく教えてくれるし、何より飽きない。

「では、この線にこれを繋いでみると・・・」

乾電池ボックスから延びた銅線に、ジェイル先生が豆電球を繋ぐ。

すると、当然ながら豆電球はピカッと光った。

おぉー！！と喜ぶクラスメイト達。良いね、単純で。電池に電球繋げば光るなんて当たり前なのに。

「このように、魔法に頼らなくても光を出すことは出来るのだよ。何事も魔法に頼り過ぎないようにしたまえ」

しばらくしてジェイル先生はそう締めくくり、理科の授業は終わった。

三時間目。科目は“体育”。担当の先生は・・・不明。
何でかって？自習だったからさ。

自習って言っても、なんかプリントを配られて、フェイト先生の監視の下にひたすら解かされただけなんだけどな。

キャンディー（オレンジ味）を舐めながら、5分くらいで解き終わったため、エヴァから借りた本を読んで時間を潰す。

特に何も問題は起きずに、授業は終わった。以上

四時間目。科目は“基礎魔法学”。

やっとな魔法かよ。と思ったのは俺だけか？まあ、初等部なんだから一般常識などを教えるのは当たり前っちゃ当たり前なんだけどな。

キャンディー（マスカット味）を舐めながらそんなことを思う。

多分、その辺の教育をきちんとやらないからメガロ産の魔法使いはアホなんだろう。

全部が全部、アホとは言わないけど、大半がそうなのはきつと一般常識などが欠如しているからなんだろうな。

故に簡単に洗脳教育を施され、メガロの犬に成り下がる。

自分たちが掲げている“正義”とやらは、メガロのトップに居座っている元老院どもが用意したプロパガンダということに気づいていない。

盲目的に“正義”を信じ、しかもそれが世間一般の常識とさえ認識しているから、ヘタな宗教よりも性質が悪いだろ。

他人の意見に流され、真偽の程も確かめずに行動する。

人として、自ら考えることをやめたらもう人間じゃないと思うんだがなあ・・・。

そもそも正義なんてクソだ。それ以上でも以下でもない。

“勝てば官軍、負ければ賊軍”という有名な言葉が示すとおり、喧嘩して勝った方が正義なのだ。

強い方が正義。それは歴史が証明している。

戦争で勝った方が、自分たちの好きなように歴史を書き換え、後世に語り継ぐことで今日に至っているからだ。

・・・・・・・・あれ？なんの話だっけ？

ああ、基礎魔法学か。

今俺達は魔法を使う上で基礎中の基礎である無属性魔法の一つ“治療魔法”の練習をしている。

傷の付いた魔法人形に魔法をかけ、傷が塞がったら成功、という至極簡単な方法だ。

「はぁ・・・プラクテ・ビギ・ナル“汝が為に、ユピテル王の恩寵あれ。治療”」

俺の詠唱と共に柔らかな光が放たれ、瞬時に魔法人形の傷が塞がる。

別にこの程度の魔法なら完全に無詠唱で使えるんだが・・・まあ良いか。

「はい、皆さんこちらを見てください」

しばらくして、パンパンと手を叩く音がしたので黒板の方を見てみ

る。

すると、基礎魔法学教師の七神シャル先生が傷だらけ魔法人形を教卓の上に乗せていた。

「では、ちよつと見ていてくださいね・・・“治癒”」

シャル先生がそう唱えると、傷が徐々に治っていった。

だが、シャル先生は魔法人形の傷が消え去っても魔法を停止せずにかけて続ける。

すると、魔法人形は次第に色が青紫色に変わり、グシャリという生々しい音を立てて崩れてしまった。

「このように、治癒魔法をかけ過ぎると、人の体は腐ってしまいます。だから、こんなことにならないように、勝手に治癒魔法を使っ
てはいけませんよ？分かりましたか？」

はーい！！と元気よく返事するクラスメイト達。

しかし、そんなクラスメイト達とは裏腹に俺は軽い恐怖を覚えていた。

魔法は簡単に人を殺せる。それを今改めて思い知ったから。

今、シャル先生が起こした現象の説明は簡単だ。過剰な回復促進による細胞組織の破壊。

そもそも、治癒魔法とは人間が持つ自己修復機能を促進させる魔法である。

人間の自己修復機能とは突き詰めれば細胞分裂だ。

しかし、細胞が分裂出来る回数は決まっている。

つまり、細胞分裂の限界を迎えた細胞は・・・文字通り壊れて死滅してしまう。

それがさっきの現象。壊死した部分は腐り、二度と癒えることは無い。

初心者でも扱えるような簡単な魔法でさえ、相手の命を奪うことが出来る。それが俺達が扱う魔法の力なのだ。

だってそうだろう？ “魔法の射手” なんてものが最たる例だ。

初心者中の初心者でも扱えるうえに、最低でもパンチ一発分があり、魔力の込め具合によってはバズーカ級の威力を発揮する。さらに、親父みたいな魔力バカが使えばミサイル級の威力を持つてるだろう。

俺が考えるに、魔法使いは皆自分が兵器を常に携行していることを自覚したほうがいいと思う。

自覚しないから平気な顔して他人に魔法を撃てるんだよ。

試しに“魔法の射手”を喰らってみれば良いんだ。そうすれば痛みがわかるだろう？

痛いぞ、アレ。エヴァや親父にいつも撃たれてたから良く解る。

しばらく考え込んでしまった俺は、授業終了のチャイムを聞き逃し、

クラスメイトたちが出て行くのに気がつかなかった。

そして、ふと気がついたときには・・・

「・・・・・・・・あれ？」

すでに教室には誰も居なくなっていた。

誰か一言くらい声をかけてくれても良くね？

第十六話（後書き）

そろそろなのはキャラの紹介でも載せます。

第十七話（キャラ紹介）（前書き）

10万PVを記念して

連投します。

第十七話（キャラ紹介）

主人公

アウラ・スプリングフィールド

20歳と言う短い人生を終え、天国へ行くのかと思ったら神様によって転生の道へ。

その際、スキル“騎乗B”と“魔力放出A++”、黄金色のパッチ（マーズサイト）を貰う。

さらに神様の計らいで、あのシャノン・ワードワーズからパッチの使い方などを教えてもらえることに。

スプリングフィールド姓からわかるように、原作主人公ネギ・スプリングフィールドの10歳上の兄。

外見は両親に全く似てない。ちなみにアルビノ体質。

とあるゲームの究極AIに瓜二つの、乳白色の髪を持つ男の娘。

母親の胎内で何か相乗効果的な現象が発生したらしく、父親の数百倍もの魔力量や氣の量を有している。

さらに母親から王家の魔力（完全魔法無効化能力）も受け継いでいるが、まだ発現してはいない。

無論、圧倒的なバトルセンスや魔法の才能も受け継いでいる。

得意属性は“雷”“氷”“闇”“火”“影”

ダイオラマ魔法球を使って修行したため、外見はhackシリーズの大人版アウラと瓜二つ。

キャンディー好きで、影の中へ数万個単位で常備。味は様々な物が

揃っているが、一番好きなのはイチゴミルク味。
逆にガムが嫌い。本人曰く「あんな樹液の塊を食って何が良いんだか」

現在、教えを受けた人物

ナギ・スプリングフィールド

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

シャノン・ワードワーズ

現在までに登場したなのはキャラ表

○内は年齢

高村なのは（20）

“天使”をモチーフとした魔法騎士団の改造制服を着用している魔法使い・・・訂正“魔砲使い”

担当教科は“魔法戦闘”。担当クラスは1－D。

科学と魔法のハイブリット体“MS”という技術を好んで使う。

相棒の名はAI搭載型魔法杖ライジングハート。

実家が“碧屋”という喫茶店で、アリアドネーでは結構な名店だとか。

世界で一番最初に“砲撃魔法”という“魔法体系”を確立させた人

物。

風系魔法を“桜色”に変える“アナザーカラー別色”の持ち主。

魔力の制御、集束技能に優れ、接近戦等もこなすオールラウンダー。

“エースオブエース”“白い魔王”“機動砲台”などの異名を持つ。

アリアドネー最強集団“機動一課”の一員。

得意属性は“火”“風”“光”

現在、恋人は居らず。

フェイト・アシュタロッサ（20）

“死神”をモチーフとした魔法騎士団の改造制服を着用している魔法使い。

担当教科は“雷魔法学”。担当クラスは1-C。

“MS”の使い手であり、“機動一課”所属。

相棒はAI搭載型魔法杖ファルディッシュ。

凄まじい速さの持ち主で、スピードを生かした接近からの一撃が必勝パターン。

あまりにも速いので、たまに超高速宅配便としてパシられることもしばしば。

母、姉、自分の三人家族。さらにペットが二匹。

“金色の閃光” “疾風迅雷” “見えない死神” などの異名を持つ。

得意属性は“雷” “風” “闇”

現在、恋人は居らず。

七神はやて（20）

“堕天使”をモチーフとした魔法騎士団の改造制服を着用している魔法使い。

担当教科は“人間学”。担当クラスは1－A。

“MS”の使い手であり、“機動一課”所属。

相棒はAI非搭載型魔法杖シェヴァルトクロイツ。

遠距離攻撃と広域殲滅が得意であり、もともと魔法使いらしい魔法使いと言える。

強力な古代語魔法を使いこなすが、接近戦がやや苦手である。

かなり賢い頭脳派キャラだが、稀に胡散臭いことがあるために若干信用されないことも。

両親とはすでに死別しており、現在はアリアドネーの教師用マンシヨンで親戚4人と共同生活中。

七神家ヒエラルキーの頂点。

“蒼天の女王” “歩く魔法兵器” “魔力駆動式魔法狸” などの異名を持つ。

得意属性は“氷” “闇” “地”

現在、恋人は居らず。

ジェイル・シュテリエティ（25）

天才中の天才。常に白衣を纏っている人物。

アリアドネー内にある大学の教授だが、何故か初等部の理科を教えていたりもする。

健全な意味での子供好きであり、三度の飯よりも研究が好きな変人。

MSの開発者で、機動一課専属のエンジニア。

戦闘力は皆無だが、結界系の魔法が得意であり、防御力のみで言うならアリアドネーで一番。

たまに変な研究をしているために周囲からマッド認定されている、ある意味不幸な人物。

現在、新婚ホヤホヤのリア充。

七神シャマル（26）

白衣が似合う、ウェルキンズ魔法学校の保険医。

世界最高位の治癒魔法使いであり、古今東西の医学や薬学に精通した医療のエキスパート。

はやての親戚であり、七神家第4位の権力者。

好きな男性のタイプはカワイイ子（アウラはどストライク）。

優秀な人物だがうっかり属性を保有しており、たまに大事件（しようもないレベルだが）の引き金を引く事がある。

機動一課の救護要員でもある。

用語解説

MS

Mid-childa-Systemの略称。モビルスーツの略称ではない。

ジェイル・シュテリエティ教授が開発した、魔法と科学のハイブリット技術。

BWと呼ばれる魔法杖を用いて初めて行使可能な魔法体系。

極めて扱いが難しい上に、消費する魔力が莫大なため、現在使い手は世界に10人ほどしかない。

BW

Battle-Weaponの略称。バロックワークスの略称ではない。

ジェイル・シュテリエティ教授がMSの運用のみを考えて作り出したマジックアイテム。

魔法杖にAIを搭載することで戦闘行為と並行して高度な演算を可能とし、常に最適な行動をセレクトすることが出来るインテリジェントシステムと、逆にAIを搭載しないことでそれ以外の効果（魔力運用や魔法制御など）を追求したアームドシステムの二種類が存在する。

変形機構も付いており、状況に合わせた武器セレクトが可能なため極めて汎用性が高い。

一台数千万はする代物だが、ジェイル教授の好意により“機動一課”の面々へと無償で贈られた。

機動一課

アリアドネーを守るアリアドネー魔法騎士団の中でも最強の集団。

7人の魔法使いたちと5人のスタッフで構成され、一人一人が各分

野で最高の实力を持つ。

大戦の英雄である“紅き翼”と同等かそれ以上の戦闘力を持っており、アリアドネーの永世中立に一役買っている。

中でも、なのは・フェイト・はやてのトライアングルフォーメーションは全世界公認の最強フォーメーションとして認知され、夢見る魔法少女たちの憧れの的。

機動一課予備軍である、機動二課、機動三課も存在する。

第十七話（キャラ紹介）（後書き）

こんな感じですかね。

これからは一定数以上の新キャラを出したら随時紹介を書くことにします。

第十八話（前書き）

第十六話の“魔法の射手”についての記述を修正完了
ご指摘してくださった方々、ありがとうございました。

思いついたので投稿。

閑話的なものなので短いです。

第十八話

6月12日午後3時。

どうやら魔法世界にも梅雨があるらしく、連日雨が降り続けている。

湿度も湿度も高いためかなり不快な天気だが、念動フィールドを張り巡らせている俺には関係なかった。便利だな“念動力”。

今日は授業も終わり、俺は自室で読書をしていたのだが……

「で？ あんたらは何で俺の部屋にいる？」

机に向かっている俺の背後でガサガサゴソゴソと、てんで好き勝手している三人に問いかけてみる。

・・・あ、ヤベ。素の口調で喋っちまった。

「暇つぶしなの」

「暇つぶしかな」

「暇つぶしやな」

上からなのはさん・フェイトさん・はやてさん。
ていうか暇つぶしで生徒の部屋を家捜しするんじゃないよ。

「いや、マジで何しに来たんです？」

「ふふん、それはやなあ・・・」

と言いながらゴソゴソとポケットを探り、何かを取り出すはやてさん。あれは・・・手紙？

「ラブレター？」

「そうやで。私の想い、受け取ってーな・・・ってちがーう！
」

スパーンと手紙を床へ叩きつけるはやてさん。

これが・・・噂に聞くノリツツコミか！

はやてさんが叩きつけた手紙をなのはさんが拾い、俺へと手渡す。

「何ですか、コレ」
「果たし状なの！」

・・・what?

「畑市場？」

「そうそう、今は坪単価が安いから買いやで・・・ってなんでやねん!!」

再びはやてさんのノリツツコミ。さっきから忙しいな・・・。

「果たし状だよ。は・た・し・じょ・う!!」

いや、フェイトさん。そんな一文字一文字強調しなくても分かりますって。

「・・・まあ良いです。で？誰と戦えば？」

「私たち三人なの」

・・・は？

「聞き逃したのでもう一回言ってもらっても良いですか？」

「仕方ないなあ。私たち三人となの」

・・・聞き間違いじゃなかったんかい。

「えー、それは一人一人と、ってことですか？」

「違うよ。私たち三人全員と」

「・・・えー」

それなんて死亡フラグ？

「ちなみに拒否権は無いで！教師命令やからな！」

うわー、横暴すぎるだろ・・・

「セラス総長にも許可は取ったしね」

あの人許可したんかい。

「・・・・・・はあ」

「無い（・・・）とは思うけど、もし私たちに勝ったら良いことあるの！」

「せやで。無い（・・・）とは思うんやが、もし勝てたら私ら三人が
良い物あげるわ」

無い（・・・）を強調すんな。

でも何をくれるんだろ。めちゃくちゃレアなマジックアイテムとか？
気になるな・・・全力出すか？

「ふふっ・・・もちろん手加減はするからね？」

・・・・・・ほう、面白い。

あの日の俺（150年前の）とは比べ物にならないほど強いぜ？

よろしい、ならば戦闘だ。

「受けて立ちます」

そう言うと三人は、若干嬉しそうな表情をした。この戦闘狂どもめ
・・・・・・

「じゃあ、その果たし状を良く読んでおいてね。ルールとか場所が
書いてあるから」

「逃げるんやないで？逃げたらお仕置きや」

「コラ、はやて。そういうこと言わないの。またね、アウラ君」

そう言い残して出て行くのはさん・はやてさん・フェイトさん。

後に残ったのは・・・・・・

「・・・絶対に倒してやる」

散らかされた部屋だった。

第十八話（後書き）

次回、アウラがあのだゴールデントリオと戦います。

アウラの運命や如何に・・・。

第十九話（前書き）

お約束どおり、投稿します。

それでは、どうぞ

第十九話

6月13日午後5時。

場所はある時と同じくセラス総長の魔法球内。

今日は決戦日である。だが、縁起が悪いことに今日は“13日の金曜日”で“仏滅”。

よくこんな日を選んだよな、あの三人。

準備は万全、体調も良好。

汚れたりしても良い様に、ジャージへと着替えてから寮を出る。

寮から飛行魔法でセラス総長の住むマンションへと移動し、エントランスで待っていたセラス総長と合流。

一緒にセラス総長の部屋へ行き、魔法球の中へ移動する。

セラス総長に連れられた俺が中に入ると、予想に反して結構な数の人がいた。

すでに戦闘服（アリアドネー魔法騎士団の改造制服）に着替えたなのはさん・フェイトさん・はやてさんは勿論のこと、セラス総長にジェイル先生、シャマル先生に陽村先生、あと名前も知らん人が何人か居る。

え、何これ。エキシビション？何でこんなに人がいるの？果たし状

を読んだ限りではギャラリーについて明記されてなかった気がするんだけど。

「来たわね。混乱しているみたいだから説明しておきましょう」
セラス総長が軽く混乱中の俺に説明（という名の言い訳）を始めた。

10分にも及ぶ壮大な説明を要約すると、とある会合の際にセラス総長がうっかり俺と三人娘が戦うことを周囲に漏らしてしまったかららしい。なのは・フュイト・はやてしょうもない・・・。

「大丈夫ですよ。怪我しても完璧に治してあげますから」
「その通り。もし治らなくても私が何とかしてあげよう」
「えーと、頑張っ^て！ 終わったらキャンディーあげるからね」
ギャラリーの一部である先生方の応援。
上からシャル先生、ジェイル先生、陽村先生である。

みんなありがたいことを言ってるはずなんだが・・・ジェイル先生が今一つ信用ならんのは俺だけか？

うん、バカなことを考えてないでそろそろ脳みそを切り替えなきゃだな。

相手は三人娘。しかも、俺が調べた限りでは最強のトリオ。

一度戦ったことがあるフェイトさんのバトルスタイルは、高速移動からの一撃離脱。

他の二人のバトルスタイルも、まあ何となくだが察しはつく。

なのはさんは圧倒的な防御力と砲撃魔法を用いた中距離からのサポート役で、はやてさんは膨大な魔力と強力な魔法によるデカい一撃を決めてくる完全後方型だろう、多分。

主な戦法としては、フェイトさんが高速機動でかく乱しながら斬り込み、なのはさんがその状況にあわせたベストな魔力弾や砲撃でサポート、はやてさんは二人に守られながら高威力魔法を撃つ、ってところか？

……今から戦う俺が言うのもアレだけど、完璧な布陣じゃね？

こういう連中と戦う際には、まず前衛を落とすのが定石なんだが・
・難しいな。

しかも俺は自身に制限をかけてるから・・・。“念動力”は使わないし、身体スペックも親父くらいまで落としてある。ついでに言うならアーティファクトも使わない。

当然だろ？今回は模擬戦であって殺し合いではないからな。

全力で行ったら確実に俺が勝利する。“念動力”を使って拘束しちゃえばゲームセットだし。

ま、今の俺（ステータスダウン&能力封印）に出せる全力で戦うでしょう。

場所を変え、現在コロッセオ。

あの時、完膚なきまでに破壊されたはずのコロッセオは、一回り大きくなって再建されていた。

最初の時もあったんだが、このコロッセオはとにかくデカイ。東京ドームの10倍はあるんじゃないだろうか。

「どうかしら？ ジェイル先生の協力で、さらに頑丈に造り直したのよ。これであの時みたいなことにはならないわ」

「……だいいいですね」

自信満々のセラス総長。確かに強力な防御結界が張ってあるっぽいけど……結界破壊効果を持つ攻撃を喰らえば一撃粉碎されるんじゃない？ 具体的に言えば、なのはさんのスターライトブレイカーとか。こっちのなのはさんが使えるかはわからないが……いや、使えるそうだな。

「じゃ、頑張って」

そう言ってセラス総長はギャラリーを引き連れてどこかへ行ってしまう。戻っていった方角から見て城のほうなので、安全圏で遠見の魔法でも使って観戦する気なのだろう。

残ったのは俺と、フェイトさん、なのはさん、はやてさんの四名のみ。

「「「……」」」」

殺気ではないがそれに似た闘気をお互いにぶつけ合い、ピリピリした空気が漂い始める。

まだ直接的に拳を交えていないだけであって、すでに戦いは始まっているのだ。

「さあ、始めましょうか・・・っとその前に少し良いですか？」

「なんや？辞世の句でも詠むんか？」

「いやいや。貴女達に合わせるんですよ」

はやてさんのツッコミをかわした俺は、小さな丸薬のようなものを一粒取り出してゴクンと飲み込む。

すると、ポフンという軽い音と煙を立てて俺の見た目が大人に変わった。

これなら子供を攻撃するという罪悪感も生まれないだろ。俺だったらやり辛くてしょうがないからな。後で「攻撃しづらかったから」なんて言い訳されても困るし。

まあ、丸薬云々は偽装工作で、本当は幻術を解いただけなんだが。幻術解けば大人ボディだし。

ちなみに丸薬はキャンディー（苺ミルク味）で、軽い音と煙は火属性魔法の応用だ。

「さて、これで体格差によるハンデは無くなりましたね」

そう言って軽く両手を広げて見せると・・・あれ？どうした？三人とも赤くなったりして。

「どうしました？」

「な、なんでもないの！」

「そ、そうや！何でもないで！」

「・・・／／」

・まあ良いか。でも、ここから先はお遊びなんてしてる暇は無いぞ？

挨拶代りに莫大な魔力の奔流を叩き付けた。

発するだけで大気を揺るがし、常人なら一瞬で魔力酔いを起こして気絶するような魔力量を放出。

すると、三人の顔はスッと引き締まり、顔つきが戦士のソレになった。

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん、これは本気でかからなきゃダメだね」

「せやな。少しでも手え抜いたら負けてまう」

そうそう、相手を侮ってはいかんよ。子供が大人より強いことなんてざらにあるんだぜ？

俺の発する魔力奔流を押し返すかのように、三人からも魔力が放出される。

それらは共にぶつかり合って渦を巻き、強風や地響きを引き起こした。

そして・・・

バキバキッ！！

「デイベインバスター！！」

“雷の暴風！！”

音を立てて地面にひびが入り、それを皮切りに戦闘が始まった。

第十九話（後書き）

長いので二話構成で。
すぐに次を投下します。

第二十話（前書き）

連投。

微妙な出来ですが、どうぞ

第二十話

開始と同時に放った俺の“雷の暴風”は、なのはさんの直線砲撃魔法ディバインバスターを相殺して爆発。それと同時にそれぞれが空中へ飛び上がって自分の得意なレンジへ移動し、戦いの幕が開けた。

爆発で巻き起こった土煙を突破し、目にも止まらぬスピードでフェイトさんが斬りかかってくる。装備は始めからザンバーフォーム。ずいぶんと飛ばしてるな。

「はあっ!!」

「そらっ!!」

ガキイイイイン!!

前回同様、“断罪の剣”で迎撃。甲高い金属音が響く。

どうでも良いことだけど、何で魔力刃どうしがぶつかったのに金属音が出るんだろうな。

「相変わらず速い、ねっ!!」

「そりゃどう、もっ!!」

ガキインと互いに魔力刃をぶつけ合い、ギリギリと鏢迫り合いを繰り広げる。

力はほぼ互角。まったく・・・こんな細くて白い腕のどこにそんな力が秘められているのやら。

その時、巨大な魔力の集束を感じた俺は、力の入れ具合を若干弱めることでフェイトさんとの力の拮抗を崩し、一瞬バランスを崩したフェイトさんの腹へと蹴りを入れ、自身もその反動と虚空瞬動の要領で大きく後ろへ飛んだ。

それと同時に桜色の閃光が飛来して俺の居た地点を直撃し、爆炎を上げる。

今は・・・なのはさんの砲撃か。爆炎が上がるっておかしくね？殺す気かよ。

これは先になのはさんを落とさなきゃキツいかな。

虚空瞬動で距離を詰め、なのはさんに斬りかかるも、途中で回復し終えたフェイトさんに割って入られ、再び接近戦が始まる。

一撃、二撃、惨劇、って字がちげえし。いや、状況だけ見れば合ってるかも知れんけど。

何度も剣戟を重ねるも、一進一退の攻防線が続く。

時折、なのはさんからの絶妙な砲撃が飛んでくるため、一秒たりとも気が抜けない。

「チッ！厄介すぎるぜ」

「そう思うならさっさと落ちて、よっ！！」

「だが断る！！」

振り下ろされたザンバーを合気的要領で強引に逸らし、フェイトさんに一撃叩き込もうとするが、フェイトさんはザンバーが逸らされた時点で無理に力の流れに逆らわずにそのまま軽く半回転させ、ザンバーの柄を使って俺の一撃をガード。

さらにその一撃をはじき返すことで俺の隙を作り、攻勢に移ったフェイトさんは、凄まじいスピードでザンバーを振って全くの同時に剣閃を3つ繰り出した。

放たれた斬撃は、唐竹、袈裟、横薙ぎの三撃。

「ッ！？」

即座に無詠唱で出したもう一振りの“断罪の剣”と、元から出していた“断罪の剣”の二振りで唐竹、袈裟を相殺。残りの横薙ぎを魔法障壁で迎撃する。

バキィィィン！！

その一撃は俺に届かなかったものの、俺が瞬時に張れる中で最硬の魔法障壁を粉々に粉碎した。

あまりの威力に冷や汗が垂れる。

おいおい、どこの燕返しだよ。同時に（・・・）斬撃を繰り出すとか・・・どうやってるんだ？

「まさか受け止められるとは思わなかったよ・・・」

軽く落胆の表情を浮かべるフェイトさん。いやいや、十分に誇って良い強さだろ。どうやったかは知らんが、技術とスピードだけで某アサシンのサーヴァントが持つ技に追いついたんだからな。

「さあ、スピード上げて行こうか！ファルディッシュ、行くよ！！」

— Yes sir！！ Sonic move！！ —

「チッ！加速か！」

瞬時に消えたフェイトさん。

間髪入れずに今度はなのはさんの声が響く。

「じゃ、私たちも行くよ！ライジングハート！」

— All right my master！ Flash mo

ve!!--

そんな女性の機械的な声と共に、なのはさんも消え失せた。

・・・おいおい、これってヤバくね？

「両者とも超加速か・・・ッ!？」

迫ってくる二つの風切り音を捉えた俺は、無造作に左右へと両手の“断罪の剣”を一閃。

ガギギイイイン!!

すると、全くの同タイミングで斬りかかってきたフェイトさんとなのはさんの武器と交錯し、激しく火花を散らした。

いつの間にかなのはさんもライジングハートの形状を槍みたいな形状へ切り替え、先端部から半実体化している魔力刃を出して斬りかかってきている。

ちゃんと俺の斬撃の腹を捉えており、試しに力をかける部分を変えてみれば、即座にそれに反応して拮抗出来るように押し返してくる。

誰だよ、なのはさんの運動神経が鈍いとか言った奴は。めちゃくちゃ良いじゃんかよ。

太刀筋をしつかりと捉えて、自身の斬撃をそれに合わせるってのは並大抵の運動神経じゃ出来ないんだぜ？少なくとも動体視力と反射神経が良くなきゃ出来ない芸当だし。

それにしても・・・なのはさんよ。あんたって砲撃担当じゃなかったんかい。

砲撃魔法使いが接近戦を挑むのはどうかと思うんだが・・・。

おかげで砲撃による支援が途絶えたのは結構だが、今度は狭いクロスレンジでフェイトさん、なのはさんの二人と切り結ぶ羽目になってしまった。

目まぐるしく互いの位置が入れ替わる。

俺がフェイトさんの背後を取って斬りかかれれば、超加速で割り込んだのはさんが斬撃を受け止め、その隙にフェイトさんが俺の背後を取って斬りかかりながら時間差を設けて蹴りも繰り出す。

身体を捻ってフェイトさんのザンバーをかわし、カウンター狙いでフェイトさんの蹴りを掠らせながらも後ろ回し蹴りを叩き込もうとするが、それをさせまいとなのはさんが小型魔力弾を俺の近くで爆発させることで爆風を発生させ、俺の身体のバランスを崩して蹴りを強制的に空振らせる。

爆風を防ぐために左手に展開していた“断罪の剣”を犠牲にして即席の盾としたが、結構な隙が生まれてしまった。

その隙を見逃すフェイトさんではないため、ここぞとばかりにザンバーを振るって斬り込むも俺が瞬時に張った魔法障壁に阻まれ、甲高い金属音を立てるだけに止まる。

その時、予想外の硬さ故に手が痺れたのか、フェイトさんの手の動きが一瞬鈍ったのを見逃さなかった俺は、その一瞬の隙についてフェイトさんに掌底で一撃入れたが、俺の攻撃後のわずかな硬直に隙を見出したのはさんに一撃貫つてしまう。

互いが吹き飛んで距離が開き、戦闘行為がリセット。

両者が隙を探して魔法による弾幕形成や超加速による高速移動で相手を牽制し合い、隙あらば攻撃を加える。

まさに一進一退。斬り込んでも押し返され、逆に斬り込まれても押し返す。

要するに攻めきれないのだ。互いの戦闘技術が巧みすぎて。

「くっ・・・強い・・・」

「フェイトちゃん、アレで行くよ！」

「了解、なのは！」

なのはさんの声に呼応したフェイトさんは、即座に魔法杖から蒸気を放出。その後、カートリッジを一発ロードして自身の得物を大剣から大鎌へと切り替えた。

今の蒸気は・・・余剰魔力か何かだろ。かなり魔力を含んでたし。

「アクセルシュート！！」

「ハーケンセイバー！！」

大鎌を一振りしたフェイトさんから半月状の魔力刃が高速回転しながら放たれ、それとほぼ同時になのはさんが虚空に展開した魔力スフィアから桜色の魔力弾が多数放たれる。

ちなみにこのハーケンセイバーとアクセルシュートは、俺が動くときに合わせて動きを変えたため、敵を自動追尾する効果があると判断。よって、避けるのは悪手。

故に俺は……

「……障壁展開、最大出力ッ!!」

ズガアアアアアン!!!!!!!!!!

最大出力の魔法障壁でガードすることを選択した。

だが俺の予想とは裏腹に、両者の放った魔法は俺の障壁に命中する寸前で交錯して互いに接触しあい、大爆発を引き起こした。

魔法障壁を展開していたために俺は無傷だが、爆炎と巻き上げられた土煙で視界が遮られてしまい全く見えない。

何がしたかったんだ？魔法攻撃に見せかけた爆発による攻撃？それとも他の何か？

・・・待てよ？今、俺はどんな状況に居る？

身体は魔法障壁のお陰でほぼ無傷。しいて言うなら土煙などで視界が利かないのと、魔力で出来た物が爆発したせいでその物を構成していた魔力残滓がまき散らされてしまったために正確な魔力探知が出来ないくらいか。

・・・ん？視界が利かなくて正確な魔力探知も出来ない？・・・それが狙いか！！

「プラクテ・ビギ・ナル“吹け、一陣の風！風花・風塵乱舞！！”」
すぐさま土煙と共に大気中へとまき散らされた魔力残滓を強風で吹き飛ばす。

しかし時すでに遅かったらしく

「ライトニングバインド!!」

「レストリクトロック!!」

超強固な魔力糸と雷の帯が、俺を空間に完全固定した。

間髪入れずになのはさんが叫ぶ。

「はやてちゃんっ!!」

「了解や! デカいの行くでえ!!」

「なのはっ! 離れるよ!!」

なのはさんの声に試合開始直後から姿を消していたはやてさんが答え、凄まじい冷気の塊がいくつも俺の真上で展開された。

それと同時にフェイトさんはなのはさんを伴って全力で魔法効果範囲から離脱し、空間自体に固定された俺のみが残される。

冷気は徐々に増大し、視認出来るほどにまで巨大化していった。

「チッ!」

アレはマズいな。あれ喰らったら間違いなくゲームセットになっちゃう。

回避・不可能。強固な魔力糸が幾重にも俺の関節を上手くロックしているため動けない。

迎撃・不可能。アレを迎撃できるだけの威力を持った魔法を詠唱してたら間に合わない。

防御・不可能。魔法障壁ごと凍らされて終わりだろう。

・・・手詰まりか？・・・待て、落ち着け。まだ何か策は有るはず・・・。

敵の攻撃は氷属性だと思われる。

なら、迎え撃つなら火属性が有効か？

いや、俺の師であるエヴァは俺の放った“燃える天空（弱）”を完全に凍らせたことがある。

つまり、火すらも凍らせることが出来る魔法だった場合は、即アウトだということだ。

「灰白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ」
俺が必死に考えている間にも朗々と続くはやてさんの詠唱。

それに応えるかのように冷気の塊が鳴動する。

なおも詠唱は止まらずに続き、巨大だった冷気の塊は圧縮されてキューブ状に変化した。

・・・ヤバいな。あと少しで術式が完成し、魔法が発動しちまう。

持って後数秒。その間に打開策を思い付かなければ敗北確定だ。

氷漬けなんて勘弁願いたいぜ。エヴァによって結構な回数を氷漬けにされてたから喰らったらどうなるかなんてよくわかる。

ぬう……どうするか。

150年もの戦いの間に獲得した“並列思考（100分割まで可）”をフルに使って考える。

「……あ！」

……かなり危険な賭けになるが、成功すればこの状況を逆転できる手段があるな。

どうせこのまま待っても負けるんだ。やらないで負けるよりやっ
て負けた方がよっぽど良いぜ。

頼む・・・間に合えッ!!

「詠唱破棄“闇の吹雪” 固定・・・リフレイン 復唱!!」

「来よ、氷結の息吹!!」

俺の両手に遅延された“闇の吹雪”が球状となって現れると同時に、はやてさんが詠唱の最終小節を唱え終わる。

そして、はやてさんが発動の言葉キーワードを口にしたのと同時に

「アーテム・デス・アイセスッ!!」

「双腕掌握!!」

俺は自身へと“闇の吹雪”を取り込んだ。

膨大な冷気の塊が殺到するが、俺には当たらずにすり抜けて（・・・）
（・・・）真下の地面へと着弾し、周囲を凍らせながら雪煙（？）を上
げる。

それを見やり、俺は安堵のため息をついた。

「・・・・・・・・賭けには勝ったか」

俺の行ったこと。それは、自身を冷気と化すことだ。

“闇の吹雪”を二発取り込んだ闇の魔法、術式兵装“暗黒氷河”。

自身を完全な冷気のボディと化す術式兵装で、絶対零度の力を自由に扱えるようになる。

さらに術式兵装使用中は上級古代語魔法を除いた氷系の魔法全てを
無詠唱で発動させることが出来るうえに、威力も1.5倍になると
いう特典が付く。

だが、この術式兵装には弱点がある。

身体を冷気と化すために大抵の攻撃を無効化出来るのだが、術式兵
装展開時の俺の身体の温度以下の冷気を帯びた攻撃は無効化するこ

とが出来ない。

つまり、術式兵装展開時の俺の身体の温度をマイナス100度と仮定した場合、マイナス100度以下の冷気を帯びた攻撃は無効化出来ずに喰らってしまうのだ。

だから今回、かなり危険な賭けだった。

もし、はやてさんの魔法が俺の術式兵装の温度を下回っていた場合、俺は負けていた。

だが、はやてさんの魔法は俺をすり抜け、俺の真下の地面を凍らせた。

つまり、俺の術式兵装の温度の方が下回ったために、はやてさんの魔法が効果を成さなかったのだ。

そして、前衛を務めていた二人は決定的なミスを犯した。

「拘束も解けたし・・・行くか」

そう、俺を縛り付けていた拘束魔法が解除されたのだ。

多分、勝ちを確信した二人が解いてしまったのだろう。

確かにあそこまで綺麗にコンボが決まれば勝ちを確信しちまうのも分からなくはない。

だがな、本当の殺し合いにおいては相手の死亡を確認するまで絶対に気を緩めちゃなんねえんだよ。

ま、今回は、その油断が命取りだったな。雪煙のせいで俺が無事な事に気付いて無いみたいだし。

ついでに言うなら、拘束を解除しなくても、俺の全身が冷氣になった時点で拘束は意味を成さなくなったんだけどな。すり抜けられるから。

悪いが、今回の勝負は俺の勝ちだぜ。

「双腕解放、“闇の吹雪”強制キャンセル。再魔力変換」

体内へと取り込まれた二つの魔法を排出し、強制的にキャンセルして魔力へと変換。それを体内へと再び戻すことでその分の魔力を回復させる。

「詠唱破棄、“こおるせかい”固定・・・復唱・・・掌握！」

瞬時に“こおるせかい”を二発体内へと取り込み、術式兵装“氷結皇帝”を発動。

その状態のまま気配を完全に殺し、影の“ゲート”を用いて瞬時に退避していたのはさんとフェイトさんの背後に回り込む。

いきなり現れた俺に二人とも気づいたようだが、もう遅い。

「・・・え!?!」

「そんな!?!」

焦る二人へ振り返る隙も与えずに二人の背中へと手を触れて

「双腕解放」

二発の“こおるせかい”を一発ずつ、それぞれなのはさんとフェイトさんに叩き込んだ。

咄嗟に二人の武器に搭載されたAI達が障壁を張ったが、広域殲滅魔法がゼロ距離で炸裂した衝撃には敵わなかったようで。

易々と障壁をぶち抜いた“こおるせかい”がフェイトさんとなのは

さんを捉え、見た目麗しい見事な氷像が二つ出来上がった。

「・・・おっと」

空中で凍らせたために二つの氷像が落下を始めたので、二つとも優しくキャッチしてゆっくりと地面へと降ろす。

攻撃の余波で壊れたりしないように、氷像の周囲へと強固な結界を張ってから再び空へと舞い上がった。

残る敵は目の前に浮かぶ、七神はやてただ一人。

後衛専門の魔法使いならさして脅威ではない。

後衛は前衛が居て初めて真価を発揮するのだから。

「まさかフェイトちゃんもなのはちゃんもやられるなんてな。てい

うかどうやって私の魔法から逃れたんや？」

「・・・企業秘密ってことで。降参します？」

「いや。確かにもう私には勝ち目がないかも知れへん。けどな？諦めるわけにはいかんのや!!！」

そう言って魔法杖を一振りし、空中に複数の赤黒い小型魔力刃を待機させるはやてさん。

「そうこなくっちゃ」

俺も負けじと多数の雷属性“魔法の射手”を遅延魔法で虚空へと待機させる。

そして

「穿て、ブラッディダガー!!！」

「撃ち貫けッ!!！」

魔法の撃ち合いが始まった。

第二十話（後書き）

えー、薄っぺらいですが難産でした。

次回は来週の月曜日に投稿したいと思います。

第二十一話（前書き）

更新遅れてすいません。

風邪引いてくたばってました・・・。

最後にアンケートあります。

第二十一話

6月14日午前10時30分。

決戦から一夜明けた。

今日は土曜日なので学校は午前中だけ。

算数と理科の授業があったのだが、疲れていたので爆睡して過ごした。

担当の先生である陽村先生とジェイル先生も、俺が疲れている理由を知っていたため、笑って見過ごしてくれたらしい。ありがたいことじゃ。

あの後。

なのはさんとフェイトさんを落とした俺は、はやてさんを魔法の撃ち合いの末に撃破。

これで三人とも落としたので、模擬戦は俺の完全勝利という形で終わった。

いやはや、流石に能力使用無し&身体能力制限&アーツファクト使用禁止の縛りはきつかった。これは定期的に同じ条件で訓練した

方が良いかも知れん。カンパニーマンと並列思考を併用したりしてさ。

余談ではあるが、俺はカンパニーマンを一度に10人ほど作り出すことができる。

包帯巻いたマントの男が10人・・・すげえシユールだな。

その後は気絶したはやてさんを城まで運び、なのはさんとフェイトさんの解凍作業をしていたシャマル先生に受け渡したあと、何故か崩れ落ちているセラス総長を尻目に魔法球から脱出。そのままセラス総長の部屋を出て寮へと帰還。

そのまま眠りにつき、翌日は普通に登校した。

で、朝から全授業を寝て過ごして今に至るわけだ。

ふと、誰かに揺すられる感覚で目を覚ます。

ぼんやりする頭をブンブン振って強制的に覚醒すると、見知った顔が見下ろしていた。

「・・・おお、久しぶりだな高音」

言わずと知れた金髪幼女(?)の、高音・D・グッドマンである。

金髪幼女って・・・エヴァとキャラ被ってるな。

「お久しぶりですわねアウラ」

「元気か？」

「ええ」

「そうか」

はい、会話終了。さて、帰るか。

「じゃあな」

「お待ちなさい」

グイッ・・・

「・・・!!」

い、痛い痛い!!そこを掴むな!引っ張るな!!

「なんだよ・・・」

「この後暇でしょう？ちよつと買い物に付き合っしてほしいのです」

買い物ねえ・・・まあ、俺も例の如くキャンディーの買い足しをしたかったから丁度良いか。

「別に良いよ」

「ほ、本当ですかッ!？」

「あ、ああ・・・」

なぜに自分で誘っておいて驚いてんだ？

あと頼むから大声出さないでくれ・・・寝起きの頭に響くんだ。

「で、どうする？今すぐ行くか？」

「いえ、友人と昼食をとる約束をしていますから、午後から行きましょう。そうですね・・・午後3時に正門前で待ち合わせまはどうですか？」

「午後3時ね、了解」

約束を取り付けた高音は、そのまま去って行った。

さーて、俺も昼飯を食ってくるかねえ・・・。

時は過ぎて午後3時。場所はウエルキンズ魔法学校正門前。

約束の時刻だが、まだ高音の姿は無い。

俺？俺は30分前にはこの場所に来てた。

母ちゃんの教育で、“女性を待たせてはいけない”ということをしつかりと教え込まされたからな。そんじよそこらのガキどもよりは女性の扱い方を知っている・・・はず。

「お待たせしましたわ」

10分ほどして高音はやって来た。

魔法学校の制服ではなく、薄桃色のワンピースを着ており、俺の目から見てとても可愛いと思う。

近づいてくる高音を見やり一言。

「お、似合ってるじゃないか」

母ちゃんのありがたい教え其の二。“女性と会ったときは、まず褒めよ”をさっそく実行。

「あ、ありがとうございます／＼／＼では、行きましょう」

うむ、怒ってなさそうなので成功だな。掴みはオーケーだ。

他愛もない話をしながら、しばらく道を二人で歩いていてふと気が付いた。

「なあ、これからどこに行くんだ？」

「え？・・・ああ、まだ行き先を言ってませんでしたわね。今日は時間があまりないので近場の商店街に行くんですのよ」

近場の商店街ねえ・・・。

俺御用達のキャンディーショップは“中央”の商店街にあるから、学校近場の商店街には行ったこと無いんだよなあ。

ちなみに“中央”というのは、アリアドネーの中でも重要な庁舎が多数存在する、いわばアリアドネーの中枢部のこと。

職員たちが多く住んでいる場所でもあり、福利厚生施設の類がとても充実しているエリアでもある。

巨大なデパートや広い商店街は勿論の事、カラオケボックスや映画館などの娯楽施設がいくつもあるため、休日には学生でこった返しているのだ。

「ここから歩いてどれくらい？」

「そうですね・・・歩いて10分くらいだと思いますわ。ほら、あの先に見える噴水広場を右に曲がれば商店街のメインストリートですわよ」

そう高音が指差した先には・・・うん、確かに噴水広場があるな。結構な量の人通りもあり、治安もよさそうだ。

「そっか。じゃあ行こうか」

「ええ」

ふとチラリと斜め下を見ると、所在無さ気にフラフラとしている高音の右手があっただので、がっしりと俺の左手で捕まえる。

「・・・／／／／」

嫌がる素振りもなかったので、そのまま歩き出した。

傍らから見ると微笑ましく映ってるんだろうなあ。

そんなこんなで一緒に歩き、噴水広場へと到着。

遠目で見たよりも大きい広場で、所々に設置されているベンチでは学生たちが思い思いにくつろいでいる。

広場の片隅ではアイスクリームやクレープを販売する屋台が出ており、行列が出来ていることから察するに結構繁盛しているっぽい。

ありや美味そうだな。買ってくるか。

「高音、少し休憩しようぜ。アイスとクレープどっちがいい？」

「そうですね・・・アイスが良いですわ」

そう言って財布を取り出そうとする高音。

俺はそれを押し留め、ベンチを取っておくように頼んでからアイスクリームを販売している屋台の前の行列に並んだ。

無論、アイスは俺の奢り。母ちゃんのありがたい教え其の三“女性にお金を出させてはならぬ”・・・らしい。

幸いアイスクリームはクレープと違って簡単に提供できるため、長蛇の列といってもすぐに俺の番が来る。

味は・・・まあ、無難にストロベリーとバニラで良いだろ。容れ物は・・・カップの方がいいな。

店員に注文し、代金を支払ってカップに盛り付けられた二色のアイスクリームを受け取り、目視で高音を探す。

高音は・・・ああ、居た居た。

うまい具合に噴水の側のベンチを取れたらしく、軽くこちらに手を振って場所を知らせてくれていた。

「お待たせ。ストロベリーとバニラ、どっちがいい？」

「そうですね・・・ではストロベリーで」

高音にストロベリー味のアイスクリームを渡し、自身も高音の横へと腰掛けてバニラ味のアイスクリームをスプーンで食べる。

・・・おお、なかなか美味しいじゃないか。これは子供騙しの職人ではなく、本職の人が作っているとみた！！

しばらくアイスをパクつき、お互いの近況話に花を咲かせる。

高音は、最近新しい靴を買ってもらった話や、ようやく基礎中の基礎である“火よ灯れ”が使えるようになった話を。

逆に俺は、誰々と模擬戦した話や、誰々と喧嘩した話を。

・・・あれ？俺って戦ってばかりじゃね？

どうにもアホらしい武勇伝だったのに、高音は笑って聞いてくれた。

30分くらいしてアイスを食べ終わり、ゴミを処理してから高音と再び手を繋ぎ、今度こそ商店街のメインストリートへ。

現在時刻は午後4時近くなのだが、夏の入りだけあってまだ日が高い。

「で？まずはどの店から行くんだ？」

「まずは・・・このお店ですわ。パジャマを買いたいのです」

そういつて高音が指差したのは、洋服屋。

「了解、じゃあここで待ってるよ」

偉大なる母ちゃんのありがたい教え其の・・・いくつだっけ？五くらい？

ともかく、“女性と一緒に洋服屋へと入ってはならない。一緒に下着を選ぶなど以ての外”。

理由は・・・・まあ、下着のくだりはわかるんだが、洋服屋に入

ってはいけない理由は不明である。

「・・・？アウラも入るんですよ？」

「いや、女性と洋服屋に入ってはいけないっていう教えを受けていてだな・・・」

「まだ子供ですから女性としてはノーカンですわ。さ、行きましよう！」

グイグイと俺を引っ張って店に入っていく高音。

母ちゃん、ゴメン。教え・・・守れなかった・・・。

「ありがとうございましたー」

事務的に挨拶する店員を尻目に、店を出る。

買い物は特に何もなく終わった。

高音のパジャマを俺が選んだくらいだ。結構恥ずかしかったがな。

「もう帰るか？」

「まさか。まだまだ行きますわよ！人に与えられた短い一生の中で、

無駄にしている時間なんて一秒たりともありませんわ!!せつかく
こうして商店街まで足を運んだのですから、悔いの無い様に堪能す
ることこそが正しい生き方ですわ!!」

そ、そうっすか。そんな身振り手振りを入れて力説しなくても・・・。

その後、あちらこちらの店をフラフラと行き来してお菓子などを買
い込んだ。

どうやら高音の買い物は最初のパジャマだけだったらしく、後は純
粋に遊びに行きたかっただけっぽい。

いろいろな店で買い物をしたり、何も買わずに冷やかしたりして楽
しみ、気がつけば午後6時。

すでに日は西へ傾き、赤々と燃えて町並みを照らし出していた。

魔法学校の正門前まで着く。

少し名残惜しいな。何だかんだ言って結構楽しかったし。

どうやら高音も同じ想いらしく、さっきから手を離そうとしている
のだが、逆に高音が手を離してくれない。

「なあ、俺もう寮に「また」・・・ん？」

「また一緒に行ってくださいますか？」

・・・そ、そんな潤んだ目で見るなよ・・・。当然、行ってやるさ。
いつだってな。

「もちろん」

「あ、ありがとうございます／＼／＼／」

これは今日のお礼ですわ・・・。
そういつて俺の頬に顔を寄せた高音。

すぐに離れてしまったが、俺の頬には確かに柔らかな感触が残っていた。

「さ、さようならっ!!」

猛ダッシュで去っていく高音。

恥ずかしがるならやらなきやいいのに、と思ったが嬉しかったので
野暮なことは言わないでおく。

「ま、たまには良いか」

そう呟いた俺は、寮へと帰った。

余談だが、このシーンだけ七神はやて殿がバッチリ見ていたらしく、あとで散々弄繰り回された。

まったく……だからタヌキなんていう不名誉なあだ名をつけられるんだよ。

第二十一話（後書き）

幼女とのデートで喜ぶアウラ君……。

さて、アンケートなのですが、ズバリ……。

アウラの従者たちにパッチ（マーズサイト）を装着させるか否かです。

チート化するか、しないか。

といっても、アウラ君の従者をやるっていう時点でチート化の道を歩ませることになるんですがね。

あ、もちろん、オリジナルの固有能力（パッチ装着時の恩恵のひとつ）なども募集中。

誰彼を従者にしたい、なんていうのもアリです。反映させるかはわかりませんが。

回答、お待ちしております。

第二十二話（前書き）

お久しぶりです

今回は短いので連投します

第二十二話

7月7日午前8時。

旧世界の日本では七夕と呼ばれている日であるが、生憎と魔法世界にはそんな風習は無い。

遙か空の彼方にある天の川で織姫と彦星がよろしくやってるんだろうが、俺からしてみればどうでも良いことである。むしろ、リア充乙って感じだな。

入学から早3ヶ月近くが経ち、新入生たちも落ち着いてくる時期。あちらこちらで大きな友達の輪（という名の派閥）が出来上がり、皆仲良く授業を受けたりしている。

無論、この俺にも友人ができ、快適で楽しい生活を送っているんだ

が・・・その友人って言うのが、ね。

「ねえ、ボクの話聞いてるかい？アウラ君」

クールビューティーなボクっ娘に・・・

「いやはや、私の美しさには惚れ惚れするだろう？羨ましいかい？アウラ君」

ウザいイケメンナルシスト・・・

「フツ・・・フツ・・・フツ・・・OK、50kgダンベル上げ1000回達成だぜ」

どこぞのバグみみたいな筋肉バカに・・・

「・・・・・・・・」

ほとんど喋らない読書好きの沈黙少女。

うん、キャラが濃すぎる。何なんだこの濃いメンバーは。
こいつら本当に初等部か？っていうくらい濃い。

そのことでフェイト先生に

「僕の友達・・・・・・・・キャラが濃いです」

と魔法学校の職員室で相談したら

「アウラ君・・・・・・・・類は友を呼ぶ”っていうことわざ知ってる？」

と真顔で返された。俺エ・・・・。

俺のどこがキャラ濃いつて言うんだよ・・・・・・・・ん？

俺のキャラ設定(?)としては、魔法世界を救った英雄の息子で、今は亡きウェスペルタティアの王位継承権第二位(一位はまだ見ぬアスナ姫)、エヴァンジェリンやシャノンを師と仰ぐ魔人の後継者で、ウエルキンズ魔法学校初等部の学生、外見6歳だが中身は150歳を超えているというどこぞの少年探偵と同じようなボデイ。

うん、自分で言っていて良く分かった。人の事は言えねえ。

結論。

“類は友を呼ぶ”ということわざは正しい。

友人その一

オウカ・ミスティア

物静かで常に冷静さを失わないクールな性格のため冷たい印象を受けるが、人一倍仲間を思いやる優しい子。一人称はボク。頭が良く、学年で一桁台の順位を誇る非常に良い成績を常に取っている。

とある秘密を抱えており、夜と満月が嫌い。

友人その二

レオール・アズレード

亜人と人間のハーフである少年。

10人が10人振り返るほどの甘いフェイスを持っているが、頭が

残念なうえに極度のナルシスト。アウラ曰く「黙っていればレディーキラー」。

実家が魔法世界有数の大富豪。商業分野において有り余るほどの才能を持っている。

友人その三

ゴーク・アルスマグナ

6歳時にして身長160cmを超える体格の持ち主。

しかも、その巨大な体格に余すことなく筋肉をつけているため、付いたあだ名が“筋肉の壁”マッスル・ウォール。

趣味は筋トレ。好きな食べ物は竜の肉で、好きな飲み物はプロテイン。

意外にも手先が器用で、宝石細工などの細かい作業が得意。

実はミリアが好き。

友人その四

ミリア・シュヴェルトレイン

常に沈黙を保っている少女。

暇さえあれば読書をしており、知識が豊富。

入学早々に虐められていたが、アウラ達に助けられて友達になった。極めて頭が良く、成績はアウラに続いてナンバー2。

しゃべることは極めて稀で、しゃべったとしても必要最低限のことしかしゃべらない。

オウカと同じく、とある秘密を抱えている。

第二十二話（後書き）

最近、テレポ―トで体内に爆弾でも転送すれば一方通行に勝てるんじゃないね？と思いついた作者です。
アクセラレーター

ただいま、アウラ君の従者たちにパッチを装着するか否かでアンケート中。
できれば、これを読んでいる皆さん、回答をお寄せくださるとうれ
しいです。

第二十三話（前書き）

前話では友達紹介がしたかっただけです。

アンケート中。

詳しくはあとがきで

第二十三話

8月10日午後3時。

夏真っ盛りの暑い季節。

普通ならクーラーのきいた涼しい部屋でのんびり過ごすがベストなんだが・・・

アリアドネーから北に数キロ離れた所にある広大な森。通称、ユミルの森の奥深く。

虫や鳥などの楽園であり、獣たちの住み家でもある場所に俺達は居た。

猛獣や小型龍種のテリトリーでもあるこの森は、常時大人達が監視下に置き、生徒達の立ち入りを禁止しているエリアでもある。

では、そんな場所で俺達は何をしているのか。

「おい！！アウラ、そっちに行ったぞ！！」

「おう！任せとけ・・・よっしゃ、オスは捕まえたぞ！レオール、残りのメスは頼むぜ！」

「任せたまえ！！このパーフェクトな私に捕まえないものなど無い！！」

ぶっちゃけ、昆虫採集をしているのである。

きっかけは俺たち5人組で一緒に食べていた昼食時にゴーグが発した一言だった。

「あ、そう言えばよ、この時期ってユミルの森にGSBが生息してるらしいぜ」

その言葉に、俺とレオールの食事はピタッと停止する。

「GSB・・・だと？」

「ゴーグ、それは本当なんだろうね？」

「あ、ああ。父ちゃんが言ってたから間違いないと思うぜ」

詰め寄った俺とレオールに多少の驚きを感じながらも、自らの父親が言っていたことを話すゴーグ。

ちなみにゴーグの父親は、アリアドネーでも有名な昆虫学者なのだ。

G S B。それは、男（の子）たちの憧れである魔性の昆虫。
ゴールデン（G）・シェイド（S）・ビートル（B）の略で、文字
通り飛ぶと黄金の軌跡を放つカブトムシである。

穢れ無き純白のボディと黄金に輝く羽を持つ、三本角がカッコいい
15cm位のカブトムシ。

極めてレアなカブトムシで、一匹数百万ドラクマはくだらない。

未だに生態系が謎に包まれており、現時点で判明しているのが、大
まかな生息地と数年に一度大移動を行うという情報のみ。

しかも、その生息地や移動先というのも俗に言う“秘境”や“魔境”
と呼ばれる場所であり、捕獲すること以前に生息地へとたどり着
くことすら困難。

故にこれを飼っている子は手に入れた手段にかかわらず、“英雄”、
“勇者”などと祭り上げられるほどなのだ。

そんな存在であるG S Bが近場に存在しているだと？

これを聞いて行かないのは男ではない！！

「よし、レオール。今週末の予定を空けておけ」

「もちろんだよ。その辺の昆虫ならまだしも、G S Bなら話は別さ」

「ちょ、ちょっと待てよ」

ん？何だゴークよ。そんなに慌てて。

「あ？何だよ」

「ユミルの森に入る気か！？あそこは立ち入り禁止なんだぜ？」

・・・はあ？

「それがどうした？」

「そうだよ。立ち入りが禁止されているからってあきらめるとは・・・それでも男かい？」

俺とレオールの蔑みの視線をモロに喰らったゴーグはちよつと心が傷ついたようだ。

「ぐっ・・・いや、確かに俺もGSBが欲しいが・・・」

「なら、その欲望のままに動きたまえよ。それとも怖いのかい？その筋肉は飾りなのかい？」

「てめえ・・・筋肉をバカにすると、筋肉が化けて出るぜ？」

グワツと無駄にある筋肉でバンプアップしてみせるゴーグ。

いや、誰も筋肉なんぞバカにしてへんがな。

「なら、私達と一緒に行くんだね？」

「ったりめーじゃねえか。ハッ・・・猛獣だろうがドラゴンだろうがかかってこいってんだ」

流石に猛獣やドラゴンが出てきたら俺が相手することにしよう。レオールとゴークじゃせいぜい小熊が限界だろう。

「で？ オウカとミーマはどうするんだ？ 一緒に行くか？」

最初から空気と化している二人に俺が問いかけると、二人は揃って首を横に振った。

「ボク達は行かないでおくよ。行っても足手まといになりそうだしね」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「ええー・・・・・・・・ミーマ達は行かねえのかよお・・・・・・・・」

さっきまでのテンションとは打って変わって意気消沈するゴーク。何なんだ貴様は。

「では、日程は明日までに私が考えてこよう。明日の昼食時に此処へ集合してくれたまえ」

「了解だ」

「おうよ」

そう言って一旦は解散。っていつてもこの後すぐ一緒に授業を受けるんだけどな。

そして、あっという間に週末。

夜明けと共にフル装備に身を固めた俺達は、大人達の監視の目を何とかかいくぐってユミルの森に潜入。

意気揚々と歩き続け、2時間で森の奥深くへと到達することに成功。

それからさらに3時間ほど探したところで、ついにゴーグがGSBのつがいを発見。

即座に捕獲行動に移行した俺達は、無事に両方とも捕獲することに成功したのだった。

ちなみに俺が気配を遮断する念動力の結界を周囲に張り巡らせていたため、危険な獣やドラゴンには遭遇しなかった。

「よし、幸先いいな。どうする？もう帰るか？」

俺の問いに、ゴーグとレオールが首を縦に振る。

「ああ、帰ろうぜ。オスとメスを捕まえたんだ、俺が父ちゃんに増やし方を聞いてきてやるよ」

「そうだね。それがベストだと思う」

「じゃ、この虫籠はゴーグ、お前に任せた。さ、帰ろうぜ」

意気揚々とユミルの森から引き揚げる俺達。

だが、GSBを手に入れた嬉しさのあまり、索敵を怠ったのがいけなかったのだろう。

俺達の背後で浮遊する、赤く輝くコアを持った小型ビットに気がつ

かなかったのだから。

「さて、何か言い訳はある？」

「「「い、いえ！ありません！」」」

現在、“バインド”と呼ばれる捕獲魔法でガツガチに固められた俺達の目の前に、白い魔王、高村なのは大先生様が降臨召されている。

顔はとびっきりの笑顔だが、眼は笑っていない。むしろハイライトが消えている。

どうしてこうなった？と思い返すも、結局は自分で撒いた種なので、誰に文句を言う筋合いもない。

まったく・・・・・・・・どうしてこうなった？

無事にユミルの森から帰還した俺たちを正門前で待っていたのは

「・・・・・・・・やっと帰って来たね？」

魔王に

「お帰り。森は楽しかったかな？」

死神に

「ユミルの森は規則では行ってはいけない場所やで？」

狸。

「ちょっと待てえ！！！！何で私だけ狸扱いなんや！！！」

「ちょっと黙っててくれるかな？はやてちゃん」

地の文に突っ込んだはやてさんに、ジャキツと魔法杖を突きつけるなのはさん。

冷や汗をかきながら沈黙したはやてさんを尻目に、お怒りモードなのはさんが俺たちへと向き直った。

「ねえ、どうして規則を破って、あんな危ない場所へ行ったのかな？かな？」

ゾクツとするようなオーラがなのはさんから漂い始め、体感温度が3度ほど下がったような感覚が俺たちを包む。

俺はまだしも、横の二人はすでに涙目である。

恐怖のあまり二人はジリジリと後退して行っていたのだが、なのはさんが無詠唱で発動した捕獲魔法がそれを許さない。

なのはさんから膨大な魔力が立ち昇り、集束を始める。

「ちょっと・・・頭・・・冷やそうか？」

俺が最後に見たのは、それはそれは綺麗な

桜色の閃光だった。

魔人の後継者（完）

「いやいや、終わってへんやろう」

「はやてちゃん、黙っててって言わなかった？」

「え？・・・ぬわああああ！！」

・・・続きますよ？

第二十三話（後書き）

アンケート

内容は

アウラ君の従者たちにパッチを装着させるか否かです。

オリジナルパッチの募集中。

皆さん、どうか回答をよろしくお願いします。

現在、賛成1、反対1です。

第二十四話（前書き）

皆さん、アンケートへの回答ありがとうございました。

反対票多数だったため、アウラ君の従者へのパッチ装着は無しという方向で進めたいと思います。

今回、少し短いですがご容赦を。

第二十四話

10月4日。

秋の訪れとともに制服も夏服から冬服へと変わり、だんだんと肌寒くなってきた今日この頃。

「はい、みんな、ちょっと聞いてくれるかな？」

パンパンと手を叩きながら教室に入ってくる、我らが担任、フェイト先生。

今日はもう授業も終わり、本日最後のHRである。

俺が魔法を使わねけりゃ静かにならなかったあの入学当初とは違い、ピタッと静かになるクラスメイト達。良く調練されてるもんだな。

満足げに頷いたフェイトさんは黒板に大きな文字を書いた。

遠足^{えんそく}について

ちゃんとルビを振っているあたり、流石は教育者だと思う。

あ、ちなみにこの文章、ちゃんとした魔法世界語で書かれてるからね？
決して日本語^{ジャパニーズ}じゃないからね？

ゴホン！・・・それにしても遠足か。どこに行くんだ？

「せんせーい、どこにいくんですかー？」

可愛いボイスでオウカがフェイト先生に聞く。

オウカは・・・まあ、細かいことはあとで言うとして、通常は基本的に歳相応の可愛い子を演じているらしい。しかも詳細な人物設定までしてあるところがオウカらしい。何でも、そのほうが色々動きやすいのだとか。演じている最中は一人称もボクではなく私だしな。

ふと見ると、机の影でゴーグとレオールがオウカを見て爆笑してた。あいつら、後でオウカにシメられるな多分。

「うん、今回の遠足はね、アリアドネーの真ん中にある古い建物の中を見学しに行くんだよ」

途端にざわつく教室。

「けんがくってなあに？」

「それってさいきょー？」

「おいしいのー?」

食べねえよ。

「見学っていうのはね、色々な所を見て回ることだよ」

フェイト先生はそう言いながらも手を動かし、黒板に文字を書いていく。

予定日 10月11日

目的地 アリアドネー中央エリア・歴史的建造物群

集合場所 ウェルキンス魔法学校第一校庭

集合時刻 午前8時

持ち物 遠足のしおり・水筒・筆記用具・お弁当・おやつ

備考 おやつは50ドラクマまで。ただし、バナナとリングゴはおや

つに含まれない。

ああ、繰り返し言うけど、これも要約してあるだけで、もっと6歳児に分かりやすい言葉で書かれてるからな？

「じゃ、今日はおしまい。みんな、気を付けて帰ってね」

『せんせい、さようなら!!』

連絡を終えたフェイト先生は終了の挨拶と共に退室し、他のクラスメイト達も思い思いの行動を始める。

和やかに談笑するグループもあれば、我先にと校庭へ繰り出して野外スポーツに興じるグループもある。

俺達5人は前者のパターンであり、俺の机を中心として皆で集まって話し合っていた。

話題は勿論、先ほど発表された遠足についてだ。

「さて、見学で行く“古い建物”って多分、アリアドネー歴史的建造物群のどれかだよな？」

俺の問いにレオールが頷く。

「十中八九そうだろうね。私が思うに、行くとすれば“大聖堂”“図書館”“時計塔”のどれかだろう」

「いや、“図書館”じゃなくて“旧アリアドネー魔法騎士団本部”だとボクは思うよ。“図書館”には喧噪を嫌う司書長が居てね。そんな司書長が初等部生の見学を許可するはずがない」

「まあ、いずれにしろ俺たち6歳児が見ても理解不能な建造物しかねえよ。せいぜい「あ、古いな」くらいで終わりだぜ」

「……コクコク」

今さらだが、こいつらは少なくとも6歳児の精神ではない。

俺の精神年齢が高いのは勿論のことだが、レオールとゴークは親の教育の賜物で精神年齢が高く、ミーマとオウカも日ごろから勉強や読書をしているだけあって歳に似合わぬ頭脳を持つ。

故に、俺達はクラスで浮いた存在だったため、集まったのは必然と言えるかもしれない。

って今は遠足の話か。

「大人しく見学するのも癪だな……身代わりでも置いて逃げるか？」

「折角だから見学していこうよ。普段は入れないところにも入れて貰えそうじゃないか」

ああ、その発想は無かった。

「じゃあないか。まあせいぜい楽しく見学しようぜ」

「そうだな」

その後もしばらく談笑し、午後5時を告げる鐘の音と共に解散。ゴードとレオールは遠足用のおやつを買いに購買に行き、ミーマとオウカは大浴場、俺は大人しく寮へと帰った。

それにしても遠足か。ちよつと楽しみだな。

—アウラが知りえないお話し—

「さて、買うもの買ったし帰るか」

「そうだね。それにしても持ち込み可な菓子の量は50ドラクマまでか・・・どうせアウラ君はそれを無視した量のキャンディーを影に入れて持ち込むだろうし、彼に貰うとしようかな」

「でもよ、あのアウラがそう簡単にキャンディーを寄こすと思うか？」

「………思わないな。とんでもないレートでの菓子トレードをさせられそうだ」

「だろ？ あーあ、俺達も早く影収納魔法を覚えたいぜ」

「まだ無理だよ。あれ、一応上級魔法なんだからさ。高等部卒でも使える人は一握りだそうだよ」

「それを平気で使うアウラって……」

「まあ、彼は色々と規格外だから。さ、行こうか。我が家の今日の夕食は鷹龍の唐揚げなんだ」

「お、美味そうだな。うちは多分……シチューだろ」

「君の母君の作るシチューは最高に美味しいじゃないか。」

「まあな。じゃ、俺はこっちの道だ。また明日」

「うん、また明日」

第二十四話（後書き）

次回から初等部の山場である“遠足編”に入ります。

次回もお楽しみに

第二十五話（前書き）

最近、医療系マンガにハマった桜花です。

医龍とかゴッドハンド輝とか

第二十五話

古の昔。

まだ魔法世界が出来て間もない頃。

出来たての世界は混沌としていて、“海”“空”“大地”の3つしか無かった。

その3つは明確な意思を持ち、それぞれが自身の力の体現者たる“使徒”と呼ばれる存在を有していた。

世界が安定することは無かった。何故なら、3つの存在はたがいに嫌い合ってからだ。

“海”は“空”を嫌った。何様のつもりで自分を見下ろしているのかと。

“空”は“大地”を嫌った。誰の許可を得て偉そうに広がっているのかと。

“大地”は“海”を嫌った。何の理由があつて大地の身体を侵食しているのかと。

『忌々しい』

その思いだけが渦巻く原初の魔法世界。

そして3つの存在は、互いの明日をかけた戦いを始めた。

それぞれの力の体現者である“使徒”のぶつかり合い。

海の使徒たる海龍が唸り、空の使徒たる怪鳥が叫び、大地の使徒たる巨獣が吠える。

海龍の鰭が空を穿ち、怪鳥の翼が大地を抉り、巨獣の牙が海を割る。

使徒たちの力は完全に拮抗していたため、一進一退の攻防が繰り広げられる。

戦いは休むことなく続けられ、次第に魔法世界はおかしくなっていた。

白夜が続き、四季は乱れ、時が未来から過去に向かって流れ、あらゆる物理法則がねじ曲がった。

滅茶苦茶になって行った魔法世界。それを見て始まりの魔法使いは嘆いた。

魔法世界の創造者たる始まりの魔法使いは、こんな醜い争いのために“海”“空”“大地”へと意思を持たせたわけでは無かった。

互いが尊重し合い、協力し合って世界を導くことを願って意思を授けたのだ。

崩壊しつつある魔法世界を何とかするべく行動を起こした始まりの魔法使いは、まず“海”の持つ意思を消滅させ、“海”の使徒たる海龍を倒した。

次に“空”の持つ意思を消滅させ、“空”の使徒たる怪鳥を倒し、最後に“大地”の持つ意思を消滅させた。

だが、使徒たちとの苛烈な戦いに疲れ果てた始まりの魔法使いは、“大地”の持つ意思は消滅させることに成功したものの、“大地”の使徒に止めを刺すことが出来なかった。

やむなく始まりの魔法使いは巨大な時計塔を造り、そこに“大地”の使徒を封じて永遠の眠りにつけた。

そして魔法世界はようやく安定した時を迎え、長い年月を経て様々な生き物が生きる楽園となったのだった。

―始まりの神話（アリアドネー出版）より抜粋―

「で、これがその“大地”の使徒を封印した時計塔なのか？」

「らしいね」

巨大な時計塔を見上げた俺の問いにオウカが頷いた。

―回想―

10月11日。

俺達ウエルキンズ魔法学校初等部は、アリアドネー中央エリアに存在する歴史的建造物群を見学しに来ていた。

集合場所に集合した俺達は、そのままフライトバス（空飛ぶバスのこと。設計者はジェイル教授）に乗ってアリアドネー中央エリアへ移動。

そこからしばらく行進してから班別行動が始まり、俺達はいつもの

メンバーで固まって見学をし始めた。

話を戻すが、歴史的建造物群とは、アリアドネーが出来た初期のころか、もっとそれ以前から存在していた建造物を総称した呼び方である。

そもそも、アリアドネーはこの歴史的建造物群のために造られた都市と言って過言ではない。

歴史的建造物群の調査と研究のために造られた様々な研究機関が集まってだんだんと大きくなり、結果的にそれらの研究機関全てが一つに統合されて初期のアリアドネーが出来たのだ。

歴史的建造物群には様々な種類があり、数十年前までアリアドネー魔法騎士団の総本部であった太古の大聖堂“旧アリアドネー魔法騎士団本部”や、現在も超貴重な魔道書や古文書が多数収められた“アリアドネー大図書館”などの歴史的価値が高い建造物は勿論、“使徒”と呼ばれる存在を封じているといわれる“封印の時計塔”など全くの正体不明な建造物も存在している。

「って母ちゃんが言ってた」

長い解説感謝だぜ、ゴークよ。それにしても・・・

「・・・おいレオール、俺たちヤバいことしちゃったな」

「あ、ああそうだね・・・」

「二人とも何したんだい？」

レオールが若干青ざめたことに気が付いたオウカが訊いてくる。

「さっき見学した“旧アリアドネー魔法騎士団本部”の大聖堂の床の隅に」

「“アウラ&レオール参上!!”ってマジックペンで書いた」

「何てことしてくれてんの!?!」

「・・・いや、俺は悪くない。ポケットに入ってたマジックペンが悪い。」

「まあ、清掃係の人が何とかしてくれるよ・・・多分」

適当だねえ・・・ま、今はどうでも良いんだけどな。どうせ怒られるなら数日経ってからだろうし。

「んなことより次はどこを見学だ？」

「んなことって・・・まあ良いか。次は“封印の時計塔”だよ」

―そして話は冒頭へ戻る―

「で、何で時計塔なんだ？普通に封印するなら極端な話、その辺の石ころでも良いはずだろ？」

「何でも“あらゆる時を制御する”という時計型の強力なマジックアイテムを用いて、使徒自身の時を完全停止させることでその存在を封じているかららしいよ。あの時計塔に嵌め込まれている時計がそのマジックアイテムなのだから」

俺の疑問にオウカが答える。

「なんだそのデタラメなマジックアイテムは・・・」

「でもあくまで伝承に残ってるだけだから真相は分からないよ。所

詮は口伝や古文書から呼び起した曖昧なデータを再編した物だから」
肩をすくめたオウカは時計塔を見上げた。

改めて俺も見上げてみると、大きな時計が正確な時を刻み続けている。

これが完全時間制御機能を持つマジックアイテムねえ……ちよ
っと欲しいかも。

ザ・ワールド！！とかできそうだし。

でもダメだな。あれだけデカけりゃポケットに入らん。

いくら効果がすばらしくても、使い勝手が悪ければ邪魔にしかならないからな。

ジッと時計塔を見上げる俺たちにゴークが声をかけた。

「……とりあえず入ろうぜ。こんなもん渡されてる事だし」

ゴーグがピラピラと振って見せたのは・・・一枚の紙。

何とも面倒なことに、見学して回った建物の中に設置されているスタンプを押して来い、という課題が出ている。ちなみに5個スタンプを集めるともなくフェイト先生お手製のお菓子が貰えるとか。

「だね。・・・ミア、大丈夫かい？」

ふと会話の最中に、レオールがミアの異変に気が付いた。

俺も注意してみると、若干呼吸が荒く顔も赤い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・コクリ」

しかもいつもより沈黙している時間が長い。こりやマズイな。

ミアは体調が悪くとも黙って我慢する癖があり、俺達が気が付いた時にはヤバい状況になっていることが多い。

ついひと月ほど前にも風邪をこじらせ、肺炎にかかって入院騒ぎを

起こしていた。

体調の目安としてはミーマに話しかけた際、頷きが返ってくるまでの間合いが長ければ長いほど体調不良で危険である。

ちなみに、肺炎騒ぎの際は返事が返ってくるまでに30秒以上はなかった。

「どうしたんだい？ 顔が赤いけど・・・熱でもあるのかな」

コツッと額を合わせてミーマの体温を気にするオウカを尻目に、俺達男組は簡易会議を開いた。

「マズイな。ミーマが返事までに15秒以上かかっている。風邪かそれに準ずる病気レベルの体調不良だろう」

「どうするんだよ？ 先生たちが詰めているアリアドネー総合学習センターに戻るか？ つつってもあとスタンプ1つでミッションコンプリートなんだが・・・」

「しかし、彼女の身体を気遣うならすぐにでもアシユタロツサ先生に連絡を取って彼女を休ませなければ」

「だがミーアの事だ。多分、大丈夫とか言って無理やりにもこのまま遠足が続けたがるだろう」

「・・・だろうね。ゴーグ、もしもの時は君が担ぎたまえ」

「おう、任せとけ」

会議終了。内容をオウカへと伝え、班別行動は再開ということになった。

「じゃ、時計塔内でスタンプを発見し次第押して帰還だ。即効で終わらせて帰ろうぜ」

「了解だ」

「OKだよ」

「わかった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・コク」

ゴーグが開けたドアから入る俺達。

入った瞬間に機械油の独特な臭いとガチャガチャと歯車が立てる音が俺たちを出迎えた。

時計塔の中は吹き抜けのフロアになっていて、その中央を貫くように複雑な機械群が天井まで連なって伸びている。

それに沿うように螺旋状の階段が設置され、頂上部が最上階と思しき場所へと繋がっているのが見て取れた。

「よし、まずはこのフロアを探そう。私とアウラ君とゴーグで行く。オウカはミーマと居てくれたまえ」

レオールという言葉に頷いた俺たちは、広いが何もない玄関フロアを探し始めた。

10分後、俺たちは一箇所に集まっていた。

「どこにも無いな。おそらく螺旋階段を登った先にある最上階フロアにあるのだろう」

レオールが首を振り、俺がため息をつく。

「ハア・仕方ないか。さっきと同じでオウカをミィアと一緒に待機させ、俺たちで階段を駆け上がってスタンプを押してくるか」

俺のその言葉にゴークが言った。

「ん？ 思いついたんだがよ、普通に飛行魔法で飛べば良いんじゃないか？」

「それが出来ないから駆け上がるって言ってんのさ。ここでは何故か魔法の大部分が使える。多分、時計塔を傷つけないようにしろ」

ゴークの言葉に首を振り、俺が説明する。

そう、ここでは魔法の大半が使えない。せいぜい念話を通じるくらいだ。

俺もこっそりといういろいろ試してみたのだが、ほとんどの魔法が使用不可だった。

おそらくだが、この時計塔には魔法行使自体を禁ずる効果があるのだろう。そうでなければ説明がつかない。

なぜなら、“念動力”でコーティングしても魔法発動が出来ないからである。

これにはかなり驚いた。

魔力結合を阻害する結界“AMF”や、魔力を吸い取る結界“吸魔結界”などの魔法はあるものの、“魔法の発動自体を封ずる”効果をもつ結界なんて聞いたことが無い。

俺は魔法を“念動力”でコーティングすることによって結界の発動対象外とすることで“無効化を無効化”しているのだが、コーティングする以前に魔法が発動できないのだからお手上げだ。

まあ、神話どおりならこの時計塔を造ったのは創造主らしいし、完全魔法無効化能力などがあることを考えても、俺のこの推測はそう外れてはいないだろう。

「ま、地道に登って来いってことだな」

そう締めくくり、説明を終えた俺は二人を連れてオウカたちのところまで戻り、さっきと同じ説明をしてから天井まで続く螺旋階段を登り始めた。

コツコツと足音を響かせながらダッシュで階段を登る俺たちと、辛そうなミーマを心配そうに見守るオウカ。

早く終わらせて帰ることしか考えていなかった俺たちは気がつか
なかった。

時計塔の入り口のドアに紋章が浮かび上がり、カチャリと軽い音を
立ててロックされたことを。

第二十五話（後書き）

どうも難しく考えすぎちゃって話が進まない。

まあ、あと数話で初等部編は終わらせる予定ですが。

あ、ちなみに初期の魔法世界やアリアドネーの話云々は完全なオリジナルですのでご理解を。

第二十六話（前書き）

エヴォリミットって認知度低いんですかね？

自分的には傑作だと思ってるんですが・・・。

第二十六話

「はぁ・・・はぁ・・・き、君の・・・体は・・・どうなってるんだい・・・」

「お前・・・は、速すぎるだろ・・・ゲホッ！ゴホッ！」

「お前ら修行が足りんぞ」

息も絶え絶えの二人に、何も無かったかのような表情を浮かべる俺。

別に辛いことをしてたわけでもない。

ダッシュで螺旋階段を駆け上がり、最上階フロアに設置されてたスタンプ台でスタンプを押し、ダッシュで螺旋階段を駆け下る。ただそれだけの事だ。

まったく・・・これくらいでくたばるとは情けない。

※いや、お前が異常なだけだから b y 作者

なんだ？ 久しぶりに電波が・・・ってまあ良いか。

未だに荒い息を上げる二人を引きずり、玄関ホールに降り立つと、焦った表情を浮かべながらオロオロしているオウカと出くわした。

「どうした、オウカ。女の子の日か？」

「ち、違うよ。ボクはまだ初潮は・・・って何を言わせるんだ、君は。そんなことより大変だよ！これを見て！」

ガシッと手をつかまれ、引きずられていった先は玄関ホールのドアの前。

ドアを見ると、見たこともない紋章がボンヤリとした光を放ちながら浮かび上がっている。

「なんだこれは。来たときは無かったよな？」

「無かったよ。しかもこのドア、ロックされて開かないんだ」

「・・・何？」

ノブに手をかけてガチャガチャしてみたが、なるほど確かに開かない。

こんな時に・・・マズイな。

とりあえず、後ろでくたばっている二人を無理やり起こして、三人で力いっぱい引いてみたがウンともスンともいわない。

しょうがないのでぶっ壊すことに決めたんだが・・・。

ドンドンドンドン！！！！

「チッ！ダメだ、開かねえ」

復活したゴーグの全力ノックに揺らぎもしない堅牢なドア。

ガッチリと閉じられたそれには、見たこともない紋章が浮かび上がり、淡い光を放っている。

こりゃルーンか？それとも紋章術？
まあ、どっちでもいいんだけどな。ぶっ壊す気満々だし。

「どけ、ゴーグ！！おらああああ！！！！！！」

ズドオオオオオオン！！！！！！

俺がぶん殴ってみても傷一つつかない。なんだこのドアは。10t
くらいの力を出したんだが・・・。

「ダメだ、傷一つついて無いね・・・どんな材質で出来ているのやら」

オウカの言葉に俺は首を振る。

「材質云々じゃねえな。何かこう・・・インパクトの際に衝撃を拡散させられたような手応えがあった」

拳を叩きつけた瞬間、普通はその反動が自身の手へと反ってくるものなのだが、このドアを殴ってもその衝撃が返ってこない。何だろう・・・空気か何かを殴っているような感覚。

多分、“念動力”を使った念動パンチでも結果は同じだろう。衝撃が拡散させられているってことは、少なくとも物理的衝撃を与える方法じゃこのドアを破壊することは不可能ってことだ。

魔法は封じられてる。物理攻撃もダメ。じゃあどうしろってんだ。

「ドアに隙間とかは・・・見当たらないね」

「ああ。不思議なことに一ミリの隙間もない。ドアである以上、そんなことはあり得ないはずなんだが」

一ミリの隙間もなければ、このドアは床との摩擦によって開かないはずだ。潤滑油的な効果の魔法でも使っていれば別だけど。

「ミーア、大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もはや返事する元気もないほど衰弱したミーアを見る。

荒く熱い息を吐き出すミーアの顔は苦痛に歪んでおり、可愛い顔立ちは見る影もない。

一刻の猶予も許されない状況。さて、どうしたものか・・・・・・・・「おい、レオールもう一回だ!!」・・・・・・・・「了解だよ!」・・・・・・・・“ドンドンドンドン!!!!!!”・・・・・・・・ってうるせえな。

「おい! まずは落ち着け!!」

とりあえず、うろうろと落ち着きのない他のメンバーたちを一喝し、念力で軽く小突いて無理矢理落ち着かせる。

こういう緊急事態の時は、絶対に焦ってはならないって母ちゃんから教わった。

焦りからは何も生まれない。絶対的な危機に陥った時ほど冷静になるべしってな。

落ち着いて、状況を整理。そしてそこから最適な解決策を導き出すのがリーダーたる俺の努め。

ここで不安そうな顔は見せられない。リーダーがそんな顔を見せたら他の連中も不安になる。

まずは・・・状況の整理。

現在地は“封印の時計塔” 玄関ホール。

メンバーは俺、レオール、ゴッグ、オウカ、ミア。その内、4人は健在で1名が重体。

現在の目的は、この“封印の時計塔”からの脱出。そして重体者を教師陣へと引き渡すこと。

現状で出来ることは、重体者を少しでも休ませることと、時計塔内を探索して脱出の方法を模索すること。

ってことは、重体者に一人つけて、残り三人で時計塔内探索をするのがベストか。

ならば、探索班は俺、レオール、ゴークで、ミーアにはオウカをつけるとする。これならいけるな。

「よしお前ら、これからのことを話す」

「これからの事？」

「ああ。現状では脱出手段は皆無。だがこのままではミーアが危ない。よって脱出手段模索のために、この時計塔内を探索することにする。班は、俺、ゴーク、レオールだ。オウカ、お前はミーアについていてくれ」

俺の言葉に皆が頷いた。

「わかった。でも大丈夫？ボクとミーアはともかく、君達迷子になるんじゃないかい？」

フツ・・・こんなときもあろうかと・・・

「大丈夫さ。ほら」

そう言って俺がバックパックから取り出したのは・・・

「トランシーバーとPDポータブルデバイス！？何でそんなの持ち歩いてるの！？」

「ただのトランシーバーとPDじゃねえ。あのジェイル先生お手製のアイテムさ。たとえ火の中・水の中・草の中・森の中・土の中・雲の中・あの子のスカートの中でも使えるらしい」

「君はボクに「キャー！！」とでも言わせたいのか？」

オウカよ、何故そのネタを知っている？

アリアドネー最高の科学者といっても過言ではないジェイル先生が手がけたアイテム。

本来なら開発依頼だけで数十万ドラクマはするのだが、俺がお願いしたら快くタダで作ってくれた。

作ってもらったのは、超小型トランシーバーとノートPCサイズのPD。

現代科学の数十年前以上は先を行く技術を持つジェイル先生が趣向を凝らして作った一品なのだ。

「・・・ほれ、送受信端末はポケットに入れて、イヤホンは耳に付けておけ。通信用周波数は―――だ。オウカはそのPDを使ってナビを頼む。それぞれのイヤホンに受信機が入ってるから、PD内の

マップアプリと連動して、俺達の位置が表示されるはずだ」

ちなみにマップアプリは俺の自作。アリアドネー中の建物の構造を“念動力”を使って把握し、それを地図に起こしてプログラミングしたのだ。

本当は悪戯とかの他愛もないことに使おうと思ったんだが・・・思ったより早く使う時が来たな。

なぜかトランシーバーの使い方を知ってたレオールとオウカはともかく、ゴーグにトランシーバーの使い方を教えながらセッティングを完了させる。

「つと、ありがとよアウラ。で、探索時間はどうするんだ？」

「脱出口を見つけるまでだ。効率よく探せるようにトランシーバーを使って現在いるところを常に教え合おう。それでも分かりづらければオウカに聞けばわかるはず。まあ、焦りは禁物だし、気楽に行こうぜ。「あー、次はどこどこ、次はどこどこ」ってな感じで」

「何で駅員みたいなノリなんだい？・・・まあ、早く行こう。開く窓や裏口とかがあれば良いけど・・・」

そうレオールが呟くが、俺はそう簡単なお話ではないと思っていた。

魔法が使えない塔内、堅く閉じられたドア。

まるで、何らかの意思が俺たちを閉じ込めようとしているかのようだ。

被害妄想？・・・まあ俺の考え過ぎなら良いんだけどな・・・。

最悪の場合は、俺が“念動力”で強制転移させる。

以前シャノンがやって見せたように、超膨大な“念動力”の力場を一点に集中させることで次元を歪ませ、ワームホールを作り出すのだ。

使用者の技量次第ではあるが、指定した点と点を一直線で繋げるためピンポイントで空間跳躍することができる。

この宇宙の絶対の理である物理法則を完全に無視した技だが、魔法が使えない状況でも使えるため非常に便利。

・・・ん？何でそれを最初から使わないのかって？

そりゃ、これは“魔人”専用の技だからさ。

ワームホールなんて得体の知れないものを潜り抜けるのだ。

何の進化もしていない生命体がこれをしたらどうなるかなんて全然分からない。

俺は生身で大気圏を突破できるからなあ・・・宇宙でも普通に生きていられるし。

そもそも、俺やシャノンには時間停止、物理法則改変、因果律干渉などの攻撃は一切効かない。ていうかそれぐらい進化してないと多元宇宙は移動できない。

多元宇宙は、俺達が存在する宇宙とは全てが異なる（・・・・・・）。

絶対のルールである物理法則も、働いている力も、存在する概念も。同じものが一つたりとてない、何もかもが違う宇宙。

物理法則が反転しているのが当たり前かもしれない。

宇宙が水で満たされているのが当たり前かもしれない。

引力や斥力が存在していないのが当たり前かもしれない。

あらゆる物質が消滅してしまうのが当たり前かもしれない。

ありえないことこそありえない。

そんな多元宇宙を生きて移動するには、あらゆることを想定した進化が不可欠なのだ。

・いや、想定することは事実上不可能だな。無限の可能性を秘めた多元宇宙を想定？無理無理。

俺が出来るのは、せいぜい簡単に死なないように進化することだけ。

死の概念を身体から排し、因果律から外れ、物理法則を制御し、あらゆる干渉を撥ねつける。

それこそがこの俺、進化の果てに至った“魔人”だ。

だが、そこまで進化しても俺を殺す方法は多数存在する。

例えば・・・封神演義の寶貝“四宝剣”とかな。

ありやダメだ。なんだよ、確立歪曲寶貝って。物の「存在する確率」を変化させて崩壊させるとか意味わからん。

他は・・・ゼオライマーでメイオウ攻撃とか？

まあ、俺の殺し方なんてものは置いておいて・・・ここからさっさと脱出しなきゃな。

「よし、では脱出作戦を開始する」

「「了解」」

俺の言葉に、各自が動き出した。

第二十六話（後書き）

四宝剣はダメでしょ。

ゼオライマーは・・・原子分解攻撃ならアウラ君を倒せるかも？

第二十七話（前書き）

大変お待たせいたしました。

無更新期間一ヶ月という超失態をしてしまい、申し訳ありませんでした。

第二十七話

『こちら、スネーク。潜入に成功した』

『いつから君は“蛇”を名乗るようになったんだい？．．あ、次の通路にある部屋を調べてみて』

『了解だ』

どうも、スネークです。．．．．嘘です。アウラです。

現在、脱出口を探して時計塔内を探索中。

さっさと脱出したいがこの時計塔、無駄に広い。

外観ではそこまで大きくないのだが、魔法か何かで内部空間が異常に拡張されており、ちょっとした迷宮と化してる。

いやはや、PDとか持ってきておいて正解だったな。無ければ今頃迷子だっただろう。

『HQ、応答を願う』

『……はあ。こちらHQ』

ちゃんと合わせてくれるオウカにも感謝だな。

『他の隊員の動きを教えて貰いたい』

『現在、ナルシーがAブロック第二通路を探索中。マッスルはCブロック第四通路にある部屋で探索中』

あ、ナルシーはレオールでマッスルはゴーグね？

『眠り姫プリンセスの体調はどうだ？』

『プリンセス？……ああ、ミーマの事か。現在は少し持ち返したよ。相変わらず熱はあるものの、君の薬で若干苦しみが和らいでいるようだ』

バックパックに入っていたメディカルキットの薬が、どうやら役に立ってくれたらしい。

解熱剤と鎮痛剤。この二つがミーアの体調をギリギリの所で保っているのだろう。

こんなことになるならメディカルキットに薬をもっと入れておくべきだったな。万能薬エリクシラを入れておかなかったことが悔やまれる。

薬効が切れるまで、あと5時間。

それまでに決着をつけなければゲームオーバー。ミーアの命の保証は無い。

『さっさと脱出しような。一刻も早くミーアを助けてやろうぜ』

『・・・うん、そうだね。アウ・スネーク、次の曲がり角を曲がらずにつきあたりの壁を調べてみて。隠し部屋の一つがあるみたい』

『隠し部屋の一つ？他にもあるのか？』

『うん。さっき言ったのを含めて全部で6つあるよ』

『ん、了解した。早速隠し部屋を探索してみよう』

通信終了っと。

今は何の役にも立たない魔法発動体の指輪を弄びながらカツカツと歩き、曲がり角に差し掛かる。

「ふーん……。隠し部屋ねえ……。」

その曲がり角を曲がらず、ジッと壁を見詰めてみると、確かに何らかの違和感を感じた。

「……………」

この場所だけ一切の継ぎ目がない部分があるのだ。

巧みに色使いなどで誤魔化しているが、一度違和感を感じてじっくりと見てみればその答えを見出すことが出来る。

継ぎ目がないという事実。
これは非常におかしい。

だって、この時計塔は石造りなのだ。

切り出した石を加工して積み上げて出来た建物である以上、壁に継ぎ目がないのはおかしい。

漆喰などで塗り固めたり、壁板で覆ってあるなら分からなくもない。

しかし、この建物に入った時からそう言った場所は見ていない。

壁に手を触れてみる・・・否、触れようとした。

スウツ・・・

「・・・ほう」

壁の堅い感触が来ると思っていたが、その予想に反して手は壁をすり抜けた（・・・・・・）。

手をつっ込んでいる部分・・・肘から先が物の見事に壁へと埋まっているように見える。

実際はそんなこと無く、ただ単に手を伸ばしているだけにすぎないわけだが・・・。

念のため念動フィールドを纏ってから再び手をつっ込んで考えてみる。

こりや虚像か？高度な魔法だな、おい。

しかも設置した場所がまた上手い。

人は曲がり角に差し掛かったら、曲がり角の先しか気にしない。

あからさまな物でなければ何の興味も湧くことなく、角を曲がって進むだろう。

立ち止まって壁を注視するなんてことはほとんどの人がしないと思う。

ほんの些細な違いのみなら誰かに言われなければ絶対に気が付かないだろうし、たとえ気が付いたとしても首を捻って終わり。

まず高確率でこの壁の虚像に気が付く人がいない。

さらに言うなら、この魔法世界は魔法至上主義な世界。

魔法の一切を封じられるこの時計塔内ならよほどの観察眼か直感でも持っていないと発見は不可能。

いやあ、上手いこと考えたもんだ。流石創造主。

フィールド全開で虚像の壁をすり抜け、隠し部屋に入ってみる。

すると、そこは予想に反して物置のような場所だった。

古ぼけた箒や桶、モップの残骸といった物が転がっている。

「はて？こんな物のために隠し部屋なんぞ作るか？」

俺としてはNOだ。なんで掃除用具収納のために高度な魔法まで使って隠し部屋を作らなきゃならん。

創造主としてもNOだろう。使徒を討ち果たせないほど弱ってる奴がこんな余分な魔力の無駄遣いなんてする筈がない。

ってことはこの部屋にはまだ何かあるってことだ。

『こちらスネーク。HQ、応答を願う』

『こちらHQ。どうかしたかい、スネーク』

『現在、隠し部屋に潜入してるんだが・・・マップではどうなっている？行き止まりか？』

『少なくともマップではそうなってるね。君がいるのは単なる小部屋のはずだけど』

『・・・いや、それとは何か違う気がするな。もう少し調べてみる』

『わかった。決して無茶な事はしないでね』

『了解だ』

通信終了。

さて・・・魔法が使えない以上、俺に出来るのは五感に頼るか直感か、はたまた念動力かしかない。

・・・念動力だな。五感じゃ限度があるし、都合良く直感スキルなんて持ってねえし。

ブワツと部屋中へ念動の力場を広げ、触れたものを片っ端から“知覚”し“解析”する。

俺のパッチ能力は“念動力とそれに伴う知覚”である。

つまり、発生させた念動の力場に触れたものを知覚することが出来るのだ。

パッチの発する“念動力”と“知覚”の両方を突き詰めて極めたものがカンパニーマン。

念力で人型を形作り、その人型を動かすことによって動きを再現し、空気を振動させることで声を再現する。

逆に相手の体温や発した声による空気の振動、光の反射や体内電流を感知すれば、離れた所から相手の情報が俺の下へと届く。

念動力を用いた技のみであるが、カンパニーマン単身で戦闘も可能。圧殺したり竜巻出したりを自由自在に行える。

最強じゃね？万が一カンパニーマンが破壊されても、またいくらでも創り出せるし。

並列思考を使えば複数個体を同時生成&制御可能だし。もはや一人で戦争出来るよ。圧倒的な武力で。

まあ、戦争はさておき・・・見つけたぜ。

この地下に空洞がある。それも結構な大きさのだ。

隠し部屋の下に地下空洞とか、かなり怪しいんですけど。

「・・・まあ良いか。おりゃっ！」

バゴッ！！と床板の一部を念力で外し、その穴から念動力でゆっくりと地下へ降りる。

「・・・おー」

トサツと降り立った先は、さながら神話で語られる聖域のように荘厳で美しい場所だった。

天井や壁には光るコケが生え、時折瞬くそれらは星空のよう。

地面にも自ら淡い光を放つ花が咲き乱れ、天の川に佇んでるかのような錯覚を覚える。

まるで宇宙。

なのに息が出来るという矛盾が、ここが地上だと教えてくれている。

・・・まあ、息しなくても死なないんだが。

「・・・なんだここは」

光るコケと光る花。

その二種類のみで彩られた空間。他の要素は一切無い。

静寂に包まれ、日光も風も無いこの地下空洞で、いったいどれほどの長い間、ひっそりと咲き続けてきたのだろうか・・・。

「これは・・・」

念力で天井のコケを少し削り取り、咲いている花を一輪摘んで浮かび上がらせる。

淡い黄色のコケと、特徴的な花卉をしたピンクと紫の花。

それらは、俺が名前と写真だけ知っていた植物だった。

「ヒカリゴケと……トモシビ草？」

ヒカリゴケとトモシビ草。

どちらも歴史上最強の回復薬“エリクシーラEX”の材料で、高値で取引されている植物である。

特にトモシビ草は十年ほど前に絶滅が確認されており、もはや手に入れる手段がほとんどないという激レアなシロモノ。

かくいう俺も植物図鑑でしか見たことが無い。それがこんなに群生しているとは……。

何故時計塔の地下にこんな群生地があるんだ？

っていかんいかん。

「トモシビ草は後だ後。ここに脱出口は・・・・・・・・・・
なさそうだな」

空気が動いていないということは、外とは繋がっていないということ。
と。

もし外と繋がっているなら空気が移動するため多少なりとも大気が
揺らぐはずだ。

まあ一応、念動力でチェックしておくか・・・・・・・・・・
ん？

その時、俺の念動力による知覚範囲内に花以外の何かがあることが
分かった。

「こっちか」

足もとの花々を痛めないように浮き上がり、何かを目指してフワフ
ワと移動。すると・・・

「こりゃまた古い・・・・台座？燭台？」

いや、これは台座だな。油受け等が無いし。

古ぼけている台座。しかしそこに嵌め込まれていた石版には一切の汚れが付いていなかった。

それには、古代ラテン語と思しき文字がいくつかと複雑な記号、そしてそれらを囲むように円が描かれている。

「魔法陣？・・・にしては完成してないな」

魔法陣として完成していない以上、それは全く意味を成さない文字と記号の羅列である。

正しい術式構成と適切な魔力供給があって、初めて“魔法”という現実世界に影響を及ぼす力になるのだ。

ともあれ、こんな場所にある未完成の魔法陣だ。絶対に何かの意味があるに違いない。

そう思った俺はバックパックからメモ帳を取り出し、シャシャツと写し取ってから地下空洞を後にした。

ちなみに俺の絵は上手いぞ？写真とまではいれないが、賞を取れるくらいの腕はある。存外、病院のベッドの上は暇なのだよ。

ピピピピッ！！ピピピピッ！！

「うわっ！ってなんだ、通信か」

地下空洞から出た瞬間に音がなったから、何かトラップでも作動したかと思ったじゃねえかよ。

『こちらスネーク』

『よ、良かった・いきなり君のマーカーが消えたからどうしたのかと思ったよ』

どうやら地下空洞内では通信断裂していたらしい。

『隠し部屋の奥に隠し部屋？があったのさ。そのことについてちょっと話したい事があるから他のメンバーも玄関ホールへと呼び戻し

てくれ。俺も今からそっちへ向かう』

『了解したよ』

ピッと通信を切り、スタスタと玄関ホールを目指して歩き出す。

歩きながら脱出方法を考えていた俺は、ふと思い付いた。

そう言えばあと5つ隠し部屋があるんだったよな？

ってことはさっきの台座があるかもしれない？

ってことはあの未完成魔法陣が書かれている？

………ん？まてよ？未完成じゃなくて6つ全部で1つの意味

をなすものだとしたら？

そこまで考え付いた俺の脳裏を“千の雷”並みの稲妻が駆け抜けた。

さて、俺の考えが正しければ・・・

床に座ってPDを弄る俺を囲むように3人が座っている。

3人が見守る中、PDの操作を終えた俺は頷きながら呟いた。

「やはり、か」

P D内のマップアプリに表示されている時計塔内の地図を見て思う。
マップに表示されたソレら（・・・）は、俺の考えが正しいことを示していた。

一人納得する俺に焦れたのか、ゴーグがせつついた。

「いやいや、一人で納得してねえで教えてくれよ。何が「やはり」なんだ？」

「まあ、待て。諸君、まずはこれを見てみる」

そのゴーグを手で制し、P Dの画面をチョイチョイとつつ突く。

俺の指先を見たオウカとレオールはすぐに理解したようだが、ゴーグは今一つの表情。仕方ねえ、説明してやるか。

「俺が隠し部屋の地下に空洞を見つけたってのはもう知ってるよね？その隠し部屋はここ。で、他にも隠し部屋は5つ存在してる。それがココとココとココとココとココだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

スクリーン上に表示されている部屋を順々に差していったところで、ようやくゴーグも気が付いた。

「つまり、この隠し部屋は六芒星を描いている。そう言う事だね？」

オウカが俺へと問いかける。

俺はそれに頷くと、説明を始めた。

「多分、これは大規模な位相反転結界。中身を決して逃さないように作り出されている捕縛用結界中最強の結界さ。結界外と結界中の位相をずらし、世界の方角性を反転させることで空間自体を切り離して中のものを外から隔離する魔法。中のものは位相のずれと反転した世界に囚われて永久に外へは出られない」

「出られない！？じゃあ、ミーンは・・・」

「落ち着け。正確には出られないわけじゃない。通常、結界の基点は結界内にある。恐らく、この結界の基点は、六芒星の頂点を構成する6つの隠し部屋にある石版。それらを破壊すれば結界は崩壊するだろう」

「じゃあ早速壊して・・・」

「まあ、待て。この時計塔が封印目的で造られたのだとしたら、果たしてそんな簡単に脱出できるようになっている（・・・・・・・・・・）

・・・・・・）と思うか？」

「「・・・・・・」」

そう、そんな簡単に脱出できる筈がない。

位相反転結界が最強たる所以は、脱出が極めて困難という点にある。

位相のずれと世界の反転。二重の絶対防壁で守られた牢獄。

つまり、ここは物理的に完全に閉じられた世界なのだ。

まさに結界。完結した世界と呼ばれるだけの事はある。

脱出方法はただ一つ。上でも言った通り、結界の基点を破壊すること。

この方法は結界系魔法全般的に通用する脱出方法で、要するに結界を造り上げるための柱となっている基点を破壊することで結界を崩壊させるという方法だ。

結果とは、正規の手順で局所的に世界を塗り替える手法。

基点という強固な柱でその世界を支え、地球ほしからの修正力に耐えることで維持することが出来る。

対価として、その結界の効果や規模に見合った魔力や氣を必要とするが、その見返りは大きい。

では、その修正力に耐えるための柱が壊れたらどうなるのか。

答えは簡単だ。地球ほしの修正力で塗りつぶされてしまう。

地球ほしとは、この地球と呼ばれる惑星最強の存在だ。あえて言うなら
アルテミット・ワン
“究極の一”と言い換えても良い。

あらゆる生き物に恵みを与え、あらゆる生き物に試練を科し、あらゆる生き物を看取る孤高の存在。

異物を排し、世界のバランスを保つ役割を持つ地球ほしが持つ、修正力という絶対の力。

あるべき形へと戻す為に振るわれるその力の前には、結果なぞ全くの無力。一瞬で塗りつぶされて跡形も無くなってしまうだろう。

まあ、長々と語ったけど、ようは基点をぶっ壊せば世界自体が結界を破壊してくれるってこと。

ただ、一つ不安なのは魔法世界が火星の位相である事。

地球じゃないし、位相空間だから惑星ほしの意思が反映されるか不明。

まあ、魔法世界は火星の意思に沿って出来ているのだろう。

そうでなけりゃ、とつくの昔に魔法世界を火星の究極のアルテミット・ワン一が襲撃しているはずだからな。

あらかたの説明を終え、立ち上がった俺。

つられて3人も立ち上がろうとするが、俺がそれを制した。

「結界の破壊は俺が一人でやる。ハッキリ言うとお前らじゃ役不足だ」

「で、でも」

納得がいかないような表情を浮かべるオウカ。

しかし、そのオウカをレオールが諭した。

「まあ、確かに私たちじゃ無理だろうね。ここは大人しく待っているじゃないか」

「うーん……」

なおも渋るオウカ。なんだ、そんなに結界をぶっ壊してみたいのか？

でも、ダメなんだなこれが。魔法が使えないこの時計塔内で、どうやってあの地下空洞へと降りるんだ？俺は念動力があるから行けるけどさ。

「1時間で終わらせるから、オウカはさっきと同じようにナビを頼む」

俺のその言葉にようやくオウカが頷いた。

「わかったよ。ボクが責任もってナビする」

「ありがとう。ゴーク、レオール。お前らはしっかりと二人を守れ。」

男なんだからそれぐらいはしろよ？」

「おうよ、任せとけ」

「安心したまえ。この私がいる限り、ここは安全さ」

ハッ・・・それは心強いな。

「じゃあ、みんな頼んだぞ」

身を翻して玄関ホールから退出。

先ほどの地下空洞を目指して廊下を歩きながら、俺は5体のカンパニーマンを生成。

今回は服を用意できなかったから単なる空気と念動力の混合物なんだが・・・まあ、使えれば良いだろ。

その5体のカンパニーマンを他の隠し部屋へと飛ばし、部屋を探っ

て地下空洞の入口を搜索。で、発見し次第地下空洞へと突入させる。カンパニーマンを通して見る限り他の地下空洞にはヒカリゴケやトモシビ草は群生しておらず、ただ広い空間の中心辺りにポツンと台座が設置されているだけだった。

台座に嵌め込まれている石板を見ると、やはりそれぞれの部屋で描かれている記号や文字が違っている。共通しているのは円で囲まれていることだけだ。

それらを脳内で重ね合わせてみると・・・

「思った通りに魔法陣の完成か。こりゃ間違いなく位相反転結界だな」

創造主め、なんて厄介な物を残してくれたんだよ・・・。

創造主には悪いがこの結界、粉々にぶっ壊させてもらう。

親友の命がかかってるからな。早急に終わらせて帰らないと。

俺（＋5体）は石板に手を触れ、膨大な量の念動力を石板内に発生させる。

「爆碎」

ズガァァン！！！！

そして、俺のその眩きと共に石板内の念動力が弾け、石板を粉々に碎いた。

「ッ！」

とたんに空気が変わる。

確かに存在しているのにもかかわらず、どこにも存在していないかのような感覚が俺を包み込む。

これが、世界と結界の挟間に存在する絶対の矛盾。これこそが世界と結界を分かつ境界線。

結界を支える基点を破壊したことで、早くも惑星^{ほし}が結界を侵食し始めたのだ。

今現在、俺は世界と結界の境界線に立っているという極めて曖昧な存在。

世界と結界。俺はその両方に存在し、その両方に存在していない。

これは、結界破壊時に基点の周囲のみに見られる現象。

破壊した時点でそこは、結界という異界の収束点。

ヘタをすれば、結界と同じ存在として世界に認識され、修正力で消されかねないのだ。

もっとも、修正力で俺が消えるかどうかは甚だ疑問ではあるんだが。

ギリ・・・ギリ・・・と異音を立てながら世界が軋み、結界の崩壊が進む。

「やべえ、ここにいると吞まれるな・・・」

撤退推奨？言われんでもわかってるわい・・・とその前に。

俺は、手当たり次第にトモシビ草とヒカリゴケを採取し、念動力でコーティングして地面に埋め込む。

折角のお宝の山を逃すほど俺はアホじゃない。

ただ、影の倉庫が使えないので、一旦はここに埋めて隠しておき、後で掘り返しに来るつもりだ。

作業を終えた俺は念動力で浮かび上がり、地下空洞から脱出。外し
ていた床板を戻し、隠し部屋から出て玄関ホールへと向かった。

第二十七話（後書き）

えー、更新遅れてすみませんでした。

作者、ちょっとアメリカへ一ヶ月間出かけてまして・・・。

次回は早いうちに更新します。

第二十八話（前書き）

スランプです……。いったいどうやって脱出すればいいのやら・
・。

出来る限りがんばりまする！

第二十八話

「あ、アウラ君。ドアの紋章が消えたよ。これで外に出られそうだ」

玄関ホールで俺を出迎えたのは、嬉しそうな表情のオウカだった。

ゴーグはミーナを背負い、レオールはミーナとゴーグの荷物を抱えている。

「よし、即行で脱出だ。一刻も早くミーアを医者に見せないと」

「だね」

オウカと頷き合い、念動力で一気に玄関ドアを開け放つ。

とたんに新鮮な空気が流れ込み、喧噪が俺の耳に届いた。

「行くぜ、レオール！」

「了解だ！」

開いた玄関ドアから我先にと外へ駆けだしていく二人。あの早さなら5分とかからずにミーアは先生か医者の下へたどり着けるだろう。

ようやく肩の荷が下りたとため息をついた俺。

「はぁ、やっと一件落着いた。にしても呆気無かったな・・・」

簡単すぎるのが少し気にかかるが・・・こんなものか？創造主。良くこの程度の結界で何千年も使徒を封じておけたな。
・・・それとも俺、深読みのしすぎだったか？

「まあ、呆気無くて良かったじゃないか。流石に今回はボクも焦ったよ。まさか魔法が使えないなんて・・・」

俺の言葉に肩をすくめるオウカ。

ま、例外を除けばこの世のどこでも魔法が使えるのが常識だからな。今回はその例外中の例外なケースにぶち当たっただけで。

「やれやれ・・・・・・・・」

オウカと二人、ならんで歩きながら玄関ホールを横切って歩く。

カツンと響く足音が、無駄に寂しさを感じさせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？オウカ、ハンカチ落としたぞ」

「え？・・・・・・・・ああ、本当だ。すまないけどアウラ君、取ってもらっても良い？」

「おう、任せとけ」

途中でオウカが、可愛い花柄のハンカチを落としたことに気が付いた俺は、ちよつと戻ってハンカチを拾い上げようとした。

後に俺はその行動を軽く後悔することになる。何故、念動力を使っ

て拾わなかったのかと。

ドアのそばで待つオウカを尻目に、ハンカチに拾い上げる。

キイイイイン！！！！！！

———逃がさぬ・・・逃がさぬぞ・・・忌まわしい血族よ・・・

瞬間、空気が鋭くなった（・・・・・・）。

「!?! オウカ! 飛べ! !」

「ッ!」

俺の叫びを聞き、咄嗟に反応してジャンプしたオウカを念動力でドアの外へと吹き飛ばす。

ドアはオウカが通り過ぎた次の瞬間にはガシャン! と音を立て、再び堅く閉ざされてしまった。

見ると、オウカが立っていた玄関ドアの付近が深く抉り取られており、その規模から威力の高さが窺い知れる。

ツウツ・・・と冷や汗が一筋流れた。

一瞬でも遅れていたらオウカは挽肉になっていたに違いない。まさに間一髪だった。

「チツ・・・」

にしても・・・やれやれ、また厄介事か。

急に耳鳴りと声がしたと思ったら声とともに全方位から凄まじい強さの気配を感知。

で、危険と判断したからオウカをドアの外へふっ飛ばしてみたらこの様だ。

「全く・・・今度は何だ？」

先ほどと同じ状況。違うのは他の連中が居ないことと玄関ホールの床が大きく抉り取られているだけである。

さて、今度はどう脱出したもんかな・・・っていうか脱出以前にこの床を抉りとった野郎が俺を見逃すかどうか・・・。

——忌まわしい血族・・・我を此処に封じた者・・・ようやく出られる・・・

お得意の並列思考を用いて思考し始めた俺に、再び声が響いた。

腹の底から絞り出されているような、深く重い掠れた声。

凄まじいまでの威圧が込められたそれは、常人なら気絶するほどの魔力が秘められている。

「で、誰だ貴様は」

無視できるはずもなく、問いかけてみる。

現状では唯一の手がかり。これを逃す手は無い。

——我は大地の怒りを体現せし者・・・忌まわしい者よ・・・汝が身を差し出せ・・・

ってことはこいつが大地の使徒か？

身を差し出せだと？何故に？

「何故だ？」

——汝が身に流れる忌まわしい血・・・それを媒介に呪いを壊す・・・ここから出て世界を終わらせる・・・

こいつ、俺を生贄に自らにかけられた封印を解く気か。

にしても忌まわしい血？

「忌まわしい血？」

——汝からは彼の者の気配がする・・・ならば汝を触媒に・・・
呪いを解ける・・・

彼の者？・・・・・・・・ああ、そう言うことか。

彼の者っていうのは、多分創造主のことだろう。

創造主の気配と忌まわしい血。その二つのキーワードで謎が解けた。

俺の母ちゃんを思い出してみてほしい。

母ちゃんは由緒正しき真正正銘のウエスペルタティア女王。

ウエスペルタティアはこの魔法世界が誕生した初期からある太古の国だ。

初代の王は女性であり、名はアマテル。

何とこの女王、創造主の一人娘なのだ。

しかも、王家は血を保ち続けたがる。故に何代も何代も近親婚などで王家の血が途絶えないようにした。

つまり、世代を重ねてもなお純血を保った以上、王家の末裔である俺は創造主の遠い子孫。

創造主は曾々……（中略）……々爺ちゃんなわけだ。

この大地の使徒はそれを嗅ぎ取った（？）と思われる。なるほど、流石は獣なだけはあるな。

「悪いがこの身はやれんよ・・・っていうかアホか？身を差し出せと言われて差し出すバカがどこにいる」

いくらドMな人間でも、生贄になれと言われて生贄になるヤツがいるか？

——— 汝の答えに意味は無い・・・我が決めたこと・・・絶対の理・・・

なんて傲慢な・・・英雄王（金ピカ）かよ。

「知るかボケ。いい加減大人しくしてろよ。お前、創造主に負けたんだろ？」

——否・・・我は負けておらぬ・・・我が負けるはずがない・・・

「じゃあ、貴様は何で封印された？自分で時の挟間に飛び込みでもしたか？」

それこそ正真正銘のバカだ。

好き好んで永久停止させられるとか・・・・・・・・。。。

——否・・・否・・・否・・・

「違うなら何だ？」

——否……否……否……

「いやいや、否じゃ分かんての」

——否……否……否……

なんだこのバグったファミコンみたいなのは。

同じ言葉をリピートするだけって……論理破綻でも起きちまったか？

「埒が明かん。さっさとここから出せ」

——否……断じて否だ……汝が出ることは叶わぬ……

「なら、貴様を倒して無理やりにでも出るとしよう」

その方がつまらん脱出策を考えるより単純明快で楽チンだ。

どうも俺は親父に似てるな・・・策を考えるより殴った方が早いと思うし。

———なんと愚かな・・・出来ると思うのか？・・・たかが人間風情が・・・

「貴様はその人間風情に一度負けただろうが・・・まあ良い。貴様の本体は・・・地下45000mだと？」

敵本体が念動力による知覚に引っかかるまで力場を広げてみる。

すると地下45000m付近に“完全に時が止まった空間”があることが判明した。

おいおい、地下45kmじゃヘタすりゃモロヴィチッチ不連続面を突き抜けてるぞ……ってここは火星の位相だったか。

っていうかどうやってそんな空間作ったんだ……。

完全に時間が止まっているということは、その空間の部分だけ過去から未来に渡って“何も無い”ということになってしまっただぞ？

時が止まる＝時の概念が排される、というわけなのだから、時という概念が欠落した以上、時間軸上に存在することは不可能なはずだ。

時間軸上に存在しないということは、世界に存在しないのと同義なのでその場所は“無”になってしまう。

しかも“無”である以上、過去から未来に渡ってありとあらゆるものがそこでは“無”として扱われる。

その空間との同時間軸上に俺や世界が存在しない以上、その空間へは絶対に行けない……。はずなんだが。知覚できたということは、行けるということか？

いや、時が止まる＝時間を保存、という考え方もあるな。

つまり、その空間の部分だけ過去の世界のままだということ。

簡単に言えば、様々な技術が発達したこの世の中でポツンと恐竜が暮らしている場所があるようなものだ。

これなら理屈は通らなくはない。外部からの流入も、内部からの流出も無ければ空間内は一定に保たれるはず。

「・・・・・・・・あれ？」

そこまで考えてみて、ふと気が付いた。

伝承では、確か強力なマジックアイテムを用いて“使徒自身の時を止めて封印した”んじゃないかったっけ？

だがそれだと、こうして俺に接触してくる大地の使徒や地下の時が止まった空間の説明がつかない。

ということは、伝承が間違っていた可能性があるな。そのマジックアイテム、実は生物には効力が無いとか。

空間の時間を止めて固めてしまえば中の生物は出られないのでどっちにしる封印効果はあるのは間違いないんだが。

まあ、思考はここまでにするか。先方お待ちだ。

「座標セット・・・失敗。強制空間干渉・・・完了。座標セット・・・成功。空間歪曲開始」

一度座標をセットしようとしたら弾かれてしまった。

仕方がないので、強制的に空間へ干渉。俺という存在を認識させるために概念をねじ込む。

ねじ込んだ概念を道標に座標を再セット。それに合わせて空間を歪曲させ、道を作り出す。

そして・・・

「空間歪曲完了————跳躍」

俺は地下45kmにある大地の使徒の下へと空間^{ワープ}跳躍した。

第二十八話（後書き）

あと二話ほどで初等部編は終わります。

実は、構成だけならすでに原作突入あたりまで考えてあったり・・・。

第二十九話（前書き）

連投しまする。

いやあ、なかなか肉付けが思いつかないなあ・・・。

第二十九話

グニヤリと景色が歪み、その歪みが戻る頃には先ほどとは別の景色が広がっていた。

今俺が立っているのは、小高い丘の上。

見上げた空はどこまでも高く灰色で、まるでモノクロの世界へと飛び込んでしまったかのようにだ。

眼下には鬱蒼とした大樹海が広がっており、凄まじいことに地平線の彼方までが木々で埋め尽くされていた。

最早これは樹海ではなく樹界と呼ぶ方が相応しい。

そして、その樹界の中心にヤツは居た。

最初に感じたのは、マグマの如く噴き上がる闘志、触れただけで切り裂かれそうな殺気、空間が揺らいで見えるほどの大魔力。

“そこにいる”という存在感だけで周囲の空間が押しつぶされ、圧縮された空気が所々で破裂して衝撃波を産み出している。

エメラルドに輝くフサフサのたてがみや体毛、筋骨隆々な体軀、射抜くような視線を放つ鋭い目、重厚で頑強そうな牙、天を穿つかのような雄々しい二槍の角。

正確には分からないが、体長2000m以上はあるんじゃないだろうか。さらに言うなら、直立すればその倍はあると思われる。

身を揺すれば地鳴りが響き、一步踏み出せば地震が起きる。

上げる咆哮は木々を根元から吹き飛ばし、激しく揺さぶられた大気が暴風となって世界を襲う。

動く様は、まさに山が動いているかのよう。

歩くだけで地震が起きるのだ。これがもし解放たれた場合、間違
いなく魔法世界は終わりを迎えるだろう。

あまりの規模に、俺は絶句した。

「こいつが大地の使徒……グリーンガイア」

我がご先祖様であるライフメイカーが戦い、勝利したものの止めを
刺すまでには至れなかった怪物。

大地の怒りの顕現で、大地の意思そのもの。

こりゃ、半端じゃないな。少なくとも、“正義の魔法使い”とか言
ってる連中じゃ相手にもならんだろうよ。

全盛期の“紅き翼”が最適のコンディション、最強の装備、最高の状況で挑んでも、勝率は1割以下だろう。運が悪ければ、どこぞの汎用人型決戦兵器の起動確率より低いかもしれない。

「!!」

唐突に、俺の思考が強制的に中断させられた。

身体が理性より本能を優先し、感じるがままに身構える。

先ほどまでは漏れ出すだけだった闘気や殺気が、明確な意味を帯びて俺に向けられたからだ。

つまり、敵は戦闘モード。殺す気満々、全力全壊といったところであらう。

俺も、身体のサイズを誤魔化している幻術を解除。

シャノンとの絆であるアーティファクト、念の手袋を装備。服装もアーティファクトから出して瞬間着装する。

こちらにも負けじと闘気を出し、殺気を向ける。

両者の発する見えないエネルギーが、ぶつかり合って貪り合い、対消滅していく。

ポタリと汗が流れ落ちた。

これほどの敵はシャノン以来。こいつと比べたら、世界中の魔法使いたちが子供の玩具以下に見えるぜ……。

「何で原作も始まっちゃいないのにこんなのと戦わにゃいかんだ・
・」

こんなの原作にも出てきてねえぞ。

俺が投入された時点でもう原作から乖離してるのは分かってるんだ
けどさあ・・・・もうちょつとイージーマードにならないもんか
ね？

まあ、楽しいから良いんだけどな。

俺はそれを無理に避けようとはせず、広げた右手のひらに闘気を纏う。

「大魔王様よ、技を借りるぜっ！！！！」

そしてやってきた光線に俺は、下から掬い揚げるようにして手を振り上げた。

「フェニックスウイングッ！！！！！！」

ガンッ！！！！！！

俺の掌底に突き上げられた光線は、グニャリとねじ曲がって明後日の方向へと逸れていく。

これぞ、守りの奥義の一つ、フェニックスウィング。

某大魔王様考案の技で、氣や魔法、物理攻撃といったものを弾き飛ばすことが出来る技。

実はこれ至極簡単な技で、単に物凄い掌底突きをかましているだけだ。

あまりにも強い掌底突きにより発生した衝撃波が、あらゆる攻撃を弾いて逸らし無効化する絶対防御。

ただ、この技は氣や魔力の量ではなく純粹な筋力に依存する技なので、相手の攻撃の威力を上回るような衝撃波が出せる筋力が無ければ使いこなすことは無理。

その点、俺は大丈夫。伊達に魔人を名乗っちゃいない。

「今度はこっちのターンだぜ!!」

逸れた光線が空の彼方へと流れていくのを感じながら大きく一歩踏み込み、振りかぶった右腕に大量の魔力を纏う。

「プラクテ・ビギ・ナル“ 来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐!”」

呪文を詠唱。そしてそれをそのまま、使徒へ叩きつけるようにして腕を振り抜いた。

「“雷の暴風”!!」

ゴウツ!!!!!!!!!!

振り抜かれた右腕から、紫電の奔流が放たれる。

しかし、使徒は山のような巨体を素早く動かして右前脚を払い、巻き上げられた土砂や樹木で俺の魔法を迎撃。

俺の魔法が爆散すると同時に、巻き上げた土砂を咆哮の衝撃波に乗せて俺に飛ばしてくる。

——グオオオオオオ！！！！

簡易的なサンドブラストを作り出した使徒に対し、俺は念動力で巨大な力場の盾を展開。

サンドブラストを防ぎぎった後に力場の形状を巨大な盾から巨大な剣へと変えて思いっきり投げる。

ズドオオオオン！！！！

力場の剣は音の壁をぶち抜き、巨大なクレーターを作って地面へと突き刺さった。

しかし、敵は回避したようで既にそこには居らず、ただ風が吹き抜けるだけ。

だが・・

「ッ！？ウグアッ！！」

直後、俺は地面へと叩きつけられた。

ミシミシ・・・

「ぐぬぬぬ・・・」

とてつもなくデカイ前脚が、俺を押しつぶそうと圧し掛かっている。

言うまでも無く、大地の使徒の前脚。五行山にぶっ潰された孫悟空の気持ちが良いわかる今日この頃。

「つてふざけてる場合じゃねえぞ・・・」

俺の力場剣を音も衝撃も無く跳躍して回避した大地の使徒は、空中でグルグルと盾に高速回転し、太い尻尾で俺に回転攻撃を敢行。

そのとてつもない威力を想像できなかった俺は、満足な防御も出来ずに痛恨の一撃を受けてしまう。

で、地面に叩きつけられた俺へ即座に追撃を仕掛けた大地の使徒は、その前脚に全体重を載せたスタンピングで俺を押しつぶしにかかった。

そして今に至るわけだが・・・クソ痛いんだけど。ミシミシとか聞こえるし。

廃スペックボディのお陰で死ぬ事はないだろうが、痛いことには変わりが無いわけで。

「ぬおおおおお!!!!!!!!」

ギリギリと歯を食いしばり、全身に力を込めて使徒の前脚を押し返す。

念動力を使ってジャッキの要領で前脚を持ち上げて固定、その隙に下から抜け出して使徒の脚を引っ掴む。

そこで念動力の支えを解除。それにより、前脚に全体重を集中させていた使徒は均衡を失って過剰な力と共に前のめりな体勢に。

それを俺は見逃さず、使徒の後脚を念動力で思いっきり跳ね上げながら使徒の前脚を手前へと引き寄せた。

——グオオオオ！?!?!

ズゴオオオオオン!!!!!!!!!!

背負い投げの要領で使徒を投げ飛ばした俺は、使徒が地面へと叩きつけられたと同時に上空へ移動。効くかは不明だが、広域殲滅魔法の詠唱に入る。

「プラクテ・ビギ・ナル“契約に従い、我に従え、高殿の王！来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！百重千重と重なりて走れよ稲妻！”」

チョイスしたのは、親父直伝の“千の雷”。

いかに敵の装甲が強固であろうとも、その装甲が通電物質ならこの一撃は必ず通る！

紫色に渦巻く魔力。

俺はそれを呪文へ載せて、使徒へと解き放った。

「千の雷”！！！」

轟音と共に紫の雷柱が降り注ぐ。

辺りの樹海を根こそぎ消滅させながら、大地の使徒へと幾筋もの雷柱が吸い込まれるように突き刺さっていった。

しかし・・・

——ギヤオオオオオ!!!!!!

「何!？」

一度の咆哮。

たったそれだけで、大地の使徒は俺の魔法を破壊した。

「バカな・・・」

咆哮と共に眩い光の球体に包まれた使徒。

光の球体は大きく膨らみ、その光に触れた俺の魔法は尽く魔力へと還されていった。

さらに、大地の使徒周囲の地面はシュウシュウと音を立てて融解し、今もドロドロとした液体となって水たまりの様に溜まっている。

幸い、念動力で守られていた俺には何の影響も無かったが・・・おぞましいな。

「融解?・・・いや、腐食させたのか」

どこの腐食の月光だ。アーデルハイト妃殿下か、貴様は。

とはいえ・・・念動力で守られている俺にはそう関係ないが、魔法が無力化されるのはかなり痛い。

俺の戦闘スタイルは、状況に合わせて魔法や念動力を使い分け、ベストな選択を下して戦うという物。

その戦闘スタイルが維持できない今、攻撃方法は念動力のみ。

しかも、念動力による攻撃も純粋な力場をぶつけるか、自身に纏わせてぶん殴るくらいしか無い。

何かを操作した場合、その何かを腐食させることで妨害してくるだろうしな。

「仕方ない、ここからは接近戦だ」

——グオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

拳を構えた俺を、あざ笑うかのように使徒が吠える。

「上等だぜ！」

それにそう返した俺は、全身に念動力を纏って使徒に殴りかかった。

虚実を交えた俺の打撃に対し、使徒の打撃は嘘が全くないテレフオンパンチ。

だが、その速度は第二宇宙速度に匹敵する。

時速四万キロの速さで打ち出された丘ほどもある前脚。

もはや、隕石の衝突と何ら変わらないほどの一撃がありえないような速さで襲ってくるのだ。

俺も使徒も、音速を超えた速さで動き回っているため、辺りは衝撃波でメチャクチャ。

最初に見たあの広大な樹界は、すでに半分以上が消滅してしまっている。

種割れしたかのような、3Dかつ効率的な動きで超高速接近してくる使徒。

突き、払い、踏み、鋭爪など多彩な攻撃を繰り出しながら、爆走する暴走列車の如く暴れまわる。

こちらも黙ってやられているわけではなく、回避し、防御し、時には受け流しつつ隙を見つけては反撃に転ずる。

だが、刹那の隙に出来る攻撃などタカが知れているわけで……全くと言っていいほどダメージが入らない。

「ええい、デカイ図体のくせしてなんて素早い野郎なんだ」

貴様は稀に居る“やたら素早いポツチャリ系”か！

叩きつけられた左前脚の真横を蹴って攻撃を逸らし、顎を突き上げて上体を崩す。

だが突き上げられる際に自ら跳び上がることでダメージを軽減した使徒は、そのまま空中でクルクルと縦回転しながら尻尾を思いきり振り抜いた。

「それはもう覚えたぞ!!」

対する俺は、念動力の力場を斜めに展開。決して正面から防ごうとはせずに、逸らすことでこの攻撃から身を守る。

ギョオッ!!

思惑通り力場にぶつかって斜めに逸れた尻尾を尻目に、落ちてきた使徒を巨大な力場で叩き潰して吹き飛ばした。

吹っ飛んでいった使徒は途中でクルリと回転して衝撃を殺しきり、体勢を整えながら上手く着地。

そのまま、狙いをつけさせないようにジグザグ走行しながらこちら

へと接近してくる。

しかしこの走行方法は、意外と悪手である。

ランダムに動かれれば厄介だが、左右という一定方向に対して何度も動くため、タイミングが測りやすいのだ。

「そこだ!!」

接近して噛み千切ろうと口を開けたところを上手く捉え、頭の真横から一撃を加えることで攻撃を阻止。

そのまま膨大な念動力を集中させて使徒を縛り、地面に縫い付けて動けないようにした。

——ゴガアアアアア——！！！！

猛り狂い、枷から逃れようと暴れる使徒。

だが、俺の拘束は暴れた程度じゃ絶対に破れないぜ？

もがく使徒を真下に見下ろし、俺は勝負を決めるつもりで大技を放つ準備に入る。

両腕を広げ、多数の竜巻群を生成。一気に増幅して規模を大きくしていった。

皆は竜巻を知っているだろうか。

学校の校庭などでたまに見かける、クルクルと回る渦巻きを見たことはあるだろう。

竜巻と一口に言っても様々な物がある。

先程挙げた、校庭なんかに吹くちょっとした木枯らしレベルの物から、アメリカなどの広大な地で発生する何もかもを飲み込むような巨大なレベルの物まで千差万別、大小様々だ。

その中で、俺が巻き起こしたのはF5クラスという超強力な物。

Fというのは藤田教授が考案した藤田スケールという、竜巻を強度

別に分類した等級のイニシャル。
0から6まであり、6が最強。

F5クラスの竜巻は、時速512km、秒速に計算し直せば141mもの暴風が吹き荒れ、あり得ないほどの莫大な壊滅的被害を引き起こす。

鉄筋コンクリート製の強固な建物すら粉碎し、自動車大の物体をミサイルの如き速さで吹き飛ばし、樹木を根こそぎ薙ぎ倒し、その経路上にあるもの全てを破壊しつつして突き進む。

あまりの威力に“地上を掻き回す神の指”と揶揄されるほどの代物で、発生してしまった場合はその経路から避難することくらいしか生き延びる術は無い。

俺が今回作り出した竜巻群は、その一つ一つがF5クラスを誇る超広域殲滅仕様。

100のF5クラスが吠え猛る最凶の大技。

「さあ蹂躪せよ、神々の軍勢^{ゴッドフォース}!!」

その声と共に、竜巻たちが動き始めた。

引き起こされる様は、まさに天災。

凄まじい暴風が大地を捲り上げ、蹂躪し、破壊していく。

俺も念動力によって守られていなければ暴風の渦に巻き込まれていたに違いない。

大地を掻き回す巨大な渦が、大地の使徒に襲いかかる。

——ガアアアアア！！！！！！！

苦痛に身を振り叫ぶ大地の使徒。

そりゃ痛いし苦しからう？

F5クラスの竜巻では、巻き上げられた小石ですら砲弾級の威力を発揮する。

加えて猛烈な勢いの渦が身体を引き裂き、竜巻の内外で違う気圧が感覚を押しつぶす。

さらに言うなら、あの風の中では呼吸すらままならないだろう。

吹き付ける暴風の中で、確かな手ごたえを感じた俺は軽いため息をついた。

その後、神々の軍勢の進軍は1時間続いた。

通常、F5クラスの竜巻はそんな短時間では消えないが、俺が発生

させた竜巻は自然の意思に反して起こしたものだ。

故に修正力による修正・・・とまではいかないものの、自然発生した竜巻よりも短時間で消える。まあ、念動力を使えば竜巻を一生出し続けることは可能なんだが。

破壊され尽して地形が変わった大地。

緑のカーペットが今ではこげ茶色のカーペットに塗り替えられ、所々ではまだ木材の破片などが舞い上がっている。

しかし・・・

「……F5に耐えたか。何ともまあ……お前も俺並にタフだな」

地に伏した巨大な生き物を見てため息をつく。

驚いたことに、大地の使徒はF5クラス竜巻の蹂躞に見事耐え抜いた。

虫の息ではあるが、まだ確実に生きている。

ここまで耐えたのはシャノンに次いで2人（？）目だな。

耐えたのは褒めるが……もう終わらせよう。

「名乗ろう。我が名はアウラ。アウラ・スプリングフィールド」

記憶に、心に、魂に刻め。

「我が最強の一撃をとくと味わえ」

手加減なんて一切しない。本気の本気、全力の一撃を以て地獄へ送ってやる。

「念動力全開放出、空間コーティング」

まずは世界を。

一部の隙も無く力場で埋め尽くし、一切の影響を外部へと与えないように保護する。

内部からも外部からも全干渉をシャットアウト。外からは入れず、中からは出さない。

「全魔力、全氣力、念動力、混合集束。全エネルギーを右腕へ」

次に力を。

持てる全ての力を右腕へ集束。

一切合財を全て込めるので、これを放てば戦術の幅はグッと狭まってしまう。

故に、一撃必殺。これを決めなければ自身が危うい。

「行くぞ、大地の使徒!!この一撃、手向けと受け取れ!!!」

最後にイメージする。

千の敵を討払い、万の災厄を覆す、絶対の一撃を。

あらゆるものを砕き、あらゆるものを貫く、最強の一撃を。

想像し、創造し、破戒し、破壊する、終焉の一撃を。

後は右腕を振りかぶり、思いっきり振り抜く。

ただそれだけ。他には要らない。

「覇拳」

全力の開放、そして生まれた光の洪水。

その瞬間・・・世界が爆ぜた。

第二十九話（後書き）

続きは次回にて・・・。

第三十話（前書き）

連投

これで初等部編は一応の終わりとなります。

第三十話

「・・・・・ヴィクトリー」

トサツと地面に降り立ち、そのまま大の字に寝転がった。

ヒンヤリとした地面が火照る身体に心地よい。

光の洪水が収まった後、そこにはもう何も残っていなかった。

跡形もなく量子分解された大地の使徒は、一言も発すること無く絶命。

この世界を墓標にして地に沈んだ。

「久しぶりに全力出せたな・・・」

相変わらず灰色の空を見ながら呟く。

シャノンとの修行を終えてから数か月。

沢山の出来事があったが、俺は若干欲求不満だった。

折角手に入れた力を振るう時が来ないのだ。

確かに強敵と戦った。

なのはさん、はやてさん、フェイトさん。いずれも魔法世界最強クラス。

だが、俺には遠く及ばない。

親父、筋肉ダルマ、シヨタ爺、鍋將軍、変態司書長、闇の福音でさえ俺には絶対に勝てない。

多分、ライフメイカーでも無理だろう。

彼らは、どんなに頑張ってみてもただの人（一部違うのも居るが）。

一人を殺す力はあっても、星一つを壊す力は無い。

でも、俺にはその力がある。

星を意のままにすることが出来るほどの莫大な力がある。

だから、種という意味では弱者である人間相手に俺の本気の力は振るえない。

無論、殺す気であれば本気の力を出すことは可能ではあるが。

以前、シャノンが言った。

「君は力を得た。だが、その力を使う日は永遠に来ないと思って日々を過ごしたまえ。そうでなければ、自らの心に飲み込まれるぞ」

折角の力を持っても、倫理的な問題や危険さゆえに振るうこと

許されない。

仕方が無いので、理性で抑え込みつつ日々を過ごす。

でも、押さえこめば抑え込むほどにその欲求は増していき、自身を苦しめることとなる。

そんなことを何度も繰り返すうちに心は摩耗し、やがては理性というリミッターが効力を成さなくなり、精神は追いつめられていく。

そうなればもう終わりだ。欲求を満たせるまで力を振るうか、我慢の末に精神崩壊を起こして暴走するか、の2択しか無い。

だから、大地の使徒には悪いが、良い機会だった。

今、俺はとてもスッキリしている。

全力で放った“覇拳”が俺の欲求をも吹き飛ばしてくれた。

「戦闘狂か・・・親父譲りとはいえ何とかしなきゃな」

まあ、その辺は追々考えるとして・・・・・・・・今は休もう。

「あー、疲れた」

死ななくても疲労はするのだよ。

「よし、帰るか」

数時間ほど休み、魔力や氣がある程度回復したので帰ることにした。
全快には程遠いが、魔力や氣が無くても念動力があるから何とかなるしな。

「えーと・・・・・・・・あったあった」

念動力を放出し、世界を搜索。

こちらにワープする際に用いた経路を探し出す。

経路とは、読んで字の如く道筋のこと。

別次元からアプローチすることで点と点を結び、その交錯した一点を穿つことによって完成した一種のワームホールのようなものだ。

俗に言う転移や跳躍、ワープといったものは、この経路を通じてあ

る点からある点へと移動することを指す。

「開けっ放しは拙かったか？まあ、大丈夫だとは思うけど」

万が一、経路に人が落ちた場合、どうなるかは皆目見当もつかない。

孔を穿って点と点を繋ぐ以上、それはワームホールと同義。

以前言ったとおり、ワームホールなんてものはわけが分からない。
魔人たる俺以外が通ったら人体にどんな影響をもたらすか不明なのだ。

だから、滑落を防ぐ意味でも念動力で孔に蓋をする必要があるんだが……今回は大丈夫と思われる。

確か、時計塔は俺がオウカを吹き飛ばした直後に再び入口を堅く閉ざしたはず。

当然、人の出入りは無いはずだから、人が誤って落ちてくることはないだろう。

「さっさと帰ろ。今はメシ喰って風呂入って早く寝たい気分だぜ」

数時間も死闘をしてれば、嫌でも生きていることのありがたさがわかるってもんだ。

今はどんな賞与や豪華褒賞より、飯と風呂とベッドが欲しい。

「さて、ワープと洒落こむか」

ほんの一瞬だけだけど。

このまま自室に転移したらまた一騒動ありそうなので、時計塔玄関ホールを転移先に設定。

「ワープ」

この世界へ来た時と同じようにグニャリと景色が歪み、周囲が様変わりする。

あの灰色の空は重厚な天井に変わり、こげ茶の大地は堅い石畳に、地平線の彼方まで何も無かった周囲は壁や機械群に囲まれていた。

「ワープアウトっと。時間誤差は……ゼロだど？」

念動力で時間を知覚してみても軽くビツクリ。

そうか、空間自体の時間が概念上は止まっていたから、あの空間で俺が過ごした時間はこの世界で無かったことになってるのか。

「何という逆ウラシマ。女性だったら発狂しそうだ」

ダイオラマ魔法球超強化版ってところか？

玄関ドアに手をかけて、一気に開け放つ。

ガチャ！

するとドアは、スムーズに開く。今回は何の抵抗も無く開いたようだ。

「さーて、どうするかな」

推測だが、オウカが先生たちに俺の救助を願い出たに違いないと思う。

ということは、間もなく此処へ先生たちがやってくるだろう。

「ここを動かない方がいいのか？」

俺が勝手に帰ったらオウカが怒られるかもしれんし、後日出頭命令

が下される可能性もある。

出来るだけ面倒事は今日の内に終わらせたいな。

決定、俺はここを動かない。

「よつと・・・・・・・・ふう」

とりあえず、その辺に設置してあったベンチに座る。

良い塩梅に陽の光が当たるベンチの良さに、思わずため息が出た。

しばらくぼけーっとしていると、オウカがフェイトさんとなのはさんを伴って駆け込んだので、虚偽9割の話をして納得させて帰

した。

内容？差し障り無いように改竄したよ。

とりあえず、悪戯好きな悪霊が住み着いてたっということにしておいた。

大地の使徒云々なんて話した暁には、魔法世界中が大騒ぎになるだろうし。

ついでに、上手く言いくるめて体調不良を理由に遠足を早退。

影のゲートを使って自室へと戻り、着替えを持って24時間入れる公衆浴場で入浴。

その後は軽い食事をしてから再び自室へ戻り、ちょっと早い眠りについた。

翌日。

完全回復した俺は、学校が休みなのも相まって、久々に里帰りをしていた。

昨日の死闘・・・大地の使徒のことを話したかったし、何より家族が恋しくなったからである。

ホームシックではないと思いたいが・・・。

魔法世界の片隅、秘境に近い場所にあるヘラス帝国皇帝直轄地。そこに我が家はある。

何でも、世界を救った功績として親父に貸し与えられた場所なのだから。

この場所ならメセンブリーナ連合は手が出せず、皇帝直轄地だから一般人の立ち入りなどはない。

念のため家周辺に複雑かつ強固な防御結界が敷かれているわけで、非常に安全な場所になっている。

よく貸し出したな、ヘラス皇帝。ヘラス帝国じゃ、親父のことを“連合の赤い悪魔”なんて呼んでたりするのに。

防御結界に足を踏み入れ、小奇麗な庭を歩いて玄関に立つ。

ドアを開けようと手を伸ばしたら、ドアは内側から自然と開いた。

「お、帰ってきたのかアウラ。お帰り」

笑顔で出迎えたのは、忙しく飛び回っている（比喻にあらず）はずの我が父、ナギ・スプリングフィールド。

「ん、ただいま。母ちゃんは？」

「キッチンでランチを作ってるぞ。ほれ、入った入った」

親父に押され、屋内へ。

玄関を抜けてリビングに入ると、美味しそうな匂いが漂っていた。

キッチンでは母ちゃんが慣れた手つきで鮮やかに料理しており、沸騰する鍋の音や包丁が野菜を切る音などでとても賑やかである。

「ただいま」

「お帰りアウラ。もうすぐ料理が出来上がるから少し待っておれ」

俺の挨拶に言葉を返した母ちゃんに頷き、ソファーに腰掛ける。

そこへ親父が俺と向かい合うような席に座り、何やら真剣な顔をして複雑そうな魔道書を読み始めた。
ちよつと興味が湧いたので聞いてみることに。

「何それ？」

「ん？これか？これはな、俺にも良く分からん」

ズルツ・・・

自信満々で言った親父に、若干滑った俺。

「それが、さっぱりわからないんだ。第一、何語で書いてあるかすらわかんねえ」

ヒョイと渡された魔道書を受け取る。

これは・・・・・・・・・・アクエリム語だな。

「これ、アクエリム語だよ。水系魔法の古代魔道書じゃないかな」

「読めるのか!？」

「うん」

勿論、読めるぞ。

前世では日本語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、エジプト語が読み書き出来たし、喋ることも聞き取れることも出来た。

新しい生を歩き出してからは、さらに古代語や各種精霊語、ルーンなんかも読み書きできるようになった。

アクエリム語は水の精霊達が使う言語で、複雑な記号や奇妙な形の文字を組み合わせて使う極めて面倒な物。

ただ、記述方法には一定の法則があるため、読破するのは容易である。

最初のころは辞書が必要だったが、今では余裕で解読出来るぜ。

一文を指でなぞりながら言葉に起こしていく。

「この魔道書、読む者に水の大いなる加護を与えん。それは、青き水の原初なる者。激しく流るる水の如き戟の力と、せせらぎの如く優しく揺蕩^{たゆた}う癒の力」

ふむ、これは……………

「親父、これどこで見つけた？」

神妙な面持ちで俺の翻訳を聞いていた親父に問いかけてみる。

「あん？これはこの前仕事で行ったダンジョンで見つけたんだ。厳

重に保管されてたもんだからレアな物だと思ってな」

なるほど。

「これ、貴重どころの騒ぎじゃないよ。“水の聖典”って呼ばれてる魔道書だ」

“聖典”シリーズは後世に伝わる魔道書の中で最も貴重な物である。

失われた魔法等が書いてあるため、極めて有用な魔道書なのだ。

「これ、貰っても良い？解析したい」

「ああ、良いぞ。俺は水の魔法なんて使わないからな」

うむ、と簡単に頷いた親父。

実はこの魔道書、時価にして300万ドラクマ位はする代物なんだから……ラッキー。

「ありがとう」

早速読み始めた俺だったが、軽い衝撃を頭に受けたので顔を上げる。

すると、母ちゃんが片手に料理が乗った皿を乗せて立っていた。

「読書はご飯を食べた後にするのじゃ。折角作ったのに、冷めてしまっじやろ」

そりゃごもつともで。

昼食を終えた俺は、紅茶片手に和やかな談笑を楽しんでいた。

親父の最新武勇伝や、それに対する母ちゃんの批評。俺は俺で学校での近況を話したり。

いつ昨日のことを切り出そうかとタイミングを計ってるんだが・・・話してしまつて良いものかな？

話すとなれば、俺の持つ念動力について話さなきゃだし・・・どこでそんなに戦闘経験を積んだのかと訝しがられるだろう。

だが、話さなきゃ世界の明日につながるような出来事になるかもしれないし・・・うーむ。

そんな俺の葛藤をよそに、会話は弾む。

しばらく談笑が続いた後、カップを置いた親父が真面目な表情を浮かべてこう切り出した。

「アウラ、もうしばらくしたら俺達は此処を引き払って旧世界へ移

ろうと思う。お前は・・・どうする？一緒に来るか？」

「・・・・・・・・・・」

引っ越し、か。

最初のほうで安全と述べたが、それも危うくなってきているのだから。

ていうかそんな重い話を振られたら俺の話ができなくなるじゃないか・・・。

考えた末に俺は、首を横に振った。

「行かない。俺は俺のなすべき事があるから」

「カッコつけてるのう・・・わかったのじゃ。じゃが、長期休暇の時は必ず帰ってくるんじゃないぞ？」

そう言う母ちゃん。親父も隣でうんうん頷いてるし。

流石、放任主義なご両親。通常じゃ絶対に譲かない所を譲いちゃったよ。

「家の場所が決まったら手紙を送るぜ。しっかり勉強しろよ？アウラ」

お前が言うな。

だが、激励の言葉はありがたく承ろう。

「わかった。元気でね？二人とも」

マジで元気でいてくれよ？

もう二人は十分頑張ったんだし。無茶なんてしないでいいからさ。

「でも、無理だろうな」

この二人は困っている人を見捨てられない性質だ。

それこそ、命を賭けて何とかしようとするかもしれない。

俺はこの家族が好きだ。何にも代えがたいほど愛おしい。

仮に、親父や母ちゃんが危機に陥った場合、俺は全力を持って何とかする。

窮地に立たされていたら、その戦況をひっくり返して勝利を捧げよう。

死にかけていたら、全力で癒してみせよう。

例え死んでしまったとしても、あの世から連れて帰ってやる。

どうにもならなくなったら？進化の階段を上ってどうにかする術を

獲得してやるとも。

進化の力を持つ俺に、不可能なんてありはしないのだから。

「何が」

「無理なんじゃ？」

「いや、何でもないよ」

揃って首をかしげる両親に首を振り、冷めた紅茶を一口含んで思考を戻す。

ニコニコしながら話す親父と母ちゃん。

こうして会うことは、そう簡単には出来なくなる。

こうしてお茶を飲みながら話すことは、そう簡単には出来なくなる。

ゲートという一点で結ばれた、地球と魔法世界。

両者は限りなく近く、そして限りなく遠い。

もしかしたら今生の別れになるやもしれない。

「・・・・・・・・」

何をバカな、と自身の考えにダメだしをして喝を入れる。

だけど、その考えをどこか無視できない自分が居たりして。

「（この先がずっと平和であり続けてくれたら）」

未来に待ち受ける出来事を知っている俺からすれば、決して叶うことのない淡い幻想。

そう思うと、なんだか無性に悲しくなった。

第三十話（後書き）

次回から中等部&高等部編に入ります。

次回もお楽しみに♪

第三十一話（前書き）

第二部スタートです。

第三十一話

1993年12月24日。

世間一般では恋人たちが愛を語り合うクリスマスイブ。

愛を語り合ったついでにベッドインして見事にベイビーをご懐妊、
なんていうクリスマスチルドレンの製造日でもある。

ここで、半ばテンプレと化した言葉を贈ろう。

「リア充、爆発しろ」と。

妊娠したことを「わーい、サンタさんからの贈り物だ」とか言っ
てはしゃぐ連中もいると聞
く・・・・・・・・頭部のレントゲン写真を撮ることを強くお勧めす
る。

サンタからの贈り物？それはサンタが親だと知ってての発言か？

うむ、俺は気にしないよ。この世界のどこかでは近親で愛を育む人
たちもいるのだろうしね。

まあ、その話はどこかへ放り投げておくとして・・・。

現在、俺はトルコのイスタンブールにいる。

二大陸にまたがる巨大な都市のくせに、トルコの首都では無かったりする。ていうか、首都よりデカいんだから遷都すればいいのに・・・。

「あー、ケバブシリーズうめえな・・・」

塩味が効いたシシ・ケバブを一口齧り、トルココーヒーで流し込む。

え？肉料理にコーヒーは邪道？ほっとけ。

かの有名なシシ・ケバブにイスケンデル・ケバブ。

ケバブとは、トルコにおける焼き肉料理の総称で、主に羊肉や鶏肉を焼いたものだ。

近年、日本ではドネル・ケバブがファーストフードとして流行っているが・・・あれも美味いよね。

ピリリとしたチリソースも良いし、こってり濃厚なヨーグルトソースも良い。ああ、新興勢力の爽やかな酸味と柑橘系の香りが食欲を

そそるフルーツソースも最高だ。

流石、世界三大料理と呼ばれるだけのことはある。

時間が許せば料理をコースで食べたかったんだけど……
まあ、仕上げにトルコ風アイスクリームのドンドウルマを食べるつて決めてるんだがな。

やはり、外国に来たら観光とショッピングと食べ歩きが一番だぜ・
……ん？その3つしかやること無くね？

だが、誠に遺憾だがトルコには観光をしに来たわけじゃない。

いや、今しているのは観光と言えば観光なんだが……本当の予定としてはちよつと違うのだ。

俺は手に持っている“親父の杖”を弄びながら、脳内でこれからの予定を思い起こす。

ちなみにこの後、“紅き翼”の連中と合流予定である。

随分と飛躍した話ではあるが、なし崩し的にそうなってしまった。

発端は我が親父ナギ・スプリングフィールドに、大戦時以来の宿敵“完全なる世界”の残党がイスタンブールに集結しているという手紙が舞い込んだことである。

この手紙は12月20日に届いたのだが、次の日には親父は母ちゃんを連れてイスタンブールへと赴いたらしい。

魔法世界の騒動は旧世界と呼称される地球では関係ないことだから、母ちゃんも大手を振って歩ける……わけでもなかった。

このイスタンプールは魔法世界と繋がるゲートが設置されているため、様々な魔法結社の支局が置かれているのだ。

無論、表立って行動しているはずはないのだが、流石に魔法関係者同士なら分かってしまう。

なんていうかこう……直感的に？「あ、こいつ魔法使いだな」みたいな感じで。

母ちゃんは世間的には処刑されているお方である。しかも、自らの国を滅ぼした揚句に自国民を奴隷として売り払ったとして“災厄の魔女”なんて評価を受けてるわけで。

無論、嘘八百も良い所だ。

確かに母ちゃんは自分の国を滅ぼしたかもしれないし、自国民を奴

隷に貶めたかもしれない。

だけど、母ちゃんがオスティアを犠牲にして“世界を無に帰す儀式魔法”を封じなければ、魔法世界は魔力枯渇を待たずして滅んでいた。

奴隷云々の件だって、自らの国の民達が難民となって明日の命の保証が無い状況に陥るよりも、奴隷として雇われることで最低限の生活を送れるようにとの配慮からだっただけだ。

本当なら母ちゃんだって救世の英雄の一人として称えられるはずだったんだ。

あの戦争の裏に潜んでいた連中を暴き出したのだって母ちゃん達だったのに。

だが、元老院連中は母ちゃんがやったことを曲解&誇張して特大の戦犯を作り上げた。

戦争というバカ騒ぎで、人々の溜まりに溜まったフラストレーションの捌け口に母ちゃんを宛がった。

必死の思いで世界を守ったのに、聞こえてくる言葉は称賛ではなく罵詈雑言や呪詛の嵐。

母ちゃんは、さぞかし絶望したことだろう。

ピンポイントで隕石落ちないかね。元老院の真上にさ……いや、むしろ落としてやろうか。

母ちゃんをスケープゴートとした一連の流れは、元老院が公式に発表した“アリカ姫の処刑”という形で一応の幕引きを迎える。

しかし、それはあくまで“公式”の話である。

実際には、元老院が手痛い敗北を喫した上に後々まで残るどデカイ火種を抱え込んでしまっただけに止まったわけだ。

処刑場であるケルベラス溪谷を強襲した親父たち“紅き翼”は、見

事母ちゃんの奪還に成功。そして親父は脱出した勢いのままに母ちゃんにプロポーズ。母ちゃんはそれを受け入れて今日に至る。

だが、それに困ったのは元老院の方だ。

もし万が一、母ちゃんが生きることが世間一般に知れてしまった場合、世論から厳しい追及を受ける羽目になってしまう。

しかも、母ちゃんが持つ情報が何よりも脅威。

当然だろう。自分たちが裏で戦争を煽っていたことが母ちゃんたちには知られてしまっているのだから。

だから、元老院連中は母ちゃんを抹殺しようと躍起になっている。

火種である母ちゃんを消すことで、世論が大炎上する前に問題自体を無かったことにして強制的に鎮火するのだ。

長い歴史の中で何度も繰り返されたであろう最強の問題解決法。別名“死人に口なし作戦”。多分、連中が持つてるマニュアルにでも書いてあるんだろうよ。「問題になる前にぶっ殺しちゃいましょう」的な事がさ。

てな訳で、母ちゃんがイスタンブールをうろつくと非常に拙いにもかかわらず親父にくっ付いて行ったのには理由がある。

単純にキナ臭いのだ。

そもそも、全く表に出ずに戦争の引き金を引くことに成功した“完全なる世界”の連中がそう簡単に情報をつかませたりするものだろうか。

いくら残党とはいえ、情報秘匿のノウハウは継承されているだろう。

だから、今回の一件は罠である可能性がある。

そう考えた母ちゃんは説得（主に力技によるゴリ押しで）して親父に同行。親父も頭を押さえて（主に外傷のせいで）許可し、イスタンブールへと赴くことに。

念には念を、と親父はかつての仲間達をイスタンブールへと召集。

戦死したフィリウス・ゼクトと離脱したクルト・ゲーデルを除いた
“紅き翼”のメンバーをイスタンブールへと集結させた。

しかも、どうやったのかは知らないが我がマスターたるエヴァまで
引っ張って来た。

何という豪華メンバー。負けるところがイメージできない。

そして、いざ残党狩りじゃ!!!!.....って時に親父がやら
した。

正確にはやらかしたことに気が付いた。

信じられないことに、自分の魔法発動体である杖を家に忘れて来たのだ。

あまりのアホさに仲間達から手荒なお仕置きを受けたらしいが・・・まあ、自業自得だろう。ていうか戦場に行くのに武器を忘れちゃダメだろうがよ。

さて困ったぞ、ということで急ぎよ話し合いが行われた。以下、ダイジェスト。

司書「キティに杖を取りに行ってもらえばよろしいのでは？」

真祖「キティ言うな！！取りに行っても良いが、家の座標を知らんぞ？」

筋肉「気合で何とかなるだろ？」

姫様「それはお主だけじゃろう・・・防犯対策のため、我が家には

転移が出来ぬのじゃ」

英雄「魔力を探知されないように飛行機で来たのが裏目に出ちまったな」

ロリ「・・・・・・・・ナギ、バカ？」

洩男「どうする？汎用品の魔法発動体で良ければ用意できると思うが」

弟子「でも、ナギさんの魔力に耐えられますかね？」

剣士「無理だろう。以前、汎用品を試させたら爆散したからな」

全員「どうしよう・・・・・・・・」

英雄「・・・・・・・・あ」

司書「どうしたんです？」

英雄「うん、家から杖を持ってきてもらおう」

剣士「だから誰にだ、鳥頭」

姫様「おい、まさか」

英雄「ああ、アウラに持ってきてもらおうぜ」

真祖「アウラか・・・あいつ、今アリアドネーだろう」

筋肉「アウラ?・・・ああ、お前らの息子か」

剣士「何い!? お前、子供居るのか!？」

姫様「居るぞ。今、ちょうど8歳じゃ」

渋男「一言くらい仰ってくだされば出産祝いの品でもお贈りしたのですが・・・」

弟子「そうですよ! 僕もお祝いしたかったです」

姫様「すまぬの。元老院に知られたら拙いのでな・・・内密に産ませてもらったのじゃ」

ロリ「・・・・・・・・私の弟？」

姫様「そうなるのう。仲良くするんじゃぞ? アスナ」

ロリ「・・・・・・・・うん、わかった」

真祖「で、どうやってアウラに持ってきてもらうんだ？」

英雄「簡単さ。もう2時間くらいしたらこのゲートが開くだろう? 誰かがそれで魔法世界に行つて、アリアドネーのセラスに連絡するんだ。それで、アウラに“俺の杖を持ってきてくれ”って伝言してもらえば良い」

司書「ですが、たった8歳の子供がアリアドネーからイスタンブー

ルまで移動出来ますかね？」

真祖「大丈夫だろう。アウラは影のゲートが使えるしな」

司書「本当ですか！？それは……是非とも会ってみたいです
ね」

筋肉「しかもあいつ、相当強いぞ。俺らと同等か、それ以上かもしれん」

洪男「そんなバカな……8歳だぞ？」

筋肉「セラスにも言ったがよ、強さに年齢は関係ねえ」

英雄「まあ、アウラの強弱は良いとして……アウラに頼む案で
良いな？」

全員「異議無し」

以上、ダイジェスト終了。

そんな話し合いがなされた（らしい）後、セラス総長経由で親父か
らの依頼が俺に届いた。

で、断る理由など無かった俺は、特別外出許可をもらってから我が家に帰り、リビングの隅に転がっていた杖をゲット。そのまま空気を捻じ曲げて魔法世界の我が家から旧世界のイスタンブールまで一気に跳躍した。

伝言を受けとったその日の午後にはイスタンブール入りを果たしていた俺は、折角だからと幻術で変装して観光を敢行。

食べ歩きやショッピングを楽しんでから親父に連絡を取った。

そして、指定通りの時間に指定の場所へ向かったわけだが・・・。

「うぷっ・・・ダメだ、もう飲めねえ・・・」

顔を真っ青にして今にも吐きそうな親父と

「ガハハハハ！！気合が足んねえぞ、ナギー！！」

それへ止めを刺すかの様にバンバンと親父の背中を叩くラカン。

「キティ、これをどうぞ」

「うん？ ってなんだ、この向こうが透けて見えるキャミソールは！
！！」

エヴァに変なものを着せようと画策する司書長に

「前にも申し上げましたが、うちにも子供がいます。ほら、4歳なんですけど可愛いでしょう？」

「ほう、そうじゃのう。とても可愛らしくて妖精のようじゃ」

懷から取り出した愛娘の写真片手に母ちゃんと話し込む神鳴流剣士。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・うう」

その傍らには既に潰されたと思しき師弟が転がっており

「・・・・・・・・（ちゅー）」

可愛らしくストローでジュースを飲む我が姉がそれを眺めている。

「うむ、わけが分からん」

人に物を頼んだ分際で、酒場を借り切って酒盛りをしていやがるのは・・・・・・・・。

状況を聞こうと思い、バーテンダーやら店長やらを探すが見当たらず。

とりあえず、多分素面であろう母ちゃんに近づく。

すると、向こうもこちらに気が付いたのか手招きをした。

「おお、アウラ。ご苦労じゃったな」

「ん。はい、どうぞ」

杖を母ちゃんに手渡す。

うむ、といった母ちゃんは杖を受け取って親父に近づいていった。

残された俺と、神鳴流剣士。

互いに初対面なので必然的に自己紹介が始まる。

「初めまして。君のお父さんの仲間で神鳴流の剣士をしている、近衛詠春です。よろしくね」

そう言って右手を差し出す詠春さん。

あ、これはどうもご丁寧に。

「初めまして。アウラ・スプリングフィールドです。父と母がお世話になってます」

俺も右手を差し出して相手の右手を握り、軽く上下に動かす。

俗にいう握手であるが……ちよつと剣ダコが痛いな。

剣士の証しとも言うべき剣ダコ。これが厚く硬いほどその人は修練を積んでいるということになるらしい。

俺の挨拶を聞いた詠春さんは、軽く驚いた表情を浮かべた。

あー、この子本当にあのナギの息子か？って疑ってるんだろう。なんせ、態度を良くしてるからな。

え？俺の性別を疑ってる？疑っても構わないが、この辺一帯を永久凍土に変えてしまうかも知れんぞ？

しばらく話していると、いつの間にか我が姉であるアスナ・ウエス
ペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアが背後まで来ていた。

ジーツという音が聞こえてきそうなほどにこちらを見ており、俺の
背後が見えている詠春さんは苦笑いを浮かべている。

振り向かないわけにはいかないので、相手を驚かせないようにゆっ
くりと振り向くと

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

綺麗な色をした碧と蒼のオッドアイが俺の顔を覗き込んでいた。

しかも、顔がやたら近い。物の弾みでキスしかねないほどに。

「ちょ・・近い近い」

「・・・・・・・・ん」

姉ちゃんの肩を押さえて距離を取ると、姉ちゃんはちよつと残念そうな表情をした。

「・・・・・・・・弟」

ビシッと俺を指差して言う姉ちゃん。

「そ、そうだね。従弟だけど」

姉ちゃんは母ちゃんの姉の子供であったが、その身に宿した力故に戦争に利用され、成長することすら許されなかった。

挙句の果てにはクリスタルに閉じ込められるわ、反魔法場ごと封印されるわで踏んだり蹴ったりな人生を送ってきてる。

「・・・・・・・・アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・
エンテオフュシア」

自己紹介してくれたようだ。

「俺は、アウラ・スプリングフィールド。えー、姉ちゃんって呼んでも?」

「……………ん、良い」

頷いた姉ちゃんは机の上にあったブドウジュースを片手に去って行き、奥の方でくたばっている二人をツンツンと突いて遊び始めた。

「ふう……」

無事にファーストコンタクト終了。俺は新しい家族……姉を獲得した。まあ、従姉だけど。

姉ちゃんと話している間は放置しっぱなしだった詠春さんに詫びを入れ、話を程々にして切り上げた。

理由は簡単。愛しの我がマスターであるエヴァと話すためである。

「では、このブラなんてどうでしょう？」

「着れるか！！それはブラじゃなくて単なるヒモだろうが！！」

何故か弄られっぱなしのエヴァを救うべく、言い寄っている変態の座っている椅子の脚を念動力で自然な形になるように圧し折る。

流石の英雄と言うべきか、グラリと椅子が傾いた瞬間には立ちあがったために転ぶようなことはなかったみたいだがエヴァから引き離すのには成功した。

この隙にエヴァへと近寄って、変態がエヴァに話しかける前に話しかける。

「久しぶり」

「久しぶりだなアウラ。アリアドネーからここまで遠かっただろう

「？」

「ん、そうでもない。昼過ぎには着いてた」

挨拶代りにエヴァと熱い抱擁^{ハグ}を交わした後、一緒のテーブルに着く。

席はエヴァの隣。ちなみにその椅子の上に置いてあったエロティックランジェリーはテーブルの下に払い落した。

それを見て軽いショックを受けたような司書長だったが、何を思ったのか物凄く良いスマイルを浮かべる。

「これはこれは・・・初めまして。私、アルビレオ・イマと申します。日本と言う国にある麻帆良学園という所で司書をしておりまして。以後お見知り置きを」

胡散臭い笑みを浮かべているが、名乗った以上こちらも名乗らねばなるまいて。

「初めまして。アウラ・スプリングフィールドです」

父と母がお世話になってます、っていう文言は言わない。世話になっているかもしれないが、その逆も然りだと思うし。イーブンってことで。

詠春さんは・・・多分、8対2くらいの割合で迷惑かけっぱなしだろう。だから、お世話になってますと挨拶したわけだ。願わくば、心労でその額が後退することが無いように祈るばかりである。

これまた挨拶もそこそこにして切り上げ、エヴァとの会話に移る。ちなみに気を利かせたのかは定かではないが、アルさん（そう呼べと言われた）は「ごゆっくり」と一言残して胡散臭い笑みと共にフェードアウトしていった。

語り合うのは、互いの近況。俺は学校生活のことを、エヴァは世界放浪のことを。

実はこのエヴァ、原作通りなら親父の手によってとくに麻帆良へ封印されているはずである。

しかし、俺の教師と言う名目で原作より先にファーストコンタクトを迎えているため親父や母ちゃんと仲が良い。

当然、封印云々なんて話はあるわけも無く、したがって彼女は自由

に世界を旅してまわっているらしい。

しばらく会話を楽しんでいるうちに、俺はあることを思い出した。

「そう言えば・・・エヴァにこれをあげるよ」

そう言って影から取り出したのは、廃スペックポータブルデバイス。

現代で言うi P h o n eみたいなタッチスクリーン式の小型携帯端末だが、そのスペックは色々とおかしい。

亜空間通信を用いることで如何なる場所、如何なる状況下においても高速かつ鮮明な通信が可能な上、電話やメールは勿論、旧世界のネットワークやまほネットの閲覧まで可能。

処理速度やデータ容量はスーパーコンピュータ並であり、さらに操作補助用の簡易進化AIまで搭載されているという世界中の技術者が卒倒するような代物だ。

ちなみに俺とジェイル教授の共同開発である。ハードをジェイル教授が作り、俺がソフトのプログラミングを手掛けた。

「何だこれは？」

「これはね・・・・・・・・・・・・・・・・っていう物だよ」

いちいち説明するのは面倒なので文面では割愛。

「連絡手段が出来るのは確かにありがたいがな・・・・私は機械が苦手なんだ」

「ああ、それは大丈夫」

悲しそうな顔をしたエヴァにそう言った俺は、エヴァの額と俺の額をピタリと合わせて呪文を唱える。

使うのは、術者の記憶の一部を対象の脳にコピーする“記憶複写魔法”。

今回、俺はスペックや操作方法、隠し機能や裏コードといった物を纏めてエヴァの脳に書き込んだのである。

この方法なら機械が苦手な人でも機械を扱えるようになる。まあ、ある程度の慣れという物は必要だけどね。

「ゴメンね、勝手に脳へ書き込んだじゃって・・・」

「いや、構わん。おかげでこのアイテムの使用方法が手に取るように分かるようになったからな」

早速メールアドレスと電話番号を交換し、お試しコールと空メールを送って不備が無いかチェック。

エラー等が無いことを確認してからポケットに押し込んだ。

それらが終わり、再びとりとめのない会話を続ける。

だが、それも長くは続けられなかった。

警戒のために酒場の外へ放出してあった念動力の力場に、明らかな敵意を持った者たちが次々と引っかかったのだ。

親父たちやエヴァみたいな歴戦の猛者はすぐに気が付いたようで、すでにそれぞれの得物を構えて戦闘態勢に入っている。

流石、親父。さっきまでは青い顔してウンウン唸ってたくせに、スイッチが切り替わったかのように戦闘へ臨む様はまさに英雄と呼ばれるに相応しい。

エヴァと顔を見合わせ、頷く。

「アウラ」

「うん、外に招かれざるお客さんだね。数は……25だ」

エヴァはラカン、親父、詠春さんといった優秀な前衛がいるから自身の人形は不必要だと判断したようで、すでに呪文の詠唱に入っている。

母ちゃんは中衛、エヴァとアルさんは後衛、親父・詠春さん・ラカンは前衛。

渋い捜査官殿とその弟子はすでに戦闘不能。そして我が姉は戦闘技術の有してはいない。

どうする？と視線で母ちゃんに聞くと、小さいジェスチャーで酔いつぶれた二人と姉ちゃんを保護して逃げろと合図してきた。

了解、とジェスチャーを返して俺はダウンしている二人を引っ掴み、とりあえずふと思い付いた日本の麻帆良学園に座標を合わせて影へと放り込む。

そして、こちらをジッと見ている姉ちゃんの手を掴んだ瞬間に気が付いた。

姉ちゃん、魔法無効化能力を制御出来てないんじゃないかなかったっけ？

つまり、俺の影を用いたゲートには入れないということになる。

イコール、魔法による脱出は不可。敵陣を破って脱出しなければならぬ。

姉ちゃんの手を掴んだまま母ちゃんの方角を見る。

母ちゃんも“しまったな”というような表情で頭に手をやっているが……どうするか。

途方に暮れていると、親父が酒場の外を睨みつけながら言った。

「アウラ、俺が敵の第一陣ごと“雷の暴風”で吹っ飛ばす。その隙にアスナを連れて逃げろ。ジャック、詠春、二人に意識が向かないように援護してくれ」

「おうよ。俺様に任せとけ」

「了解だ。せいぜい派手にやるとしよう」

親父の声に答えた前衛の二人は、闘気を高めて敵に備える。

母ちゃんは不測の一撃に備えて王家の魔力を両手に溜めているし、アルさんとエヴァはすでに魔法を完成させて遅延魔法でその場に留めていた。

親父も呪文詠唱を始め、周囲は完全に戦場のそれへと様変わり。ピリピリとした空気が辺りを満たす。

敵の存在を感じてから数分が経っているが、未だに敵の動きはない。

中の声が止んだことで、少なくとも敵は自分たちが発見されたことを悟っているはず。

なら何故仕掛けてこない？何かを狙っているのか？

クイクイツ・・・

「うん？どうかした？姉ちゃん」

「・・・・・・・・・・何かくるよ、アウラ」

「何だって?」

俺の袖を引いた姉ちゃん言葉で、即座に念動力を大放出。索敵範囲を広げて情報を把握していく。

すると、陣を張った敵の後ろの方で大きな魔力の揺らぎを見つけた。

何かを引き出すような感覚。これは多分、何かを召喚するつもりであろう。

そして、ズルツという這い出るような感覚と濃い瘴気を探知。連中、どうやら魔界から悪魔を召喚したようだ。

禍々しい気配とデカイ魔力反応で親父たちも気が付いたらしい。

「親父、連中が悪魔を召喚したぞ。数は・・・4だ。侯爵級が3、王侯級が1」

親父にそう伝えると、親父は苦い表情を浮かべる。

「王侯級が居やがるのか・・・少し厄介だな」

「ナギ、貴方とジャックで王侯級の相手をお願いします。侯爵級は私たちが引き受けましょう」

アルさんの提案に親父は頷く。

即座に陣形が組み替えられ、先ほどの迎撃特化型陣形ではなく防御特化型陣形へと変わった。

陣の中央に母ちゃんを据えるのは変わらないが、前衛が親父とラカ、中衛にエヴァが入り、後衛にはアルさんと詠春さん。

全方位からの攻撃に柔軟に対応できる陣形。このメンバーがやるのだから、さぞかし防御力は高いだろう。

その陣の中央、母ちゃんの隣で俺と姉ちゃんは立っているが・・・どう脱出したものかな。

考える俺を尻目に、親父の決断は早かった。

「状況が変わった。アウラ、アスナを連れて北へ向かえ。俺達は出来るだけ南に敵を引きつける。出来るだけ早く遠くへ逃げるんだ」

「了解」

しかと承った。可及的速やかに（A S A P）戦場を離脱せよ、という事だな。

「よし、敵とのエンゲージと同時に行動開始だ。お前ら、頼んだぞ
！！」

親父の号令に、メンバーが力強い返事を返した。

皆、普段の碎けた表情は露ほどにも見せずに真剣な表情をしている。

なんていうか・・・物凄くカッコいいぞ。

キュッと痛くならない程度に姉ちゃんの手を握る。

プニプニと柔らかな姉ちゃんの手を放さないようにとしっかり繋ぎ止め、来る敵との交戦へ備えた。

襲撃まで――――

「・・・・・・」

――――あと三十秒。

第三十一話（後書き）

紅き翼、そして姉との出会い。

その出会いとさほど時を置かずして敵が迫り来る。

敵は強大で、味方も強大。

果たして、アウラとアスナは逃げ切れるのだろうか。

ちょっと次回予告っぽいものをやってみたりして。

第三十二話（前書き）

本日、投稿。

そろそろgdgdさせたほうが良いのかな・・・それとも書き進めるか。

まあ、がんばって続けますが。

第三十二話

「来たぞ・・ナギ！」

「アウラ、準備しろ」

「OK」

漆黒の闇夜に紛れるようにして接近してくる複数の魔力。

その内の4つは飛びぬけて大きく、その4つの内さらに1つは他の追隨を許さないほど強大だった。

ただし、それらはひどく禍々しく、とても気持ちが悪い気配だ。

——— 悪魔

そう呼称される、魔界の住人。

人ならざる姿と桁外れの力を持ち、召喚した者との一時的な契約の下にその力を振るう存在。

一般的な魔法使いより遙かに強く、その中でも“爵位”を持った悪魔は本国A Aランク以上の魔法使いに相当するほどの力を秘めている。

さらに、その“爵位”を持った悪魔の中で“王侯級”は最強の連中だ。

歴史上、数体しか確認されておらず、その存在は神にも匹敵する。

本国S A級の魔法使いでもまず勝てない。ラカンや親父くらいの強さを持った存在が複数で戦わない限りは無理だ。

そんな奴らが敵に居る。だが、状況としてはこちらが断然有利。

親父、ラカン、詠春さん、アルさん。

いずれもが魔法世界最強の一角を担う至高の英雄たち。

しかも母ちゃんとエヴァまで居る。

いかに王侯級の悪魔といえど、このメンツには敵わないだろう。

空気が張り詰めていく。

「・・・」

その時ふと敵の行軍が止まり、一瞬の静寂が訪れる。

そして――――

「来るぞ!! 全員、防御するのじゃ!!」

ズドドドドドオオオオオ!!!!

夥しい数の“魔法の射手”が壁を突き抜けて飛来した。

母ちゃんの掛け声で防御した皆は、当然無傷。

俺も自分と姉ちゃんを障壁で守り、爆炎が渦巻く中で目をこらした。

見えたのは佇む異形が4つと、人間が20人。

「5人足りない？」

恐らく別動隊として伏せているのだろう。

人払い、認識障害、情報統一、作戦指示。別動隊の仕事はいくらだ
つてあるわけだし。

バチバチと雷光が輝き、一点へと魔力が集中。

そして集中した一点……振り下ろされた親父の腕から魔法が
放たれる。

「“雷の暴風”……!!」

渦巻きながら敵陣を切り裂いた雷が、敵を幾人か巻き添えにして彼方へと突き抜けていく。

その魔法が通り過ぎた後、そこには確かな一筋の道が出来上がっていた。

「アウラ！行けえ！！」

「了解！ちょっとゴメンよ、姉ちゃん」

「・・・・・・・・・・わー」

親父の怒声を受け、姉ちゃんを横抱きにして一気に飛び出す。

念動力で空気抵抗を無くして駆け抜け、飛び交う魔法を細かいステップで避けながら突き進む。

まあ、途中で掠った“雷の暴風”は、親父が撃った物じゃないと思

いたいが。

イスタンブールの町を駆け抜けていく。

吐く息は真っ白で、気温が低いことを感じさせるが俺に気温は関係ないし、姉ちゃんはしっかりと念動力で保護済みだ。

「ちっっ・っ追いかけてきてるか」

思わず舌打ちをする。別動隊の5人に見つかってしまったらしく、放出した念動力の索敵網に5人の敵がヒットした。

いずれも身体強化魔法で身体を強化し、俺の逃走スピードにしっかりと喰らい付いて来ている。

凄いな・・・一応は時速100kmくらいで走ってるんだけど。

出来るだけ人混みを避け、裏路地や屋根の上を通り抜ける。

夜とはいえ、イスタンブールは巨大な観光地。故に昼夜を問わずして人が出歩く。

魔法とは関係ない人が大多数を占める中に俺達が飛びこめば、追手はあきらめるかも知れない。だが、万が一ということもある。

「・・・おっと」

後方から飛来した魔法の射手をサイドステップでかわし、避け切れなかった分は念動力でガード。

念動力の力場と魔法の激突で生まれた軽い爆風に身を委ね、その勢いのままに今まで走っていたマンションの屋上から下を走る自動車道へとダイヴ。

落下速度を減退させて信号機の上に飛び乗り、思いっきり跳躍して自動車道を飛び越えて向かい側にあった裏路地の入口へ着地。

そのまま裏路地を駆け抜け、途中にあったゴミ集積所のカバーを足場にして再びジャンプ。

屋根の上に戻った俺は、そのまま北を目指して逃げ続けた。

「しつこいな……」

逃走開始から、かれこれ2時間。

時刻はすでに深夜を回った。

追手は未だに追いかけて来ている。

一応、見せしめに追手の1人を潰したが追跡を止める気配はなかった。

いい加減ウザい。

まあ俺は良いとして、姉ちゃんが心配だ。

衝撃の緩和や寒暖の調節などで姉ちゃんに負担がかからないようにしてるつもりだが・・・大丈夫かね？

姉ちゃんを見てみると、姉ちゃんは流れる景色を楽しそうに見ている。

一応、追手から逃走中なんだが・・・度胸があるというか暢気というか。

「姉ちゃん、大丈夫？」

「・・・・・・・・・・楽しい」

ニコツと笑う姉ちゃん。

ま、楽しいならそれで結構だけどね。

ストリートを睨みつけるように監視している警官の前を通り、すぐ脇にあったマンションの非常階段を使って最上階へ駆け上がる。

途中、階段の踊り場で魔法による狙撃を受けたが軽々と防御。

そして、屋上から一気に飛び降り、落下途中で念動力の壁を蹴って方向転換。

数百メートル先にあった別のビルの非常階段へと飛び移ってから下へと駆け降りた。

軽い認識障害をかけているから、俺と姉ちゃんは一般人に認識されていない。

ただし、認識障害は機械に通用しないため注意が必要。

監視カメラの類には映ってしまうので、別の魔法を行使する必要がある。

しかし、俺は念動力を使って俺や姉ちゃんにぶつかる光を捻じ曲げているため、魔法を使わずとも不可視モードなのだ。

故にこれほどまでに高機動かつ自由に逃走出来てるわけ。

だが、このステルスモードな俺たちを敵は感知して追いかけて来ている。

追跡魔法でも使っているのか、それとも全く別の方法で俺たちを認識しているのか……まあ、今はそんな事どうでもいいか。

走りながら思考する。

さて、これからどうしよう。

親父たちの戦闘が終了すれば、恐らくエヴァがデバイスを使って連絡してきてくれるだろう。

それまでどこか安全な場所で隠れているのがベストだが、良い隠れ場所の候補が今一つ思い付かない。

ここはイスタンプール。俺にとっては初めて訪れた地で、土地勘が無い完全アウエー。

当然、隠れるのに最適な場所など知っているはずも無い。

かといって闇雲に逃げ回るのは体力の無駄遣い。敵地においてもっとも避けるべきことだ。

しかし、現状では逃げることしかできないわけで……。

無論、交戦して殲滅した方が手っ取り早い。最長なら30秒、最短なら1秒足らずで殲滅出来る自信がある。

だが、姉ちゃんに血を見せたくない。俺が人を殺す瞬間を見せたくない。

だってそうだろ？そんなことして姉ちゃんに嫌われでもしてみろ。軽く死ねるわ。

「どうするか」

「・・・・・・・・・・どうしたの？」

おっと、口に出ちまったか。

「どこに逃げようかと思って」

「・・・・・・・・・・自分の家に逃げれば？」

「いや、自分の家はアリアドネー・・・・・・・・ん？」

姉ちゃんの言葉にふと思い付く。

このまま姉ちゃんを念動力でコーティングして、一緒に空間跳躍すれば良いのでは？

「その手があった・・・」

即座に危険性を診断。並列思考を使ってその際のあらゆる危険を考
えてみる。

「・・・・・・・・・・？」

不思議そうな表情の姉ちゃんを見ながらもシミュレート。

念動力を使えば有害な一切は完全にシャットアウト可能。包みこめば内部に何の影響も出さないだろう。

跳躍先は、ウエルキンズ魔法学校学生寮303号室。ちなみに俺の部屋。

そこまで行けば敵は皆無。中立国であるアリアドネーなら敵の侵入はあっても襲撃はあり得ないだろうから。

だが、長距離の空間跳躍には準備に一定の時間を要する。

旧世界から魔法世界への“世界跳躍”にもなれば、最低でも数分の時間がかかる。

空間を固定し、座標を決め、別次元からのアプローチによって現在地点から目標地点までの最短の経路を算出。

その算出された経路を元に念動力を一点に集中させて空間を歪め、ワームホールを開いて通路を穿つ。

そして、そこを通り抜けることで空間跳躍を果たすわけだが・・・この一連の工程に時間をかけなければならない。

少しでも手を抜けば、ミスして別の知らない世界へ滑り落ちてしまふかもしれないのだ。

時間稼ぎをしなきゃならないな・・・どうするか？

しばらく考え・・・るまでも無く思い付いた。

普通に“空虚な男”カンパニーマンを使えば良いじゃないか。

目標決定。行動開始っと。

「姉ちゃん」

「・・・・・・・・何？」

「ちょっと目を瞑っててくれる？」

「・・・・・・・・ん」

俺の言ったとおりにキュッと目を瞑った姉ちゃん。

俺は高密度の念動力で姉ちゃんを優しく包み、空間を捻じ曲げてリアドネーの自室へと通路を繋げ始める。

それと同時にカンパニーマンを4人ほど生成。迫りくる追手に向けて差し向けた。

そのままカンパニーマンたちは追手と交戦を開始。それにより追手の足が完全に止まる。

「良し・・・・・・・・」

その隙に俺はいつも以上に時間をかけ、丁寧に空間を穿つ。

穿った孔を広げ、念動力で補強して固定。

コレで良い。後はこの孔を通るだけ。

だが、その前に……。

俺は無言で虚空へと手を伸ばし、指を鳴らした。

パチッ!!

その音が響き、同時にグシャリという感触が念動力を伝って俺の元へと届く。

「……」

カンパニーマンを使って追手4人を圧殺したのだ。

残しておいたら親父たちと交戦している連中に合流するだろうからな。多少なりとも敵戦力は減らしておくほうが望ましいだろう。

・・・というか最初からこうしておけば良かったな。逃走しながらカンパニーマンを使って仕留めておけば逃走時間を少なくできたのに・・・。

ま、いまさらそれを思ったところで後の祭りってやつだ。今は早く安全地帯へと退避する事しよう。

穿たれた孔を使って一気に空間を跳躍。自室の床へと降り立って孔を消す。

跳躍までにかかった時間はほんの数分ほど。

2時間以上も逃げ回っていた俺が馬鹿みたいだぜ。

「ん、もう目を開けても良いよ」

そう言いながら腕の中の姉ちゃんを揺すって目を開けさせる。

すると、いきなり変わった景色に姉ちゃんは目を白黒させた。

何の問題も無いとは思うが、念のため姉ちゃんを問診。

空間跳躍の影響が出てなければいいんだが……。

「姉ちゃん、どこか痛いところはない？」

「………無い」

「変わったところは？」

「………景色が変わった」

「問題。159753×456852は？」

「・・・・・・・・72983477556」

答えられるのかよ。

ゴホン・・まあ、空間跳躍の影響は何も出なかったみたいで何よりだ。

とりあえず俺は抱いていた姉ちゃんをベッドに降ろし、紅茶を淹れる準備をし始める。

俺の部屋には誰かしらが良く来るので来客をもてなすためのティーセットが完備してあるのだ。

リーフは上質、お湯も適温、カップもほんのり温めてある。

お茶請けには俺手製のクッキーと買い置きのキャンディー。

紅茶にはミルクキャンディーが実に合う。俺的には最強の組み合わせの一つだと思ってる。

「姉ちゃ・・・って、あらら」

一連の作業を終えてベッドの方を向くと、姉ちゃんはベッドの上で丸くなって眠ってしまっていた。

気楽にしているように見えて、やはり気疲れしていたのだろう。

無理も無い。数時間とはいえ戦場の空気に触れていたのだから。

「・・・・・・・・お疲れ様」

クシヤリと姉ちゃんの頭を一撫で。

寝苦しいと思うので、姉ちゃんが着ていた厚手のコートを脱がせて畳み、枕元に置く。

ついでに正しい体勢に直してあげてから毛布と布団をかけた。

「お休み、姉ちゃん」

そう呟いた俺は、淹れたての紅茶とお茶請けを片づけるのだった。

窓の外を見ると、分厚い灰色の雲から雪が降っていた。

ここに着いたのが午後6時。あれから3時間が経ち、現在の時刻は午後9時を過ぎているが未だに何の連絡も無い。

あのデバイスは核爆発にも耐えられる上に魔法世界と旧世界との間でも使うことは可能。

故に電波障害や故障とは考えにくい。

では、まだ戦闘が続いている？そんなバカな。フル装備の精鋭兵士が三個師団くらい攻めて来ても30分ほどで返り討ちにするような

メンツだぞ？

まあ、王侯級の悪魔は強いから梃子搦っているのかも知れんけど・・。

気になるがこちらから連絡はとらない。

もし本当に戦闘中だった場合、俺からのコールに気を取られて隙が出来てしまうかもしれないからだ。

「・・・・・・・・」

ジリジリと時間だけが過ぎてゆく。

今の俺には何もやる事が無いのは事実。だけど、何かをしていなければ不安で仕方が無い。

だが、こういう時に限って何もすることが思い付かない。全く・・・何という皮肉か。

ベッドでスヤスヤと眠る姉ちゃんの傍らに腰掛けながら、俺はデバイスをギュッと握りしめた。

「む・・・・・」

いつの間にか座ったまま眠ってしまっていたらしい。

長時間同じ体勢で寝ていたため、動かした身体の節々がポキポキと異音を立てている。

ふと窓にかかるカーテンの隙間から空が白み始めているのが見えた。

「……………っそうだ！連絡は・・・」

慌ててデバイスを取り出すと、メールが一件届いていた。

急いで操作し、メールを開く。

送信者は・・・エヴァだ。

――
TO…エヴァ

Title…話がある

アスナと無事に逃げきれたか？怪我とかはしていないか？

安心しろ。私たちは無事だ。

だがアウラ、お前の両親について話がある。

焦らずゆっくりで構わないから、近日中にアスナを連れて日本の京都にある詠春の家に来てほしい。

場所はアスナが知っていると思う。もし、道に迷ったらデバイスの

マップアプリを使って来ると良い。

——END——

メールの本文を読むにつれ、眠気が軽々と吹っ飛んでいった。

皆が無事なのは安心したが・・・親父と母ちゃんについての話？

電話やメールで伝えてこない所を見ると、かなり重要な話に違いない。

例えば・・・いや、変な憶測をするのはやめておこう。

事のあらましはエヴァが余さず教えてくれるだろうから。

デバイスの世界時刻アプリでアリアドネーと日本の時刻を確認。

アリアドネーは現在午前5時。日本は午前7時。

旧世界とゲートを通して繋がっている魔法世界との間には、当然の如く時差というものが存在する。

計算方法はややこしいから言わないが、日本と魔法世界の時差はおおよそ2時間だ。

まだ朝も早いので、今から来訪するのは失礼に当たるな・・・。

こんな早朝に姉ちゃんを起こすのも忍びないし・・・。

チラリと後ろを見ると、穏やかな表情でスヤスヤと眠る姉ちゃんが見えた。

そして、ふと今日がクリスマスだということを思い出す。

「・・・・・・・・・・うむ」

よし、決定。

「色々してから行くか」

どんな話が待ち受けているにせよ、ゆっくりとリラックスして心の休息を取ることは大切な事だ。

そう思った俺は、まず朝食の用意に入る。

何故って？俺はご飯を食べなくても大丈夫だが、姉ちゃんを空腹にするわけにはいかないだろ？

部屋に備え付けの冷蔵庫を開けて中身を確認。その後に影から調理道具とIHクッキングヒーターを出してクッキングを開始。

防火の観点から寮の自室での魔法行使と調理は固く禁じられているんだが・・・俺には関係ない。

俺の魔力コントロールは完璧だし、IHクッキングヒーターなら火は出ないからコンロより遙かに安全だしな。

メニューは・・・ベーコンエッグとサラダ、ヨーグルトに牛乳、トーストとジャム各種で良いだろう。

一時間も経たずに料理は完成。

料理している途中で姉ちゃんが目覚めたので、軽く手伝ってもらって手早く仕上げた。

そして二人して少し早い朝食。

元々良く喋る性質ではない俺と姉ちゃんの朝食風景は静かなものだ。

カチャカチャという陶器と金属が触れる小さな音が響く。

俺も姉ちゃんも一応は王族という超上流階級の人間。

小さいころから食事のマナーを仕込まれているから、食べている姿は綺麗だと自分でも思う。

ただ、普通と違うところは食事中でも会話をすることである。

マナーを守って綺麗に食べていけば会話くらいは良いだろう、というのが我が母ちゃんの考え。

会話もせずに黙々と食事をするのは、母ちゃんの実体験からして寂しくつまらないものだったそう。

だから、我がスプリングフィールド家では普通に食事中でも喋る。

親父も以前は粗野な食べ方をしていたらしいが、母ちゃんの教育的指導によって改善されたとか。

まあ、食事中の会話と言っても、口の中に物を入れたまま喋るのは御法度だったけどね。

「姉ちゃん、今日の夕方から日本に出かけるよ」

ゴクリと牛乳を一口飲み、姉ちゃんにそう告げると姉ちゃんは首をかしげた。

「・・・・・・・・日本？」

あれ？日本を知らない？

原作では・・・・終戦後に詠春さんの家へ訪れているはずだが。

「そう、日本。確か、姉ちゃんは詠春さんの家に行ったことあるよね？」

「・・・・・・・・ある」

しばらく思案した後、ポンと手を打つ姉ちゃん。

俺の言葉で、姉ちゃんはようやく思い出したようだ。

「あれは日本の京都っていう街にあるんだけど・・・・今日はその詠春さんの家に行くんだ」

「・・・・・・・・詠春の？」

「うん。親父たちについての話をしたいってエヴァが」

「・・・・・・・・そう」

親父たちのことと聞いて、若干表情が曇った姉ちゃん。

やはり心配なのだろう。かくいう俺も心配だが・・・そんな顔は出来ない。

姉ちゃんが不安がっている時、弟の俺まで不安がってどうする？二人とも不安になってみたところで状況は変わらない。

なら、不安がらずに堂々としているのが弟たる俺の努め。

・・・ん？こんな感じのセリフを前にも言ったことがあるような？

「で、何で夕方に行くかって言うと・・・なあ、姉ちゃん」

「・・・何？」

「夕方までさ、俺と・・・デートしない？」

その言葉にキョトンとした姉ちゃん。まあ、普通はそうだよな。

「今日はクリスマスだ。折角アリアドネーまで来たなら、楽しんでいっても問題無いでしょ？」

ささやかだが、これで姉ちゃんの不安がわずかでも消えてくれれば良いなと思う。

アリアドネーのクリスマスは有名だ。

元々、魔法世界にはクリスマスを祝うという風習はない。

なぜなら、魔法世界に関係ないからである。

当然だろう。魔法世界でイエス・キリストを知っているのはメガロメセンブリーナの住人だけだろうから。

だが知識欲の塊と言っても過言ではないアリアドネーの学者たちは古今東西世界問わずで知識を吸収し、その過程で知った面白そうだと思われるイベントや風習を積極的に取り入れることで良好な治安維持と安定した政治を行ってきた。

だからアリアドネーでは役所の職員や学校の教師たちが色とりどりで大小様々な飾りを学園都市中へ綺麗に飾り付け、色々な学校の生徒達があちらこちらで自ら店を開き、熱いクリスマスセールを繰り広げて華やかさの演出に一役買っているのだ。

特に中央エリアの官庁街は、メインストリートのだ真ん中へ10mほどの間隔で巨大なクリスマスツリーが立てられ、その下を歩行者天国として開放。普段のお堅いイメージを払拭するかのような賑わいを見せている。

ツリーが一斉にライトアップされる様はまさに圧巻。俺も最初に訪れた時は思わず目を見張った。

「確かに親父たちの事は心配だが・・・心配し続けてたら疲れちゃうでしょ？だからここらで一緒に休憩しないか？ってことだけど・・・どう？」

これは本心。

死線を何度か踏み越えたことがある俺ならともかく、姉ちゃんは戦場から離脱してまだ数時間しか経っていない。

睡眠や食事は摂ったものの、それらで軽減される恐怖や不安というのは微々たるものだ。

だから、一時的にでも他のことに関心を向けてあげることでも無理やりにリラックスさせようと言うのが俺の考え。

姉ちゃんは大丈夫と言い張るだろうし、事実本当に大丈夫なのかもしれない。

だが、それならそれで構わない。俺と姉ちゃんは家族だ。家族と一緒にクリスマスを過ごしたって誰にも怒られたりはしないだろう。

「・・・・・・・・ん」

俺の目をじっくり眺めた後、コクリと頷いた姉ちゃん。

よしよし。これで断られてたらへこんでたかもしれない。

「じゃ、食べ終わって一休みしたら行こうか」

「・・・・・・・・了解」

その会話以降は大した会話も無く食事が進む。

だが、その静かさの中にも姉ちゃんの楽しそうな雰囲気^{雰囲気}がジンワリと滲み出ていた。

第三十二話（後書き）

魔法世界と旧世界との時差は数日あると思われませんが、本作では2時間としています。

なぜなら……まあ、色々あるからです。後に判明するとは思いますが。

また、クリスマス云々の話も創作です。

次回もお楽しみに……。

第三十三話（前書き）

ようやく投稿・・・。

書くって難しいなあ・・・楽しいけど。

第三十三話

現在、午後5時。場所はウェルキンズ魔法学校生徒寮の自室。

姉ちゃんと一緒にアリアドネーのクリスマスを堪能した俺は、姉ちゃんを伴って寮の自室へと帰ってきていた。

だが、またすぐに外出予定。これから本日のメインディッシュ・エヴァとの対話である。

買った物全てを影に収め、空間を歪めて魔法世界から旧世界へ、アリアドネーから京都へと通ずる経路を穿つ。

「さ、姉ちゃん。そろそろ行くよ」

「・・・・・・・・・・わかった」

コクリと頷いた姉ちゃんを横抱きにして抱き上げ、念動力で包み込んで保護。

そのまま経路へ飛び込み、一気に空間を跳躍する。

次の瞬間、ストツという軽い音と共に俺の足は京都の地を踏んでいた。

「はい、到着」

抱いていた姉ちゃんを降ろし、念動力の守りを解除。ついでに通つて来たワームホールを閉じて消滅させる。

デバイスを取り出して見ると、すでに時差が自動修正されて日本の時刻を表示していた。

時刻は現在、午後7時。冬なので日暮れが早く、すでに太陽は地平の彼方へ沈んでしまっている。

だが、京都の町並みは明るく輝いて闇夜を照らし、人通りは昼間のそれと全く変わらない様だった。

「さて・・・現在地は京都駅か」

いいね、京都駅。何といってもあの階段が素晴らしい。ビバ階段！
といったところだな。

「で、姉ちゃん。ここからどうやって行くの？」

「・・・・・・・・多分こっち？」

「いや、俺に聞かれても・・・・」

俺の質問に疑問形で返した姉ちゃん。まあ、場所を忘れたのだろう
けどさ。

仕方ないのでデバイスでまほネットにアクセス。そして「旧世界」
「日本」「関西呪術教会」「総本山」「場所」というキーワードで
検索エンジンにかけてみた。

すると・・・

「なんでやねん」

——古の都へようこそ！ 関西呪術協会——

関西呪術教会の公式ホームページがヒットした。

あるのか、公式ホームページ。

しかも、レイアウトやらに結構気を使っているらしく、かなり質が高いし。

思わず眉間を抑えた俺は、デバイスを操作して公式HPから地図をスキャンしてマップアプリへ入力。

次にGPS機能を使って自分の位置を精密測定。

最後に京都の地図に先ほどダウンロードした地図と位置情報を連動させれば完了だ。

実行されたマップアプリに表示された京都の一点。そこに光が点る。

つまりこれが、現在の俺の居る正確な場所。まあ、普通に京都駅な
んだけど。

目的地までは・・・おおよそ1時間といったところか。

目的地は？^{カガビコ} 毘古神社。

？ 毘古とは火の神であるカグツチのこと。つまり、そのカグツチを
祭った神社である。もちろん、表向きは。いや、本当に祭っている
のかもしれないけど。

この神社こそが関西呪術教会の総本山にして、詠春さんの住んでい
る家。

嵯峨野と嵐山のちょうど中間あたりにある山の中腹を丸ごと削り取
って出来た場所に建立された神社で、格式高く歴史もある。

隣接している池に大鬼神が封印されていたり、様々な場所に古の昔か

ら伝わる陰陽の秘術書や呪具なんかがたくさん眠っていたりするところ。中々楽しそうな場所なのだ。

ただし、そこに行くまでが大変。

山の麓から中腹辺りまで繁茂している竹林を貫くようにして造られた参道を通らなければならないんだが・・・これが長い。

参道の内訳を表すなら・・・階段6割・通路3割・休憩所1割ってところか。

休憩所をわざわざ設けるくらいだ。その長さが想像出来るだろう？

しかも、魔法による飛行& a m p ; 転移は禁止。理由は、本山全てを包み込むようにして展開された防御結界に弾かれるからだそうだ。

つまり、純粹に徒歩で登ってこいというわけ。無論、身体能力強化系魔法も禁止。

なんて面倒な・・・まあ、俺には関係ないか。姉ちゃんが疲れちゃったら背負えば良いしな。

現在はず変わらず京都駅前。ちなみに北口。

目的地への移動手段は結構ある。

徒歩、タクシー、バス、レンタカー、電車でも行けたりする。

目的地の麓まで空間転移をするというのも有りだが、折角の京都だ。町並みを眺めたいじゃないか。

だが、バスじゃ一定のルートしか通らないし、タクシーじゃ料金が高いし、電車じゃ眺める暇も無くすぐに着いてしまう。徒歩？疲れただけだ。

うむ、レンタカーにしよう。幸い、俺は車を動かせる。

実は俺、この世の大抵の乗り物を完璧に運転可能なのだ。

何故かって？俺にはスキル“騎乗B”があるからさ。

魔獣や幻獣、神獣や龍種を乗り回すことは出来ないが、この世にある機械仕掛けの乗り物や上記以外の生き物なら直感的に乗りこなせるわけ。

自転車や三輪車、自動車、クルーザー、電車、戦闘機、潜水艦、戦車にスペースシャトル。機械であれば何でもござれ。

そのかわり、生き物に乗る際は・・・まあ、馬とかが限界点だろうな。

ただし、それはスキルに頼った場合。実力で屈服させ、馴らし、馴致させた生き物なら例え龍種であろうとも乗りこなせる・・・はず。

駅前を少し歩きながら、キョロキョロと辺りを見回す。

目的はレンタカーショップ。観光地なら普通は駅前に大抵あるんだけど。

「・・・・・・・・お、あった」

観光地だが景観を重要視する京都だから、レンタカーショップは少ないと思ったが・・・比較的早く見つかったんで一安心。

外見が子供では貸してはくれないので、幻術を解いて大人の姿に戻る。

認識阻害魔法が常駐で稼働しているため、傍らに居る姉ちゃん以外は俺の姿が変わったことに全然気がつかない。

ふと横を見ると、姉ちゃんが驚いたような表情を浮かべている。

あれ？この姿を見せたこと無かったっけ？

・・・・・・・・無いな。ファーストコンタクトから逃走、デートの時も子供モードだったわ。

この姿を晒したのは拙かったかもしれない。しかし・・・・・・・・ま、姉ちゃんなら別に話しても良いか。

「あゝ、姉ちゃん。詳しくは車の中で話すけど・・・これが俺の真の姿なんだ」

「・・・・・・・・？」

チリンと音を立てながら首をかしげる姉ちゃん。まあ、普通は理解できないな。

「後で話すよ。今から車借りてくるけど・・・一緒に来る？」

「・・・・・・・・ん」

頷いた姉ちゃんを連れてレンタカーショップへ。

車を借りるには免許証と印鑑と金が必要。

印鑑はサインで代用可能なので、実質的に必要なのは金と免許証だ。

金はある。免許証も、もちろんある。

実は、“空虚な男”^{カンパニーマン}を派遣して日本国の自動車運転免許を正式に取得してあるのだ。

ちなみに日本国籍の取得や戸籍なども何とか用意した。主に軽い洗脳と脅迫によるゴリ押しで。

とりあえずは一定以上の権力があって後ろ暗いことをしている、企業のボスや政治家の人をお願い（・・・）しただけなんだけどね。

幻術を使って外見を俺に似せたカンパニーマンで超遠隔操作による自動車運転免許の取得。

中々上手いことを考えたと思ったが・・・今冷静に考えれば相当アホらしくて危険な事をしたもんだ。

ちよつとでもミスすれば大事故に繋がってたかもしれないからなあ。

ま、とりあえずはレンタカーを借りるのには何の支障も無いというわけ。

手続きを済ませ、3日ほど車をレンタルすることに。

借りたのは、ホンダのアコードワゴン。俺と姉ちゃんしか乗らないから、そこまで大きい車を借りる必要はなかったんだが、姉ちゃんの希望でこの車になった。

理由？なんかカッコいいかららしいよ。

デバイスをスピードメーターの所へ立て掛け、キーを回してエンジンに点火。

自分と姉ちゃんへシートベルトを装着し、デバイスの音声道案内機能をオンにして公道へと滑り出す。

京都市内を車で走りながら、見える寺社仏閣の解説を姉ちゃんに上げてあげる。

気分は運転手兼添乗員。俺、生前から京都が好きだったから結構詳しいんだよね。

行ったこと無いんだけどさ、京都。

如くせん身体が自由が失われてたから、想像力だけは豊かだったんだ。空想で海外旅行とかしたことあるしな。結構楽しいよ？アレ。

そうしてしばらく楽しんだ後、俺はついにあの話を切り出した。

「えーと、なあ姉ちゃん。京都駅でさ、俺の真の姿とか言ってたでしょ？」

「・・・ん」

「ちょっと長くなるけど話すよ」

約束通り、俺の身体について話す。

と言っても、ダイオラマ魔法球というアイテムを多用したせいで公式年齢とは比例していない身体になったから幻術で誤魔化していると言っただけだが。

“進化”の力は複雑すぎて説明しても今の姉ちゃんじゃ理解できないっぽいので割愛。

そのかわり、俺の固有能力である“念動力”のことは話す。

あとは・・・俺の強さか。

親父・・・ナギたちより多少弱いくらいだと伝えた。

まさか星を破壊できるほどの力を持ってるなんて言われてもちよつと想像がつかないと思うし。

何故か姉ちゃんがラカン強さ表の存在を知っていたので、9000くらいだよと言ったが・・・。

実際は・・・数十億くらい？そんなに無いか。

大地の使徒は大まかだが100000くらい。

ラカンや親父たちが12000付近で、カウンターガーディアンが10000から25000の間くらいか。

・・・カウンターガーディアンが居るのかはわからんけど。

ちなみに基準は氣も魔力も無い一般人らしい。

話し終えた後、姉ちゃんはしばらく沈黙した。

多分、理解するために俺の話を噛み砕いているんだろうが・・・聡明(?)な姉ちゃんならすぐに理解するだろう。

難しい顔をしてフリーズしている姉ちゃんを横目に見つつ、俺の運転は進む。

道は混雑しているが普通程度には流れているため、それほど運転が

苦ではない。

そして――――

「はい、到着」

到着予定時刻よりほんの少し早く目的地に到着したのだった。

此処から先は・・・長いなあ・・・。

第三十三話（後書き）

次回、エヴァ & a m p, 詠春との対話。

あとの事、両親の事、これからの事。

果たして二人の口からは何が語られるのであろうか。

次回もお楽しみに!!

第三十四話（前書き）

な、何とか11月中に投稿出来た・・・。

それではどうぞ

第三十四話

「ようこそ、関西呪術教会本部へ。お手数をお掛けしましたね」

「いえ、お招きいただきありがとうございます」

詠春さんの歓迎の言葉に、正座しながら頭を下げて礼を言う俺。

傍らで姉ちゃんが俺のまねをして頭を下げている。

今座っている場所は詠春さんの私室。神社の一角に設けられたそれなりの広さを持つ部屋。

ここには俺、姉ちゃん、エヴァに詠春さん、そして何故かアルさんも居たりする。

駐車場に車を止めた俺たちは、長い階段に辟易しながらも何とかゴ

ールである山門へと辿り着く。

山門で警備に当たっていた警備員（帯刀済み）に要件を告げ、詠春さんへと取り次いでもらったのだが・・・即座に境内へと招き入れられた。

どうやら事前に俺達が来訪する旨を伝達されていたらしい。まあ、考えてみれば当たり前のことなんだけどさ。

美人な巫女さんに案内され、着いたのが詠春さんの私室。

障子を開けてもらうと、中では詠春さん、アルさん、エヴァの三人が真剣な表情で会話していた。

三人は入室した俺たちを見るなり安堵の表情を浮かべたけど・・・何でだ？

ともかく俺たちの入室により三人の会話が途切れたため、とりあえず座って挨拶をしたところで冒頭へと話が戻る。

開口一番でアルさんが言った。

「良くぞご無事で・・・追手がそちらに向かっていたと知った時には、流石に怪我の3つや4つはあるものと覚悟していたのですが」

し、信用されてない・・・。なんだ、怪我の3つや4つって。

「身体強化魔法と認識障害魔法をフルに使って、何とか追手を撒いたんですよ」

「なるほど、そうでしたか」

ふむ、と軽く唸ったアルさん。細かいことを追求する気は・・・なさそうだな。

あまり深く突っ込んだ内容を訊かれると、俺の実年齢や強さとかがバレ兼ねないから気をつけなければ。

まあ、俺が高位の転移魔法を使えることを知っているだろうし、身体強化も認識障害もそれほど難しい魔法ではないから使いこなしてたとしてもさしたる問題はなからう。

別に念動力のことを知られてもそれほど支障はないから構わないんだが……切り札を切るタイミングは見極めなければなるまい。

テレキネシス
念動力とは、俺が切れる最大最強のジョーカーだ。

あらゆる存在がその発動を認知できず、認識外からノーモーションで必殺の一撃を与えることが可能な念動力は、対人戦でこそ真価を発揮する。

殺し合いをしたことがある人間は、その恐ろしさを一瞬で悟るだろう。

なんせ、対応のしようが無いのだから。

外からの圧力だけならまだしも、身体の中から爆砕されたら如何なる人でも一発アウトだ。

話を戻そう。

現状で念動力のことを知っているのは6人。

オウカ、ゴーズ、ミア、レオール、高音、姉ちゃん。この6人のみが俺の持つ異能を知っている。

折を見て親父や母ちゃんやエヴァにも教えようとは思うけど……。

「アスナもアウラも……本当に怪我をしてないか？確かに目立った外傷は無さそうだが」

持っていた扇子をパチリと閉じてエヴァが言った。

「うん、大丈夫。交戦自体してないし」

「そうか……。詠春、私はアスナと庭を散策しているぞ」

「ええ、よろしくお願いします」

何故かエヴァは姉ちゃんを連れて部屋を出て行ってしまった。話を聞かせなくても良いのか？

まあ、後で俺が噛み砕いた内容を教えれば済む話だけど。ただ、エヴァが今この場所でその話を姉ちゃんに聞かせたくなかった理由が気にかかるな・・・。

「さて、アウラ君。今から話すことは全て事実です。心して聞いてください」

詠春さんは、そう前置きを言うってから話し始める。

「まず、貴方達が撤退した後のことについてお話します。私たちは敵魔法使い20名と交戦し、これを殲滅しました」

襲撃してきた敵魔法使いは、強さも得意属性もバラバラな連中で、最も強いヤツでもせいぜい本国ランクでAAクラスしか無かったそうだ。

だが、こいつらが召喚した悪魔・・・これが強かった。

魔王サタン。それが呼び出された王侯級悪魔の正体だ。

本来サタンは地獄の最下層である“嘆きの河”コキユートスで氷漬けになっているはずなのだが、その凍りついた本体から魂の一部を限定召喚したらしい。

しかし、限定召喚とはいえその強さは他の悪魔の追随を許さないほど強大で強力だ。

故に“紅き翼”といえど討伐までかなりの時間を要したのだとか。

「驚きましたよ。たった数分の召喚儀式で、限定召喚とはいえ魔王を呼び出したのですから」

そう苦笑しながらアルさんが言う。

言っておくが、アルさんたち“紅き翼”だから“驚いた”程度で済んだんだぞ？

普通なら相対しただけで正気を失うっての。

知ってるか？神とか悪魔とかはその身から強力な波動を放ってるんだ。

“神々しい”とか“禍々しい”っていうのは、その波動を受けた人間の感想。

三流の神や悪魔でも人間に膝を折らせて跪かせるくらい容易いことだし、一流の神や悪魔ならその波動だけで人間を消滅させるくらい簡単に出来る。

その驚異的な波動を受けて生き残るには、その波動に負けないほどの波動を放つしか無い。

人の持つ波動……その正体は勇気や覚悟、愛や憎しみとか。

誰もが持つであろうそれらに“実力”という物が合わさると、それは波動へと変わるのだ。

その波動が相手の波動と同等かそれ以上になった時、初めて面と向って相対出来るようになる。

正直に言って“紅き翼”は色々と規格外が多すぎると思う。大きく力を制限されているとはいえ一級の悪魔を相手にして戦えるのだから。

ていうか、何で純魔法世界人のラカンが旧世界に出てこれるんだ。

気合？バカな。世界の法則を捻じ曲げるほどの気合ってなんだよ。

……いや、ラカンなら出来ても可笑しくないかもしれない。なんせ「すべては気合で何とかなる」とかい放つような人だ。

詠春さんの話が続く。

「侯爵級悪魔2体の方はエヴァンジェリンとアリカ姫の活躍もあってアッサリと決着が着きました。その後、未だに交戦中だったナギ達の援護に入ったのです」

魔王VS英雄パーティー。

まさに神話やゲームを彷彿とさせる戦いになったらしい。まあ、“英雄”と“勇者”は若干違うけれどさ。

無論、勝ったのは英雄パーティー。親父たちが負けるわけが無かった。

「ここまでがああ戦いの全てです」

そう締めくくった詠春さんは、用意されていたお茶を一口啜った。

うむう……結局親父たちはサタンに勝った。それは良い知らせだ。

だが、肝心の内容……親父たちについての内容が全く語られていない。

話を聞いた限りでは生死にかかわるようなヤバイ怪我はしていなさそうだが……。

しばらく考えていると、今度はアルさんが話しかけてきた。

「話は逸れますが、アウラ君は“造物主の掟”コードオブライフメイカーというマジックアイテムをご存知ですか？」

唐突だな・・・だが答えはYESだ。

「ええ。魔法世界における最強兵器・・・あれ、魔法世界のデバツグツールでしょう？」

“造物主の掟”コードオブライフメイカー。

火星儀が付いた大きな鍵状のマジックアイテムで、現存するマジックアイテム中最強の性能を誇る“兵器”だ。

その正体は、厳密には謎だが俺はデバッグツールのようなものだと考えている。

データを書き換えることで対象を消滅させたりすることが出来る機

能“リライト”、無条件で任意の場所へと集団転移することが出来る機能“リロケート”など、いずれも強力な力を持った夢のようなマジックアイテム。

実を言うと、俺はこのアイテムが欲しかったりする。

「っ!？その通りです。何故知っているのですか？あれは特A級の超機密事項のほずですが」

それは俺が一度死んだ人間だから……というわけではない。いや、それもあるけれども。

実は、アリアドネーに一本あるのだ。あの“造物主の掟”コードオブライフメイカーが。

現在アリアドネー中枢深部の特設ラボ内に厳重保管されており、選りすぐりの学者たちが日夜解析に励んでいる。

俺がそれを知っているのは、そのラボの主任であるジェイル先生に聞いたから。

あの人、賢すぎるだろ。すでに魔法世界の正体とその行く末を知っているんだぜ？それも膨大な演算や実験の末に自力で答えを導き出したんだから驚きだよ。

「“造物主の掟”……長いんで“鍵”と呼びますが……
アリアドネーに一本あるんです。それに、アリアドネーの学者の何人かは魔法世界の正体にたどり着いています」

「……そうですか。やはり賢いですね、アリアドネーの学者たちは。ところで、何故その情報をアウラ君が知っているのです？流石に一学生に教えられるような内容ではないと思うのですが」

「あー、“鍵”を研究している研究チームの主任と懇意にさせてもらっているんです。俺、成績が良いからそう言った情報を教えてくれるんですよ」

これは本当。ジェイル先生は、俺のことを高く評価してくれている。

卒業したら自分の研究室に來いとまで言ってくれているのだ。

アルさんは感心したような表情を浮かべた。

「なるほど、アウラ君も将来有望みたいですね。ちなみにアリアドネーにある“鍵”のランクは分かれますか？」

「聞いた内容を纏めて出た答えですが・・・恐らくマスターキーかと」

「造物主の掟」コードオブライフメイカーにはランクがある。

結構な本数がある（と思われる）マスターキー（以下MK）、7本しか無いグランドマスターキー（以下GMK）、たったの1本しかないグレートグランドマスターキー（以下GGMK）の三種類があり、それぞれの力関係としてはGGMK>GMK>MKとなっている。

リライトやリロケートといった機能はMKにも標準装備されているが、GMKからはさらに特殊機能が追加されている・・・らしい。

ちなみに“らしい”というのは、MK以外の“鍵”を見たことが無いからだ。

「マスターキーですか・・・ならリアドネーにあってもおかしくはないかもしれません。極少数にしかその存在が知られていませんが、あのアイテムは大戦時に“完全なる世界”が配下への装備品として多数投入していたみたいですし」

なるほど。なら、一本くらい鹵獲されていて当然だな。

アリアドネーは正体不明なアイテムの解析を依頼されることも多々あることだし、そっち方面から流れ込んできたのかもしれないけど。

アルさんとの会話が終わり、しばらく沈黙が訪れる。

次にその沈黙を破ったのは、詠春さんだった。

「さて、それでは本題と参りましょうか。アウラ君、貴方のご両親・
・ナギとアリカ姫のことをお話ししましょう」

ゴクリ、と生唾を飲み込む音が響く・・・・無論、唾を飲んだのは俺だ。

ようやく来た本題。今回、最も聞きたくない話であり最も聞きたい話でもある。

コホン、と軽い咳払いをした詠春さんは重々しい口調で話し始めた。

「結論から申し上げますと・・・行方不明です。色々と聞きたい事はあるかもしれませんが、どうか最後まで話を聞いてください」

「・・・はい」

行方不明ときたか。まあ、死亡よりはマシだと思っしか無い。

「先ほど話した戦いの後、私たちはすぐにイスタンプールを出たのです。あのまま同じ場所に止まり続けたらどんな追撃を受けるかわかりませんから」

そしてその推測は正しかった。

親父たちはイスタンプールを離れて1時間もしないうちに再び襲撃を受けた。

相手は、あのアーウェルリンクスを筆頭とした“完全なる世界”の幹部5人。ちなみに何番目のアーウェルリンクスかは不明。

親父たちが悪魔との交戦で消耗したところに仕掛けてきたアーウェ

ルンクスたちは、先ほどの悪魔以上の圧倒的な力を以て襲いかかって来た。

格闘、魔法、状況判断に先を読む力。そのいずれもが最強クラスであるアーウェルンクス達に親父たちは苦戦を強いられる。

だが、親父たちも苦戦を強いられ続けていたわけではない。

ふとした瞬間に訪れた攻勢の波に乗り、瞬く間に戦況をひっくり返して優位に立った親父たちは、アーウェルンクスを除いた他の幹部4人を殲滅することに成功する。

しかし・・・

「私に油断が無かった、と言えば嘘になります。防戦一方の状況をよくやく覆せたことで心が緩んでしまったのです」

そう言った詠春さんの表情は実に悔しそうだった。

詠春さんに生まれたほんの一瞬の隙・・・それこそ一秒にも満たないような刹那にアーウェルンクスは詠春さんの懐へと飛び込んだ。

防御不可なその手刀が詠春さんを貫かんとした時……親父がその手刀を掴んだらしい。

普通なら敵に手を掴まれば少なからず恐怖を覚える。だが、アーウェルンクスは違った。

「ヤツはナギに手を掴まれた瞬間、フツと笑い（……）ました」

その状況下において笑う（……）。それがどれほど難しいことか。

並の胆力で出来ることではない。多分、俺でも無理だ。

アーウェルンクスは親父に手を掴まれた状態で、あの恐るべきマジックアイテム……“造物主の掟”コードオフライフメイカーを取り出す。

そしてそのまま二人とも………“消えた（……）”。

親父をアーウェルンクスから引き離そうとして親父の腕を掴んだ母ちゃん諸共に。

部屋を沈黙が包む。

なるほど、親父と母ちゃんはアーウェルンクスと一緒に何処かへ消えたわけか。

“造物主の掟”コードオブライフメイカーを出したのなら・・・多分リロケートしたんだろう。
あの二人にリライトは効かないはずだから。

ていうか旧世界でも使えるんだな、あの“鍵”は。

「私たちはすぐに彼らを探しました。しかし、彼らの行く先を知る術は皆無で・・・申し訳ありません」

・・・What? 何で土下座なんぞしているんだ、詠春さんよ。

「私が・・・私のせいで貴方のご両親を「ストップ」・・・」

なんか声が震えてるんで、待ったをかけてみた。

全くまあ・・・何を言ってるんだか。

「状況を聞いている限りでは誰も悪くはない。そうでしょう？ミスをカバーし合うのが仲間です」

侍がそう軽々しく頭を下げちゃならんよ。

「確かに親父と母ちゃんは何処かへ消えちゃいましたが・・・多分、生きてますからまた会えるでしょう。折角助かった命ですから、大切にしてください」

「・・・・・・・・はい、ありがとうございます」

顔をあげて礼を言う詠春さん。

なんか、立場が違い・・・普通は諭す側が逆じゃね？

話が一段落し、小休憩を挟んでから再度話し合いをすることに。

俺は詠春さんの私室から程近い場所にある中庭に出てきていた。

見上げた空は、どこまでも分厚い雲に覆われた鉛色。まさに俺の心を代弁してくれているかのようだ。

「親父も母ちゃんも……消えちゃったか」

居なくなるかもしれないということはわかっていた。覚悟もしたつもりだった。

だが……やっぱり辛いな。うん、かなり辛い。

足元にあった小石をコツつと足蹴にする。

コロコロと転がった小石はポチャリという音を立てて池へと落ちた。

その波紋が広がった池を眺めると、水面には俺の顔が映っていた。

「はは・・・ひでえな。能面みたいだぜ」

自分で言うのもアレだが、俺は結構良い顔をしていると思う。なんせアウラだからな。

そのアウラから感情が消えたような表情。良い言い方をするならポーカーフェイス。

悲しいことに、俺は泣けない。

泣く機能は付いている。何故なら眼球の洗浄に必要だから。

でも、悲しくて泣く機能はとっくの昔に失った。何故なら、必要なかったから。

喜怒哀楽は感じるが、それに涙腺が結びつかなくなっただけ。

笑えるし、怒れるし、哀しめるし、楽しめる。だが、それらで涙を流すことはない。

種としては合理的な進化。だけど、人間としてはどうなんだろうな・
・・。

「まあ、どうでも良いか」

頭を振り、もう一度空を見上げる。

いつの間にか鉛の空から、フワリと白い物が舞い降りてきていた。

「雪か・・・」

そう言えば今日はクリスマスだ。つまるところ、ホワイトクリスマスというわけか。

この後催されるささやかなクリスマスパーティーは・・・ちよつと

参加する気にはなれない。適当な理由を付けて早めに抜け出そう。

両頬をパシンと軽く叩き、気合を入れる。

やるべきこと、考えることは山ほどある。

親父たちの追跡調査や魔法世界についての考察、俺や姉ちゃんの今後のことや・・・ああ、学業にも励まねばならんな。

へこたれている暇なんてない。悲しんでウダウダしているより、前を向いて歩きだした方がよっぽど有意義だ。

いつか親父たちが帰ってくる時が来たら、胸を張って迎えに行ける俺でいよう。

そう決意を新たにし、中庭を後にする。

——途中、頬に落ちた雪が融けて流れ落ちていった。

くアウラが知りえないお話く

「……あれで良かったのか？アル」

「ええ、上出来ですよ詠春。土下座までしたのですから、間違いないくアウラ君は先ほどの話を信じたでしょう」

「ああ……しかし悪いことをしたな」

「いえ、あれで良いのです。まだ本当のことを話すには早い。真実を話すには……もう少しアウラ君が成熟してからの方が良いでしょう」

「真実、か。本心と言うなら、告げたくはないが・・・」

「アウラ君の聡明さはアリカ姫に似たようですね……。あの子なら近い将来に自力で全てを解明してしまうと思います。それならば、余計な主観が混じる前に我々が真実を話すべきです。アウラ君の準備が出来次第に」

「そうだな、それが俺たち“紅き翼”に課せられた仕事。父親と母親をあの子から取り上げた我々にできる唯一の贖罪だ」

「はい、そうですね・・・」

「アル、東を・・・麻帆良を頼む。俺はこの西を統率できるように全力を尽くす」

「お任せください。来るべき時が来るまで、何としてでも持たせて見せます」

「プランは・・・当初の予定で行くか？」

「ええ、現在の状況から脱却するにはそれしかありませんからね」

「わかった。根回しと説得に時間はかかるかもしれないが……必ずやり遂げよう」

「私も準備をしておきます。いつでも教鞭を取れるように」

「俺もだ……忙しくなるな」

「暇を持て余すよりは有意義です。しかし……」

「しかし……なんだ？」

「詠春をこれ以上働かせたらハゲそうで怖いですね」

「ハゲんわ!!」

第三十四話（後書き）

姿を消した英雄と女王。

その息子である魔人は、悲しみを胸に秘めて歩き出す。

いつかまた、出会うその日のために。

※補足

Q エヴァの態度が何故か柔らかい？

A それは、アウラが“種族”という概念上において自分よりも高位に居ることを本能的に悟っているからです。

Q 実年齢的に見てアリカとアスナの関係性がおかしくない？

A 事実としては違いますが、アウラはそう認識しています。理由は、アリカがそう言ったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4054t/>

魔人の後継者

2011年11月30日16時11分発行